IS-オーズの力を使いし者-

コウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＩＳ－オーズの力を使いし者－

【Ｎコード】
Ｎ４６１３Ｖ

【作者名】
コウ

【あらすじ】
なんやかんやで転生することになってしまった主人公

はてさてどうなることやら

プロローグ（前書き）

実は前にあった仮面ライダーオーズ―私達の大好きな人―という作品の完成度の高さに感動し自分も書いてみたいと思い今回投稿してみました

幾分初めてなもので間違いやつまらないところはあると思いますが温かい眼差しで作者を見守ってください

プロローグ

目が覚めると幼女が土下座していたがなにこれ（@＿@）

「すいませんでした」
幼女がいきなり謝ってきた
「……ええと，とりあえずなんで謝ってんの？」
とりあえず聞いてみる俺。

かくかくしかじか

「えっと話をまとめると俺は神であるあんたは本来なら９０まで平凡だが幸せな人生を送れるはずがミスで心臓麻痺で死亡ってことでおｋ」

「はい、本当に申し訳ありませんでした」

”ポンッ”

いまだ土下座するに幼女の頭に優しく手を置き

「あ～もう死んだもんはしょうがないし、それにわざとじゃないんだろ」

「はい…　ですがそれでも許されることではありま「いいよもうこのやりとりもめんどくせぇし。今度からは気を付けること　はいこれで終了」そ、そんなぁ」

「それで俺はこのあとどうなるの？天国もしくは地獄に行くの？」

「それにつきましてはこちら側のミスなのでもう一度転生という形で違う世界で人生を過ごしてもらうことになります」

え～、正直天国ってどういうとこか興味あったんだがな

「むむっ、今変なこと考えませんでしたか？」

「べつに。んでどこの世界に行かせるつもり？」

「ラノベのＩＳって世界です。アニメになってるし知ってますよね？」

……はぁ？なにそれ？

「えっと幼女さん幼「幼女じゃないです　神様です」はいはい。んで神様俺知らないんだが」

「……えっ？知らないんですか？あんなに有名な作品をですか？」

「いや基本的にアニメやラノベはそんなに見ないし漫画だってジャ○プ、サ○デー、マガ○ンぐらいしか読まんし」

「そうですか…。でももう決定事項なのでその世界に行ってもらうしかないんですが？」

「はぁ～　行けばいいんだろ。んでその世界はどんな世界？」

簡単にまとめると女性にしか反応しない世界最強の兵器が存在してそれがＩＳ

そしてＩＳがの出現後、女尊男卑が当たり前になってしまった時代っと

うんめんどくさい（＊＾－-）ｂ

「それで行くのはいいが俺はどうしろと」

「生憎俺は一般人なもんでなんも出来ないぞ」

「はい。なので転生の特典としてＩＳは操縦できることともう１つ貴方の好きな専用機を用意します」

あー結局ＩＳってパワードスーツなんだからガンダムかもしくはライダー系が一番いいのか

だがガンダムはなんかなぁ違う気がする
となるとライダー系か
う～ん　俺が好きな作品はブレイド・カブト・キバ・オーズなんだがブレイドはジョーカになりそうだから却下　カブトはハイパークロックアップが鬼畜すぎるから駄目だし

キバはキバットやタツロットの存在がバレたらアウトだし
そうするとオーズか
まぁあれならいろんな相手に適用した戦い方が出来るからＯＯＯでいいか

「んじＩＳは仮面ライダーオーズでいい？」

「わかりました。ではこちら側で上手く設定しなおします」

「いろいろとわるいね」

「いえ、では第２の人生を楽しんでください」

神様はそういうと俺の目の前は真っ暗になった

プロローグ（後書き）

これ神様が幼女じゃなくてもいいと後々で気付いた

間違いがあったら報告してください

主人公設定

神谷　映司

元学生だったが神のせいで転生することになった主人公

性格はめんどくさがりだが根はまじめで優しく良い子である

また前世で恋愛をしていなかったので女子から好意鈍い

また女子からの積極的なアプローチには弱くあたふたしてしまう

ＩＳ設定

オーズ

爬虫類、恐竜以外のコアメダルを所有

この作品では同じコアメダルは三枚から一枚になり

また映司以外はコア並びにベルト、スキャナーを持つことが出来ない　（映司から離れた場合光の粒子となって消え映司の元に戻る）

コンボの疲労などはそのまま蓄積される

一話（前書き）

ものすごく大変だった

一話

はぁ～、なんだこの状況

前のやつ以外は全員女子

正直女子からの視線がうざい

なぜこのような状況になったかと言うと

――――――――――――――――――――

世界で初めて男でＩＳ動かしたという前代未聞の出来事が起こり世間は「やはり男でも扱えるのでは！？」という考えが広まった。

そしてあらゆるところで男性にＩＳを動かせるか試験を行った。

だがもちろん動かせる訳なくそのまま試験も無くなろうとしていた

しかしその矢先　俺が試験でＩＳを動かしてしまった。

そして晴れて世界で二人目の男でＩＳを動かせる人となった。

――――――――――――――――――――

とまぁ神様の有り難迷惑な好意のおかげで非常に大変だった。

やれ身体を調べさせてもらうやら、君にはついてきてもらうとか黒服の男達に言われ国外に連れてかれになった。

その度にいろいろと幸運な出来事が重なり今のところ無事にいられている。（ちなみにこれは全部神様のおかげなのだが映司は知るよしもない）

そして安全かつきちんと学業に励むため断腸の思いでいかなる組織、機関であろうと一切の干渉が許されないこの女子だらけのＩＳ学園に入学したというわけ

とまぁ今までの経緯を説明していると急に前の席のやつ

つまり俺と同じ男でＩＳを動かせるか－織斑一夏－が立ち上がり

「えーえっと，織斑一夏です。よろしくお願いします……以上です」

とまぁ当たり障りのない自己紹介をし終わると女子達はずっこけ、そして織斑は殴られた

殴られた（。ｏ。）！

「げっ千冬姉」

また殴られた

いやいや織斑（一夏）よいくら姉だろうがせめて先生ぐらいつけろよ

［ちなみに作者も中学時代兄が教育実習で来て同じ注意されたことがある］

「学校では織斑先生だ」

「先生、もう会議は終わられたんですか？」

「ああ、山田君。クラスへの挨拶を押し付けてすまなかったな」

「諸君、私が担任の織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物にすることが仕事だ。」

そして教室には困惑のざわめきではなく、黄色い声援が響いた。

正直うるせぇな
なんなんだこいつらは

「……毎年、よくもこれだけ馬鹿者が集まるものだ。　私のクラスだけ馬鹿者を集中させているのか？」

先生の意見に賛成
　きゃいきゃい騒ぐ女子達を、頭が痛くて抱えているので見たわけではないが声色はかなりうっとうしそうだ。

「で、満足に挨拶もできんのか、お前は」

「いや、千冬姉、俺は」

いやだから学習しろ
ほら頭を机に叩き付けられた

「織斑先生と呼べ」

「……はい、織斑先生」

と、このやり取りがまずかった。つまり、実の姉弟なのが教室中にばれてしまった。さっきまでとは別の好奇心の視線にさらされる事となり教室中がざわついた。

てかさここの後自己紹介すんの俺じゃん
こんな盛り上がった後にするなんてあんたら姉弟め
恨むぞ

一話（後書き）

今さらなんだがオーズもよりもリュウケンドーのほうにすればよかったと今更ながら後悔　ｏｒｚ

二話（前書き）

とりあえず徹夜で完成しましたがたぶん誤字や不自然なところは絶対あると思いますが許してください

二話

あの後とてもハードルが上がりかなりやりずらいなかなんとか無事自己紹介を終えることができた

そして一通り自己紹介を終えて

「諸君らにはこれからＩＳの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。よくなくても返事をしろ、私の言葉には返事をしろ」

全員綺麗なほどタイミングのあった返事をした。

その後山田先生によるＩＳの軽い説明も終わり、休み時間となった。

しかし教室の中だけではなく、廊下でも俺らのことを見ようとほかのクラスまたは学年から女子がかなり集まっていた。

いまならとても上野のパンダの気持ちがよくわかるよ。

そうすると前から織斑が

「唯一の男同士これからよろしくな神谷。」

と手を差しのべてきた。

断る理由ないどころか嫌われるわけにはいかないので

「ああ、それと俺のことは映司でいいよ。今後ともよろしくな。」

俺は織斑と握手した。

その時、さらに周りが盛り上がっていたがスルーだ。

「なら俺も一夏でいいよ。よろしくな。」

いや～笑顔がさわやかだね。

ほら何人かの女子がハートを射抜かれたじゃんか。

などと話し合ってると

「一夏」

と呼ぶ声が、見てみると大和撫子という文字が似合う女子がいた。

「箒」

どうやら一夏の知り合いらしい。

「・・・ちょっといいか」

どうやら一夏にあるようだ。

しかし俺を一人っきりにさせるのは抵抗があるのか少し戸惑っていた。なので

「あ～俺のことは気にしないで行ってこい。」

「悪いな。じゃまた後で。」

といい出って行ってしまった

やることがなくなり、さすがに女子に話かけに行くのもなんだかめんどいので入学前にもらったＩＳに関する参考書を見ることにした

しばらくすると一夏たちも戻ってき、軽く一夏と話していると織斑先生と山田先生が来て授業が始まった

・・・・・・

「ではここまでで質問のある人？」

授業も一通り終わり山田先生が、質問した。

入学前にだいたいを理解していたので今のところは平気だ。

しかしさっきから一夏の様子がおかしい。

どうもあせっているように見えるが、どこかわからないところでもあるのだろうか？

すると山田先生が一夏に近づき、

「織斑くん、なにかありますか？」

「あ、えっとーー」

「質問があったら聞いてくださいね。なにせ私は先生ですから。」

「先生」

なにやら一夏が腹をくくったのか手を挙げた

「はい、織斑くん」

本当に嬉しそうだな
あれで年上とは考えられん

「ほとんど全部わかりません。」

やりやがったよ、こいつウロボロスなみの衝撃はある発言しやがった

要約すると必読の参考書を間違って捨ててしまったらしい。

そしてまた織斑先生に殴られた

これはさすがに助けられないな

さすがに一人で一週間ですべてを覚えるのははっきり言えば無理である。

なので休み時間に教えることにした。

「なぁ、これはどうすればいいんだ?」

「ん、これはこのページを見ろ。それと『ちょっと、よろしくて?』

なに？」

「へ？」

てか今の声メズール・・・・・・・・・・えっ！！

振り向くと金髪の淑女といえる女子がいた。（〇´・∀、）＝３

「まあ！なんですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるんではないかしら？」

あー男尊女卑の時代によくいる人の中の１人か

こういう人は下手に刺激しないほうがいいな

「悪いな、俺君が誰だかよく知らないし」

こら一夏よそんなこと言ったら

「わたくしを知らない？　このセシリア・オルコットを？　イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを！？」

ほらーー　こうなるとめんどくさいんだから

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々のものの要求に応えるのも貴族の務めですわ。よろしくてよ」

「代表候補生って、なに？」

がたたっ！

「馬鹿野郎」

バシッ

一夏を参考書で叩いた

「いって～、なにすんだよ」

「無知にもほどがあるだろ。というかそのまんまの意味なんだから普通に察しろ」

普通にそんなこと疑問に思わないだろ

「いわゆるエリートってやつだ、いいか疑問に思うなそういうものと覚えろ」

「わかった」

「そう！　エリートなのですわ！そこの貴方のほうがまだ少し知性を持っているようですわね」

「そりゃどうも」

「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくす

ることだけでも奇跡…幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか、それはラッキーだ（棒読み）」

ばかっ！！　そんな棒読みで言ったら

「馬鹿にしていますの？」

「お前が幸運だって言ったんじゃないか」

「大体、あなた方はＩＳについてなにも知らないくせに、よくこの学園に入れましたわね。あなた達二人だけが唯一男でＩＳを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思っていましたけど、期待はずれですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが…」

一夏もうしゃべるな

俺まで被害を受けることになるんだから

「ふん。まあでも？　わたくしは優秀ですから、あなた達のような人間にも優しく接してあげますわよ。わからないことがあればまぁ泣いて頼まれたら教えても差し上げてもよくってよ。なにせわたくしは入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから」

「あれ俺も倒したぞ教官」

「は……？」

「倒したというかいきなり突っ込んできたのをかわしたら壁にぶつかって動かなくなったんだ　映司はどうだ？」

本当にこの子バカ　なぜここで俺に聞くはぁ～　さすがに嘘ついても後でバレたときやっかいだから正直に言っておくか。

「一応勝った・・・・」

「わ、わたくしだけと聞きましたが？」

「女子ではっつーオチだろ？」

「あなた！　あなたも教官を倒したっていうの！？」

はぁ～

「お、落ち着けよ」

「こ、これが落ち着いていられ――――」

キーンコーンカーンコーン

とちょうどいいところでチャイムがなった

納得できていないようだがとりあえず席に戻っていくオルコット

あ～なぜ俺はこんな厄介ごとに巻き込まなければならないのだ

とりあえずは前の一夏を叩かなければ

二話（後書き）

とても疲れた

アニメを参考にするのは辛すぎる

文では説明できないところがちらほら

小説買おうかな

三話（前書き）

とりあえず今回はちょっとした補足説明？みたいなものもあります

三話

時は過ぎ放課後

俺と一夏は教室で話し合っていた。

ちなみに内容は自宅通いのはずだったが大人の事情ということで寮で生活することになった。

まだここまではよかった。しかしその後のことで問題が起こった。

それは部屋についてだ

一応万が一の為に一人部屋というものが用意されていた。しかし数が一つしかなくどっちかが女子との相部屋となってしまうのだ。

だがそれだけは絶対に避けなければならない。

だが一夏も同じ考えのようで話し合いは平行線を辿っていた。

するとそこに

「何をしている」

織斑先生がやってきた。

とりあえず、今までのいきさつを言うと、

「ならば、神谷お前が一人部屋だ。」

いぇ～～～～～い

「なんでだよ千冬姉」

「少なからず神谷よりかはお前のほうが問題を起こさなそうだからだ」

ひどいことを言われているがこの際気にしない。

「それに安心しろ。同室の相手はお前のよく知っているやつだ。」

「わかったよ・・・」

一夏はあまり納得してなさそう顔をしていた。

ドンマイｂ

・　・　・　・　・　・

一夏と寮に向かっているのだが後ろからぞろぞろと女子がついてくる。

さながらハーメルンの笛吹き男のような光景だったがスルーしておこう。

「初日からこれじゃ先が思いやられるな」

一夏はぼやいたので

「慣れだな」

と軽くアドバイスした。

寮につき部屋にまで向かった。

ちなみに一夏の部屋は１０２５号室で俺は１０２４号室とお隣さんだった。

「ここか、んじゃ映司また後でな」

「はいよ、間違いだけはおかすなよ」

「しないって」

とりあえず部屋に入ってみたがどんだけ豪華なんだよ。

しばらくすると隣の部屋からものすごい物音と悲鳴が聞こえてきた。

あいつはなにをやってんだよ

・・・・・・・・・

次の日の朝、食堂に行くと一夏と篠ノ之がいた。

しかしあまりよくない雰囲気だった。

あいつなにかしたな。

「あ、映司おはよ」

「あ～一夏おはようさん」

とりあえず一夏の隣に座った

「お前は確か昨日一夏と話していた・・・・・」

「神谷　映司だ　よろしく」

「あ、ああよろしく」

「ちなみに、箒は俺の幼馴染で同室なんだよ」

「名前で呼ぶな」

おい本当に幼馴染か

「映司君、隣いいかな？」

すると三人組の女子が話しかけてきた。

「ん、別にいいが」

奥の二人がガッツポーズをしていたが気にしないでおこう。

「あ、織斑君と神谷君って朝すっごい食べるんだ」

「男の子だね」

「ていうか女子は朝それだけしか食べなくて平気なのか？」

するととても気まずそうに

「あ、はは～　私たちはねぇ」

「う、うん　平気かな」

それと笑顔で

「お菓子よく食べるし」

などと話しているとと

「私は先に行くぞ」

「ああ　また後でな」

それから一夏と箒の関係性やら俺の部屋のことなどを話しているとと

パンパン

「いつまで食べている　食事は迅速に効率よくとれ」

「私は1年の寮長だ　遅刻したらグラウンド10週させるぞ」

なんか一夏がボケッとしているがお前走らされるぞ

・・・・・・

今クラス対抗戦に出る代表者を決めようとしている

んなめんどくさいもんに出るもんか

とりあえず推薦という形になった

「自薦他薦でもかまわない誰かいないか」

すると1人の女子が

「はいっ！織斑くんを推薦します！」

「私もそれが良いと思います！」

よしよしこれでらｋ「私は神谷くんがいいです」

おいこら　貴様なんてこと言いやがるそんなこと言ったら

「私も神谷くんがいいとおもいます」

ほらーー

「さて、他にはいないのか？いないのならこのまま織斑か神谷がクラス代表だぞ」

待てよここでことわｒ「ちなみに他薦されたものに拒否権などない」

なんだろうもう楽して生きていくことは無理なんだな

漫画のセリフにも人の夢と書いて儚いと読むとあったし

と落ち込んでると

「待ってください！納得がいきませんわ！」

オルコットが納得いかないらしく抗議し始めた

いいぞー　この際あんたか一夏のどっちかになってしまえ

「そのような選出は認められません！大体、男が……クラス代表だなんていい恥曝しですわ！」

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で極東の猿とこの人にされては困ります！」

「いいですか！？クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ！」

「だ、大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で――」

それは話が別だぞ

まぁ言わないがね

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

「なっ……！？」

えっ　イギリスってまずいでそんな有名なの知らなかった　紅茶のイメージは強いが
てか一夏よ　それを言ったらお前も同罪になるぞ

「あっ、あっ、あなたねえ！わたくしの祖国を侮辱しますの！？」
あ織斑先生が笑ってる
織斑先生　止めなくてもいいが楽しまないでよ

「決闘ですわ！」

「おう。いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い――いえ、奴隷にしますわよ」

「ハンデはどんくらいつける」

「あら、さっそくお願いかしら」

「いや俺がどんくらいハンデをつければいいか」

すると教室中で笑いが起こった

いろいろと言われているが別に言いたい奴には言わせておけばいい
大事なのは結果さえ出しちまえば早い話だ

まっ俺は出さないが

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑と神谷とオルコットはそれぞれ用意をしておくように」

やっぱりか　　ｏｒｚ

（あっ、もうちょっと続くよ）

「ところで織斑、お前のＩＳだが準備まで時間がかかる」

「へ？」

「予備機がない。だから、少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」

「ん？」

どうやら一夏は千冬さんが言っていることが理解出来ていないみたいだ

安心しろ。俺もよくわかっていなかったが、専用機と言った所で、大体は理解出来た

「せ、専用機！？一年の、しかもこの時期に！？」

「つまりそれって政府から支援が出てるってことで……」

女子が羨ましそうに一夏を見る

当然だな

本人はその重要さがわかってないみたいだが

「ぼそっ）おい一夏参考書の４ページ見ろ」

「ああ」

1．ＩＳは世界に４６７機しか存在しない

2．コアは篠ノ之博士以外作れない。博士はコアをもう作っていない

3．割り振られたコアで研究・開発・訓練を行う

4．コアの取引は禁止

とのこと

「あ～」

あ～じゃねえよ

あんだけ教えてやったろ

「つまりそういうことだ。本来なら、ＩＳ専用機は国家あるいは企業に所属する人間しか与えられない。が、お前の場合は状況が状況なので、データ収集を目的として専用機を用意されることになった」

「それじゃあ映司は？」

「一応持ってるぞ。」

ちなみにこのことは事前に学園側には報告してある。
一応企業が俺専用機（オーズ）をくれた
これは神様が用意しておいてくれた企業（世界でも上位に入る大企業）で特に困ったことはされていない。
もちろん４６７機のうちに含まれている（神が適当なコアとオーズを交換した）がもちろん神様特製なので発明者の篠ノ之束にばれたら少しまずいがなんとかなる

「本当か？よかった～」
いや一夏なぜお前が安心する

・・・・・・・

今は放課後どうやら一夏は篠ノ之のもと訓練するらしく今は剣道場で稽古をするらしい。
篠ノ之　（箒）はまぁ剣道の全国大会で優勝したほどの実力を持ち姉がＩＳの発明者だから一夏のほうは安心だ
ちなみに俺も誘われたが断った
理由は簡単　剣道は前世の体育の時間でやった程度で数日でなんと

かなるものではないし、オーズでの戦いに正直剣道はあまり役に立つとはいいずらい。

とりあえず転生から今にいたるまでに起こったことやわかったことを言うと

1、転生してまず気が付いたことが身体能力が各段に上がったり、視力が良くなったっていた

　簡単に言えば現実世界からＭＡＲの世界に来た時のギンタのような状態であった。

2、一度だけ神様が俺をディメンションＡＲＭ　修練の門に強制的に入れ修行（いろいろなヤミーやギルを除くグリードと闘わされた）のおかげで状況に応じた戦い方など、かなり強くなれた

　そしてこの時にセルメダルを自由に出すことができることなどがわかった。

3、またメダジャリバーは空間を切ることはできなくなっているとまぁざっとこんなもんかな

後でアリーナの使用許可を得て一通りの組み合わせを確認するか

・・・・・・

そして決闘当日　　組み合わせはまず神谷　映司ＶＳセシリア・オルコットとなっていた

三話（後書き）

本当におもしろいか不安になります

また自分の無理矢理の設定に納得いかない人もいると思うと怖くて仕方ない

四話（前書き）

他の作家さんのように戦闘シーンなのに長く書けないやはり経験値の差か

四話

一応ＩＳスーツに着替えアリーナの控室に行くと一夏たちがすでにいた

「よお、映司調子はどうだ？」

「まあ、そこそこ」

「映司らしいな。そういえば俺が箒と稽古している間何していたんだ？」

「いろいろ。説明すんのめんどいからそこらへんは勝手に解釈してくれ。」

などと話しているとモニターが出て、そこにはオルコットがうつっていた。

「あれがあいつのＩＳか　んじゃそろそろ行くか」

「おう頑張れよ」

「まあなんだ、頑張れ」

意外や意外

まさかの篠ノ之が俺にエールを送るとは

「了解　んじゃ」

待機状態のブレスレットからオーズドライバーとコアメダルをしまっているケースにして。

そしてドライバーを装着して、どのコアメダルにすればいいか悩んでいる

う～ん、ここは

無難にタトバかそれとも別の亜種形態にするべきか

とりあえずコンボはダメだし・・・・・・タトバでいいか

両端にタカとバッタをいれ、真ん中にトラを入れるとドライバーを傾けオースキャナーで三枚のメダルをスキャンして

「変身！」

【タカ！トラ！バッタ！タトバ♪タトバタトバ♪】

「映司そのＩＳって・・・」

無理もないＩＳらしくないＩＳだ

というより元がＩＳじゃないからな

「まぁ　ちょっと変わったＩＳだと思ってくれ」

「ちょっとなのかあれは」

篠ノ之がなにか言っていたが気にしないでおこう

ちなみにちゃんと所持している武器やらシールドエネルギーの残量などはきちん表示されている。

そしてオルコットの専用機―ブルー・ティアーズ―の情報も見たが遠距離射撃型のＩＳかオーズと基本的にあんまり相性良くないな

序盤であいつの攻撃パターンを把握しておくか

「さて　行ってくる」

バッタレッグの跳躍力を使いアリーナにまで跳んで行った

「なんでカタパルトデッキを使わないんだ？」

一夏と箒の疑問に

「あいつのＩＳは基本飛行することはできない」

千冬が答えた

「千冬姉どういことだよ」

「織斑先生だ馬鹿者　詳しいことはいまだわかっていないらしい

まったくそんなものをＩＳと呼べるのか」

「しかし　あいつの実力はかなりのものだが・・・」

ぼそっと千冬は誰かに聞こえないくらいの声で呟いた

・

・　・　・　・　・

・

「あら　飛行できないＩＳとは。まさに愚かな男にはぴったりの欠陥品ですわね。」

ちょうど見下す感じになっているのでより性格が高圧的な態度になっている。

「・・・・・・」

特に言うことがなく黙っていたら、どうやら無視したと勘違いしたらしく

「男のくせに私のいうことを無視するなんて・・・・」

怒っちゃった　てへ（・ω＜）」↑

と突然一警告一敵ＩＳ射撃体勢に移行と出た

はぁ～

溜息と同時にメダジャリバーを持ち

「さてどうでることやら」

スターライトｍｋＩＩＩと呼ばれるようはビームライフルを撃ってきた

前にも言った通り身体能力、視力やらが格段に上がっているのでこの程度を避けるのになんともない。

必要最小限の動きで交わし続けた。

「さあ、踊りなさい。わたくし、セシリア・オルコットとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲（ワルツ）で！」

「悪いが踊りは大嫌いなんだよ」

まだ攻めに行くには早すぎる

こんなことを続けていたら

「このブルー・ティアーズを前にして初見でこうまで耐えたのは貴方が初めてですわね　褒めて差し上げますわ」

「そりゃどうも」

「でもそろそろ終曲（フィナーレ）と参りましょう」

するとオルコットはブルー・ティアーズと呼ばれるビット型の武器をとばしてきた。

さすがに空中ならまだしも地上で全部の攻撃を避けるのはきつい

付け加えてさっきタカヘッドであいつのＩＳを見たところセシリアの腰部から広がるスカート状のアーマー部分に何か仕込んである。

大方むやみやたらに近づいたところをあれで迎撃用のミサイルか何かで落とすというあいつの戦法だろう。

とりあえず避けきれないのはメダジャリバーで弾き返した。

・・・・・・

一夏Ｓｉｄｅ－

すごい

ただただそれだけしか浮かばない

だってそうだ　飛行できなく尚且つ武器も剣だけと

セシリアと相性は最悪なはず
なのに映司はさっきからぜんぜん攻撃はしてないものの一回もあの射撃やビット攻撃をくらっていない。
俺もあんな風にできるのか

映司Ｓｉｄｅ―
どうやら相手さんも攻撃が一切あたらないのが気に食わなくいらついてるのか、さっきからビットの動きが雑になってきている。
そしてとうとう

「いい加減に落ちなさい」

するとビットが全部俺を囲むような形になり始めてきている。
どうやら個々でやるよりビットで俺を囲み一斉射撃で避けられないようにすればいい話だ

だがわるいがビットの弱点―ビット自身の制御で精一杯でその間オルコットはビームライフルで攻撃できないということ―はわかってる。

そしてビットが徐々に俺を囲む形ができ始めているなか俺は避けながらメダジャリバーにセルメダルを三枚投入してスキャナーでスキャンし「トリプル！　スキャニングチャージ！」という音声が流れた。

「今更遅いですわ」

「残念　そうでもねーよ」

そしてメダジャリバーを振ると衝撃波が発生し、オルコットに向かっていった

「なっ」

まさか遠距離からの攻撃を予測していなかったので、慌てて回避した。

さらに2，3回続けて衝撃波を出した

するとセシリアは避けることで頭一杯になってしまいそのおかげでビットの操作を疎かにしてしまい、少なからず隙を与えてしまった。そんな絶好の機会を映司が見逃すわけではなく、その隙にトラからウナギ、バッタからチーターのメダルに変えまたドライバーを傾けスキャンした。

【タカ！ウナギ！チーター！】

この包囲網を抜けるため脚部のメダルの中で最速のチーターにして、相手を捕縛して動きを止める＋電撃で相手にダメージを与えるためウナギに変えた。

そして次の一瞬でビットの包囲網を抜け出した。

「そんな」

急な出来事に驚くことしかできないセシリアに追い打ちをかけるように電気ウナギウィップで打ち据え、そして捕縛した。　むろんこの時はきちんと電撃は流している。

そしてだいぶシールドエネルギーを削ったのでまたタトバに状態を戻して、スキャニングチャージした。

するとバッタ脚に変化したバッタレッグで跳び上がり、空中に赤・黄・緑の３つのリングが発生してそこを潜り抜けて両足蹴り一タトバキック一を叩き込んだ。

プーーーーーーーーー
そこでブザーが鳴り

「勝者　神谷映司」

四話（後書き）

とりあえず最近やたら寝る時間を削っているせいか少し体調があまりよろしくない

なので何日かは投稿出来ないのでご了承を

五話（前書き）

まさかの投稿

とりあえず即興で作ったのであまり期待しないでください

五話

一夏Ｓｉｄｅ－

「千冬姉さっきの試合の途中で映司のＩＳの腕と足の部分が変わったように見えただんだが」

もっともな疑問である

普通ＩＳがあんなに変わるようにはなってない

しかし映司のＩＳは飛行能力はなく、尚且つメダルを変えただけでその部分を変えることができる

「あれがあいつのＩＳの最大の特徴らしい。頭、腕、足の３つそれぞれをあのメダルで組み合わせることによってあらゆる敵に対応できるらしい　まったく束も馬鹿げたもんを作ったものだ」

それを聞いて自分のＩＳに不安を覚えてしまった一夏である

映司Ｓｉｄｅ－

とりあえず変身を解除した

しかし次は一夏の番か

また俺が出るとなったらものすげぇーだるいな

などと考えていてふとセシリアを見るとかなり落ち込んでいた

「わ、私が男なんかに…」

どうやらあいつは男の俺にしかもかなり一方的に負けたのがどうやらそうとう堪えたらしい

しかもあいつはイギリスの代表候補生

少なからず母国を背負っているという気持ちがかなり強いので今の試合の自分の不甲斐なさにはもうねぇ……

ちっ見ていて気分が悪いな　しょうがない

「おい、オルコット」

「な、なんですの」

「ど、どうせ馬鹿にするおつもりなんでしょ」

うわ～　そうとう辛かったのか今にも泣きそうじゃないか

だがこのまま帰っていったらクラス中で性悪な男というレッテルを貼られてしまう

「あの～さ　別に今の試合でお前のことを馬鹿にしたりなんかはしないし、する気も微塵もない」

「同情なら結構ですわ」

オルコットの前に行きしゃがんでオルコットと目線を合わせた

「同情って訳じゃないがとりあえず聞いて欲しい」

「まず男だからってあんまり嘗めないでもらいたい。　今回はお前のその男にはより慢心するという性格を利用していつものあんたの戦闘のパターンを崩したんだ」

途中でビット操作を荒くさせたのと焦らせて勝利に急がせた

普段はどうか知らないがたぶん今回ほど自分のペースに持ち込めなかった試合はないだろう

「だからさあそこら辺は少しは考えを改めてくれないか」

「少なからず俺も協力してやるからさ」

と言って軽く頭を撫でた

実をいうと前世で部活やっているときの後輩によく落ち込む奴がいた。そしてその度に俺が頭を撫でて励ましてやっていた。そのせいで軽い癖となってしまったのだか

「・・・っ／／／／」

オルコットを見ると顔が赤い・・・・・やばっ、また怒らせたか

とりあえず撫でるのやめ

「すまん　人の頭を撫でるのが癖みたいで勝手にしてしまった。わりぃ」

「だ、大丈夫ですわ」

どうやら怒ってなかったみたいだ　（´。、；）＜フゥ

しかし映司は気が付いていなかった

撫でるのをやめた瞬間、セシリアが少し寂しそうな顔をしたのを

・・・・・・・・・

控室に戻ると一夏、篠ノ之、織斑先生、山田先生がいた。

「やったな」

一夏と軽くハイタッチした。

「ま、まあまあだな」

「篠ノ之の言うとおりだ　時間をかけすぎだ馬鹿者が」

篠ノ之と織斑先生は辛口なコメントなことで

「でも本当にお疲れ様です」

山田先生　貴方はなんていい人なんだ

「あ、それで織斑先生次の試合の組み合わせって・・・・」

とりあえず織斑先生に聞いてみると

「ああ、これだ」

ディスプレイには

ー織斑一夏ＶＳセシリア・オルコットー

と表示されていた

「ちなみにどっかの馬鹿者のせいで予想以上に長引いてしまったからな。織斑、明日オルコットと試合をしてもらう。いいな」

「ああ」

「はいだ馬鹿者が」

また殴られてるよ

次の日　（原作とほぼ一緒の展開なのでここでは省かせてもらいます　すいません）

「よくもまあ、持ち上げてくれたものだ。それでこの結果か、大馬鹿者」

試合が終わり、織斑先生に怒られている一夏

敗因が、武器の特性を考えずに使ってしまったからだ。

しかしまさか単一仕様能力が相手のエネルギー兵器による攻撃を無効化したり、シールドバリアーを斬り裂いて相手のシールドエネルギーに直接ダメージを与えられる代わりに自身のシールドエネルギーを消費するとは一夏のもかなりピーキーなＩＳだ

「何にしても今日はこれでおしまいだ。帰って休め」

「あ、一夏、篠ノ之は先に戻ってくれ　俺は少し織斑先生と話があるから先に戻っておいてくれ」

「わかった　またな」

「あいよ」

そして一夏たちが去っていくのを確認した後、

「それで話とはなんだ」

「実は・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

・　・　・　・　・

・　・　・

セシリアＳｉｄｅ－

シャワーを浴びながら、セシリアは物思いに耽っていた。

「神谷　映司・・・・・」

ただ一言、セシリアは呟くと顔は恋という名の、熱病に冒された少女の如く赤くなる。

神谷映司と織斑一夏両者とも今まで出会ったどの男性とも違う、誰かに媚びることも無く、何かの強い意志が篭っていると言えるあの強い眼差し。（映司の場合は違うがセシリアからはそう見えてしまった）そしてなにより映司に頭を撫でられた時のあの温かく、優しい気分

「父とは違う、強い男性……」

セシリアは思い出す。自分の父親のことを、彼女の父親は名家に婿入りした男性だった。

それ故に多くの引け目や柵があったのだろう、いつも他者の顔色を伺っていた人間で、そんな父を母も鬱陶しく感じていたらしい。

ＩＳが発表されて女尊男卑の今の社会が構築されたら、父の態度

は今まで以上に加速した。
　情けなく、威厳というものもプライドさえもなくなる父の姿を見て、自分は絶対に弱い人とは結婚しない、と幼心に誓ったのも懐かしく感じるほどの昔だ。

　だが、そんな両親はもういない、３年前の鉄道事故で二人揃って亡くなったからだ。
　どうしてその日に限って揃っていたのかなんて今はもう分からない、ただ言えるのは自分はあの日から茨の道を歩む事を運命付けられたという事だけだった。
　莫大な両親の遺産を狙ってやってくる金の亡者どもから、遺産を守る為に必死で勉強をしながら藁に縋る思いで受けたＩＳ適正試験、そこで出た判定はＡ＋という非常に高い適正で、国から提示された条件も遺産を守ることにも好都合な条件ばかりだったので、飛びついて努力した。

　そして日本に自分の専用機である【ブルー・ティアーズ】の稼動データを取る為に来日、そこでようやく出会えた。

「私の理想の男性……神谷　映司　……」

五話（後書き）

なんかフラグのたてかたがいまいちなんだよな

Ａｒｉｓｈｉａさんの作品で魔法少女リリカル……なんとか

あれほど綺麗なフラグのたてかたは本当に尊敬しますね

六話（前書き）

二回も執筆中に消してしまいテンションだだ落ちの中で書いたので
あまり期待しないで

六話

一数日後　授業にて一

「ではこれよりＩＳの基本的な飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコット。試しに飛んで見ろ」

織斑先生に呼ばれた一夏とセシリアは、すぐにＩＳ専用機を展開させる

一夏は白い機体が特徴な『白式（びゃくしき）』、セシリアは青い機体の『ブルー・ティアーズ』

ちなみに俺のＩＳは一応コンボさえすれば飛べるが、さすがに授業でコンボはあまりとかいうかかなり使いたくない。

コンボの後はかなりの疲労が溜まるから、その後の授業が大変きついものになってしまう。

しかしそれはあまり良くないので織斑先生に相談したところ、意外とすぐさま許可してくれた。

ある程度飛んだあと

「織斑、オルコット、急下降と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチだ」

「了解です。では一夏さん、お先に」

セシリアが一気に急下降して、千冬さんの言った目標の位置辺りで停止する

次に一夏が下りてくるのだが、あいつかなりグラついているなこれは墜落するな

そして映司の思った通り、急下降をした一夏が完全停止出来ずに地面に激突

あ～あ　やっちゃたよ

とりあえず一夏のところに向かった

「お～い　死んだか？」

「生きてるよ」

「馬鹿者。誰が地上に激突しろと言った。グラウンドに穴を開けてどうする」

すんげー穴これどうすんの

「……すみません」

「情けないぞ、一夏。昨日私が教えてやっただろう」

確か「ギュンッ！といって、ぐっと止まる」だっけ

擬音語のオンパレードじゃないか

しかも本人はそれで教えたつもりでいるらしい

おー怖い怖いε－　（´－｀＊）

・・・・・・

「という訳でっ！織斑くんクラス代表決定おめでとう！」

「おめでとう～！」

クラッカーが一斉に鳴らされる
夕食後の自由時間に寮の食堂を貸切、一組のメンバーが集まっていた

「なんで俺がクラス代表なんだよ？」

「ああ、それは俺とオルコットがクラス代表を辞退したからだよ
なぁオルコット」

「はい　それにまぁ大人げなく怒ったことも反省しまして一夏さん
にクラス代表を譲ることにしましたの」

あれからずいぶんと性格が良くなってきているので嬉しいかぎりだ。

ちなみに俺は本当なら出るのを断ろうとしたのだが

「いっち～！」

「だからその呼び方はやめろ」

俺の腕に嬉しそうに抱きついている―布仏（のほとけ）　本音（ほんね）―
こいつに無理やり連れて来られたからだ

しかもこいつはやたら俺に懐いてしまっている

ちなみに席の座り方は主役の一夏が真ん中、左隣が篠ノ之、右隣がオルコット、篠ノ之の隣が布仏
んでその布仏の隣の端の席が俺となっている。
んオルコットの隣？・・・・・・・・まぁうん気にすんな

そしてわかるように俺らとオルコットは席の並びから自然と見えてしまう。

よって

「な、何やってますの／／／／！？」
バレてしまうわけ

「ん～？　いっち～に抱き着いてた～」

満面な笑みでこの子はなんてこと言ってんだよ

「は、破廉恥ですわ！／／／／」

「いいから離れなさい！」

「え～」

え～じゃないよ

普通にダメだろ

「うーん。だったら、せっしーも抱きつけば良いんだよ～」

（ゞノ・∀・、）ナイナイ

「それならば…／／／／」

おいこら、まず否定しろ

などとしているとと

「はいは～い、新聞部でーす。話題の新入生、織斑一夏君に特別インタビューをしに来ました～！」

めんどくせーのがまた来た　＞（ＴｏＴ；）＜

「あ、私は二年の黛薫子（まゆずみかおるこ）よろしくね。新聞部副部長やってまーす。はいこれ名刺」

などと軽いインタビューをし終えると今度はこっちに来た

「君が神谷　映司だね」

「違います」

「それじゃあ、何で織斑一夏くんに、クラス代表を譲ったのか教えて」

聞けよ

「はぁ～　んまぁ強いて言うなら面倒だから押しつけた」

えーやりたくないともそんなめんどくさいもの

「はぁ、そうなのか！？」

なんか言ってるがスルーで

「それじゃあ最後に写真撮るから、とりあえず二人並んでね。」

はぁ

「あの～」

「ん、なんだい？」

「なぜ俺なんすか？　普通一夏なんじゃ」

「いいのいいの。ツーショットもらうよ。あ！握手とかしてると良いかもね」

「そ、そうですか……そう、ですわね／／／／」

何故かモジモジとし始めたオルコット。まあ、握手とか恥ずかしいしな

「あの撮った写真は当然いただけますわよね？」

「そりゃもちろん」

「でしたら今すぐ着替えて――」

「時間かかるからダメ。はい、さっさと並ぶ」

副部長さんが俺とオルコットの手を引いてそのまま握手まで持って行く

「……／／／／」

頬を赤くして黙り込むオルコット。俺も女子と手を繋ぐなんてそう無いがこういうときにこそ平常心っと

「それじゃあ撮るよー。１８７８２（嫌な奴）＋１８７８２（嫌な奴）は～？」

「……３７５６４（皆殺し）」

「せいか～い」

おいこれ写真撮るときにいうもんじゃないぞ

そして、デジカメのシャッターが切られたのだが……

「なんで全員入ってる……」

一組の全メンバーが撮影の瞬間に俺とセシリアの周りに集結。その行動力に恐怖を感じたよ

「あ、あなた達ねえっ！」

「まーまーまー」

「セシリアだけ抜け駆けはないでしょー」

「クラスの思い出になっていいじゃん」

「ねー」

「う、ぐ……」

苦虫を噛み潰したような顔をしているセシリア

逆にクラスのみんなはにやにやとした顔で眺めている

「つか、何で一夏まで？」

「いや、面白そうだったから」

……まぁいいが

この後も『織斑一夏クラス代表就任パーティー』は続いた

六話（後書き）

ちなみにのほほんさんがなぜ映司のことをいっち～と呼ぶかと言うと

単純にのほほんさんが呼びそうな名前で尚且つ違和感が無いのものと考えたとき

かっち～…ビミョー
みっち～…中学ＭＶＰのシューターじゃん
えっち～…まず最初に候補から消した
いっち～…まぁまぁ

とそれとモバゲーの恋愛小説で自分が好きなヒロインが主人公を呼ぶ際いっち～と呼ぶのでこれにしました

誠に勝手に決めてしまいすいませんでした

七話（前書き）

劇場版仮面ライダーオーズ見てきました

まず例年通り戦隊物からですが去年のゴセイジャーと比べたら雲泥の差でゴーカイジャーがおもしろかった

しかし前に座っていた男の子が一言「つまんなーい」

ｏｒｚ

次のオーズ

もうやばい

具体的には言えんがものすごくやばい

ぜひみなさんも見てください

七話

「もうすぐクラス対抗戦だね」

「そうだ二組のクラス代表が変更したって聞いてる」

「あ～、なんとかって転校生に変わったんだよね」

織斑先生が来るまでの間、俺、一夏、オルコット、布仏、その他たち数人で軽い雑談をしていた

しかし今さら変わるとなると相当な実力者か、はたまたただ単に運がよかったのか

よくわからないがまぁ戦うのは一夏なので俺はそれ以上深く考えるのをやめた

しかしなんとかってせめて苗字くらいは知っておけよ

「転校生？今の時期に？」

「うん、なんでも中国から来た子だって」

「ふん、わたくしの存在を今更ながらに危ぶんでの転入かしら」

「どんなやつだろう　強いのかな」

一夏がスルーするとはあいつ成長してんな

「今のところ専用機を持ってるクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

「――――その情報、古いよ」

「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

声をしたほうを見るとツインテールの髪に小柄な体格をした女子がいた。

「鈴……？お前、鈴か？」

一夏と知り合いらしい

「そうよ。中国代表候補生、凰鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

すると教室がざわついた

当然だ今までノーマークだった組に急に代表候補生が来たんだ

「鈴、何格好付けてるんだ？すげえ似合わないぞ」

「んなっ……！？何てこと言うのよ、アンタは！」

すると後ろから現れた人物に中国代表候補の凰とやらは殴られた

「なによ！？」

「もうＳＨＲの時間だぞ。」

「ち、千冬さん・・・・」

「織斑先生と呼べ。さっさと戻れ、邪魔だ」

「す、すみません・・・・」

完全にさっきと態度が違うじゃねえか　あれはたぶん織斑先生に何かしらの恐怖をうえつけられたな

パシッ

その瞬間チョークが俺の顔面もとにめがけて投げられた。

身体能力の向上のおかげでなんとか掴むことが出来たがノーモーションであんな神速のスピードのチョークを投げるとはこえーー（（（（（ロ　。　；）））））アワワワワ

「神谷後で職員室に来い　逃げたら・・・・・・・・・・わかってるな」

・・・・・・・・・・・・・泣いていいかな

「また後で来るからね！逃げないでよ、一夏！」

なんか言ってるが今は至極どうでもいい

ー昼休み食堂にてー

「びっくりしたぜ。お前が二組の転校生だとはな、連絡くれりゃよかったのに」

「そんなことしたら劇的な再開が台無しになっちゃうでしょ」

「なーお前まだ千冬姉のことが苦手なのか？」

「そ、そんなことないわよ。ちょっとその・・・得意じゃないだけよ」

凰は注文のラーメンを受け取ると、

「相変わらずラーメン好きなんだな。ちょうど丸一年ぶりになるのか、元気にしてたか？」

「げ、元気にしてたわよ。アンタこそ、たまには怪我病気しなさいよ。」

「どういう希望だよそりゃ」

一夏と凰が話している間、ずっと篠ノ之が睨みつけていたが二人は知る由はない

「んで、いつ代表候補生になったんだ？」

「アンタこそ、なにＩＳ使ってるのよ。ニュースで見たときびっくりしたじゃない」

「俺だってまさかこんなとこ来るとは思わなかったからな」

次々と会話に花が咲く二人

「一夏、そろそろどういう関係か説明してほしいのだが」

「べ、べ、別に私は「ああ、悪い。鈴はただの幼なじみだ」・・・」

「ん、どうかしたか？」

「なんでもないわよ」

「幼なじみ・・・・・？」

怪訝そうな声で聞き返す篠ノ之。

「あーそうかちょうどお前とは入れ違いに転校してきたんだよな」

そういうことね

「篠ノ之箒。ほら、前に話したろ？箒はファースト幼なじみでお前はセカンド幼なじみてとこだ」

「ふうん、そうなんだ」

「初めまして。これからよろしくね」

「ああ。こちらこそ」

「んんんっ！わたくしの存在を忘れてもらっては困りますわ。中国代表候補生、鳳鈴音さん」

「……誰？」

同じ代表候補生として、挨拶をしたが、その一言

「なっ！？わ、わたくしはイギリス代表候補生、セシリア・オルコットでしてよ！？まさかご存じないの？」

「うん。あたし他の国とか興味ないし」

「な、な、なっ……！？」

言葉に詰まりながらも怒りで顔を赤くしていくセシリア

しかし、本当に興味のない顔をしているな

「い、い、言っておきますくけど、わたくしあなたのような方にはまけませんわ」

「そ。でも戦ったらあたしが勝つよ。悪いけど強いもん」

少し遡って　映司Ｓｉｄｅ－

いざ職員室に着くと

「来たか、よしではさっそく肩を頼む」

ようは揉めと。まぁその程度で許してくれるなら
周りを見るとあんまりいなかった　たぶん食堂にでも行ってるんだろう　知らないが
とりあえずオーソドックスに揉むと

「こんぐらいの力加減でいいっすか？」

「ああ、頼む」

しかし

「結構凝ってますね。」

「いろいろと大変なんだ貴様らみたいな馬鹿を生徒に持つと」

「すいませんねぇ」

「なんなら頼んだら暇な時ぐらいしますよ」

めんどいがね
いつも迷惑掛けてるから
少し罪悪感が・・・・・・
「ほう、だがそんなことで成績を何とかしてもおうという考えは無

駄だぞ」

「はぁ～、別にそんなんじゃないですよ」

「ふっ、だがその時は頼んだぞ」

「なっ／／／／」

不意とはいえ、あまりにも織斑先生の笑みがすごく魅力的だった

「ん？どうした」

落ち着け　ＢＥ　ＣＯＯＬ

「いえなんでもありません」

あぶねー

だけどこれでだいｚｙ「言ってみろ」

別の意味で笑ってらっしゃる

これは詰んだ（´・ω・`）

素直に話そう

「えーと、さっき織斑先生の笑みがものすごく・・・・・・魅力的だったので／／／」

ばしっ

何も言わずただ出席簿で叩いた

だから言うの嫌だったのにこの人は

「はぁ～　まだ時間があるんださっさと食堂にでも行ってこい」

「わかりました。失礼します・・・・」

はぁ～　厄日だ

この時映司は気づかなかった

若干だが千冬の顔が赤かったことに

食堂に行き、無難なラーメンを頼んで一夏のところに行くと何やらオルコットと篠ノ之が凰に詰め寄っていた

「おお、映司遅かったな」

一夏が俺に気づいて手を振ってきた。

「いろいろとな　てかなんだこの状況」

「一夏。そこのイギリス代表候補生には興味ないけど、アンタの隣にいる奴は誰よ？男よね？」

凰の視線が俺に向けられる

てか

「俺が女であるわけがないだろ。おい一夏ちゃんとそこの子供に説明しろ」

「な！？なんですって――――　誰が子供よ」

「キーキーうるせえな　少しボリューム下げろ　というか喋るな」

「あ、あんたねー」

「あ、一夏隣いいか？」

「って人の話聞けーーー」

「おお、いいぞ」

「一夏もなに勝手に了承してんのよ」

「だいたいあんｔ「神谷　映司だ　覚えろ小娘」キーーーーーー」

本当にキーって言っちゃった　まぁいいや時間もあんまりないし
黙って食おうっと

「ふぅー、まぁいいわ　それより一夏。アンタ、クラス代表なんだって？」

「お、おう。成り行きでな」

「よかったらあたしが練習見てあげようか」

「そりゃ助かる」

ダンッ！

テーブルが叩かれた音が目の前に起きる

「一夏に教えるのは私の役目だ。頼まれたのは、私だ」

「・・・あなたは二組でしょう?敵の施しは受けませんわ」

「おいテーブル叩くな　スープがこぼれるだろ」

「「す、すみません」」

「あたしは一夏に言ってんの。関係ない人は引っ込んでてよ」

「か、関係ならあるぞ。私が一夏にどうしてもと頼まれているだ」

などと一夏の練習相手は誰になるのか言い争ってると

「そういえば鈴、親父さん元気にしてるか?」

「あ、うん元気だと思う・・・・」

ん、なんだ今のセリフ

するとチャイムがなり

「んじゃ　一夏放課後に　そっちの練習が終わったころに行くから
時間空けといてよね」

凰は去って行った

てかまだ全然残ってる　やばい

七話（後書き）

やはりフラグをたてるのを表現するのは難しい

それと映画を見て感じたんですが亜種形態でカメとワニは使いたい

八話（前書き）

アンクみたいにメダルを投げてくれる人が欲しい

そしてメダルを受け取り変身するという一連の流れがやりたい

映画を見て本当に感じた

八話

ー放課後ー

俺ら４人はアリーナにいた。

ちなみに篠ノ之も無事訓練機を借りることが出来たらしく、今日から実践訓練をするらしい。

最初は篠ノ之と訓練するみたいだ

「では一夏始めるとしよう」

「お、おう」

どうやら始まるみたいだ

するとオルコットが

「あのー映司さんは訓練には手伝わないのですか？」

「正直剣の道の達人の篠ノ之とオルコットさえいれば充分だろ。」

「一応手は出さないが口はだすつもりだ」

するとオルコットはなにやら顔を赤らめながら

「あのー映司さん　私のことはセシリアと呼んでくれませんか？／／／」

ふむ、別に断る理由もないので

「別にいいけどさぁ、急にどうして？」

するとものす凄い笑顔で

「いえなんでもありません」

まぁいいが

そしてセシリアはそのまま一夏の訓練に飛び入り参加した

あれは死んだな

・・・・・

数時間後

思った通り一夏はもうノックダウン

地面に寝転がっていた

「では、今日はこのあたりで終わることにしましょう」

「お、おう……」

ぜえぜえと息が切れている一夏に対して、セシリアと篠ノ之はけろりとしている

「ふん。鍛えていないからそうなるのだ」

ずいぶんと辛口だな

だが

「まぁ、だいぶ無駄な動きは減ってきてるがまだまだ目立ってる

今後の課題だな」

「映司は手伝ってくれないのか？」

「俺が教えることが逆に少なすぎる」

「まぁ、困ったときは助けてやるから頑張んな」

「助かるよ」

「では映司さん、一夏さん後ほど」

「お疲れさん　んじゃ俺も先にあがらせてもらうわ」

「お、おう。」

そして一夏と篠ノ之を残して先に部屋（ちなみに映司はずっと制服

で見てた）に戻ろうとすると、凰　がいた

「あ、映司一夏の練習もう終わった？」

いきなり名前で呼ぶのか・・・・・・いいが

「ああ、たぶん今更衣室にいると思うぞ」

「ありがと　んじゃねー」

といい走って行った

・　・　・　・　・　・

シャワーを浴びた後、飲み物がなくなっているのに気づき、自販で大量に買ってきた帰りに向こうから凰がすごい勢いで走ってきた。

しかし凰は前をむいておらず、俺が注意しようとした瞬間にぶつかってしまった。

「いてぇ～　おい前見ろどアホ」

「・・・・・・・・・うるさい」

聞こえるかどうかのギリギリな声で言った

その時、かすかに頬に流れる涙が見えてしまった

「おいなんかあったのか？」

「・・・なんでもないわよ」

さいですか

とりあえ落としてしまった飲み物を拾い、立ち去ろうとした。

「ってあんたなんで立ち去ろうとしてんのよ」

「いや自分でなんでなんでもないって言っただろ」

「それでも少しは気を遣いなさいよ」

「嫌だ」

「あ、あんたねーーーーー」

「はぁ～、わかった　何があったか聞いてやる　だから早く帰らせろ」

「こんなとこで話せる訳ないじゃない・・・・・」

注文が多いな

「ならどこでならいいんだよ？」

「あんたの部屋にきまってるでしょ」

なにさも当たり前みたいな顔してんだよ

「言い訳ないだろ　倫理的にまずいんだよ」

「ほら何ぼけーとしてんのよ　早く部屋まで連れていきなさいよ」

もう嫌（；´Д｀）×

・・・・・・・・・

「つまり一夏は凰との大切な約束を忘れていて。それで一夏と喧嘩をしたと？」

「そうよ！本当にあのバカは本当に唐変木なんだから！」

めんどくさい本当にめんどくさい

とりあえず

「とりあえずお前はどうしてもらいたんだ？　って何してる」

「えっ？」

こいつ俺が今後のことを聞こうとしたら、あろうことか凰は俺の部屋を物色していた

「あんたお菓子用意してないの？」

ようは出せと

図々しいな　相談をしに来ているのはそっちだろうが
はぁ～
しかし勝手に部屋を荒らされる訳にはいかないので　戸棚からいくつか出し
「ほら　これで我慢しろ」

「なんだ　あるならさっさと出しなさいよ」

こいつさっきまで泣いてたよな
なのになぜ今はこう元気なんだ

鈴Ｓｉｄｅ－

（バカバカバカバカバカバカバカ……一夏のバカ！どうしてあんな大切約束を忘れるなんて！）

一夏との約束それは『あたしの料理が上達したら、毎日あたしの酢豚を食べてくれる？』ということだが
一夏はそれを『おごってくれる』と勘違いをしてしまった

鈴音はそれがショックだった
覚悟して伝えた言葉がまさかそんな風に伝わっているなんて考えたくもなかった

そして前を見ずに走っていたせいで誰だか分らなかったがぶつかってしまった。

そして見てみると、不機嫌そうな顔をしているＩＳを使えるもう一

人の男ー神谷　映司ーであった

「いてぇ～　おい前見ろどアホ」

なぜか素直に謝ることが出来ず

「・・・・・・・・・うるさい」

と反発してしまった

すると

「おいなんかあったのか？」

ふとそんなこと聞いてきた

本当ならこいつに相談にのってもらいたかった

でも

「・・・なんでもないわよ」

と言ってしまった

それを聞いて立ち去ろうとしまい

何故だかわからないけど

「ってあんたなんで立ち去ろうとしてんのよ」

といい引き止めたてしまった

「いや自分でなんでなんでもないって言っただろ」

「それでも少しは気を遣いなさいよ」

「嫌だ」

「あ、あんたねーーーーー」

「はぁ～、わかった　何があったか聞いてやる　だから早く帰らせろ」

といいこいつの部屋まで行き、今までのことを話した

そしてめんどくさがっていたがなんやかんやで真剣に話を聞いてくれた

それがとても嬉しかったし、不思議とこいつと話しているととても楽しい

ってあたしは何考えてんのよ／／／／

すると

「話を戻すが結局お前は一夏にどうしてもらいたんだ?」

その一言で一気に現実に戻されたような感じがした

映司Ｓｉｄｅ－

とりあえず本題をきりだした

凰はさっきまで笑っていたのに急に真面目な顔になり

「・・・・わかんない」

「そりゃ　約束は思い出してもらいたいし、謝ってもらいたい」

「でもそれであいつを許せるかと聞かれたら無理だと思う・・・・・」

ようは自分でもわかっていないみたいだ

はぁ～こんなこと言われたら手を貸してやんなきゃいけないだろ

「だったら考えろ　自分の納得いく答えがでるまで考えろ」

「で、でｍ「一夏には黙っててやるし、どうしてもと言うなら手を貸してやるから頑張んな」う、うん」

「・・・・なんかありがとね／／／」

「今回は一夏が原因なんだ。だから気にすんな」

軽く凰のおでこを小突いた

「な、なにすんのよ／／／」

「お前はうるさいくらいがちょうどいいんだよ」

「あんたねーーーーーー」

と軽く部屋の中での鬼ごっこがはじまった

この時の凰は少なからずいい顔で笑っていた

八話（後書き）

ちょっとしたフラグシリーズ第二段

これから本格的に鈴のフラグをたたせます

なので映司がまた戦うのは2、3話かかるかも

九話（前書き）

とりあえず自分なりに修正してみました

作者の実力不足で皆様に不快な思いをさせてしまいすいませんでした

九話

ー数週間後ー

結局あれから一夏と凰の仲は進展がなかった

とりあえず一夏に事情を聞き、どうして謝りにいかないか聞いたら

「……いや、会おうとしても避けられてて…」

これはおかしい

とりあえず凰に事情を説明したら

「ふん！あっちから謝りに来なきゃ話さないわ！はあ？行っているけど、アタシが避けてる？ふざけんじゃないわよバカ！」

だそうだ一夏　早くこの問題を解決しろ

もうどんだけ俺が働いていると思う

・

・　・

・　・　・

「一夏、来週からいよいよクラス対抗戦が始まるぞ。アリーナは試合用の設定に調整されるから、実質特訓は今日で最後だな」

今日もまたアリーナでいつものメンバーで特訓だ

とりあえずアリーナへと向かうと

「待ってたわよ、一夏！」

何故か凰がいる。先回りでもしたのだろうか

それに、腕組みをしてふふんと不敵な笑みを浮かべている

「貴様、どうやってここに――」

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ！」

「はんっ、アタシは関係者よ。一夏と映司の関係者。だから問題なしね」

「ほほう、どういう関係かじっくり聞きたいものだな・・・」

「盗っ人猛々しいとはまさにこのことですわね！」

二人ともうご立腹だ

「とりあえず、落ち着け」

話が進まなくなるので俺が仲裁に入り

「凰、この際だちゃんと話し合ってみたらどうだ？」

「う、うん・・ありがとう、映司／／／／」

「気にすんな。」

最近やたら、顔を赤くしているが気のせいだろう

「……で、一夏。反省した？」

「へ？なにが？」

「だ、か、らっ！アタシを怒らせて申し訳なかったなーとか、仲直りしたいなーとか、あるでしょうが！」

「いや、そう言われても……鈴が避けてたんじゃねえか」

「あんたねえ……じゃあなに、女の子が放っておいてって言ったら放っておくわけ！？」

チラッと俺の方を見た後、そう言い放つ

「おう」

即答だった

頭痛い　（＊´―｀）ノ

「なんか変か？」

「変かって……ああ、もうっ！謝りなさいよ！」

雰囲気が悪くなってくる。

とりあえず様子見だ

「だから、何でだよ！約束覚えてただろうが！」

「あっきれた。まだそんな寝言言ってんの！？約束の意味が違うのよ、意味が！」

「あったまきた。どうあっても謝らないっていう訳ね！？」

「だから、説明してくれりゃ謝るっつーの！」

「せ、説明したくないからこうして来てるんでしょうが！」

いつまでこの水掛け論は続くんだ

「じゃあこうしましょう！来週のクラス対抗戦、そこで勝った方が負けた方に何でも一つ言うことを聞かせられるってことでいいわね！」

「おう、いいぜ。俺が勝ったら説明してもらうからな！」

「せ、説明は、その……」

そこで凰は黙ってしまった

そんなに言いたくないのか

すると今度は一夏が挑発した

「なんだ？止めるなら止めてもいいぞ？」

「誰が止めるのよ！あんたこそ、アタシに謝る練習しておきなさいよ！」

「なんでだよ、馬鹿」

「馬鹿とは何よ馬鹿とは！この朴念仁！間抜け！アホ！馬鹿はアンタよ！」

ガキの喧嘩か

だがこの後一夏は言ってはいけないＮＧワードを言ってしまう

「うるさい、貧乳」

お、おいそｒ

ドガァァァンッ！！！

いきなりの爆発音がした

見てみると凰の右腕はその指先から肩までがＩＳ装甲化していた

あれは部分展開と言って結構、難しいらしい

俺には関係ないが

というかそろそろ本当にまずいぞ

ちらりと壁を見ると、直径三十センチほどのクレーターができている
普通のＩＳではそうそうこうならない

「い、言ったわね……言ってはならないことを、言ったわね！」

「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん」

「今の『は』！？今の『も』よ！いつだってアンタが悪いのよ！」

「ちょっとは手加減してあげようかと思ったけど、どうやら死にたいらしいわね……いいわよ、希望通りにしてあげる。――全力で叩きのめしてあげる」

最後に、鋭い視線を一夏に送ってから、凰はピットを出て行った

「……パワータイプですわね。それも一夏さんと同じ、近接格闘型……」

「ちっ、　おいお前らは特訓してろ。」

「でも映司は「今回限りはお前が悪い。だが今は対抗戦のことだけを考えろ、俺がなんとか話をしておくから」わ、わるい。」

「とりあえず切り替えろ、いいな」

そういって、俺は凰の後を追いかけた

・・・・・・・

とりあえず探したがなかなか見当たらなく、まさかと思い俺の部屋にまで行くと

あろうことかいましたよ
しかも体育座りでうずくまっていた

「おい！」
とりあえず話しかけると驚きながらこっちを見た

「映司・・・・・・」

よく見ると涙を流していた

「とりあえず部屋に入るか？」

コクン
とりあえず頷いた

部屋に入れタオルを渡し、飲み物とお菓子を出してあげた

「んで　どうする？」

「どうするって・・・・・」

「相談があるんじゃないのか」

「・・・・・・・・」

「はぁ～　なぜこううまく物事が進まないんだ」

「・・・・・・ごめん」

相当堪えているらしい
困った　どうすればいい

「ねえ」

「ん？」

「今日あんたの部屋に泊めてくれない？」

「断る」

「即答しなくても」

「当たり前だ、第一なぜ泊まる？」

「あんまりルームメイトには気を使わせたくないし、映司なら・・・／／／／」

なんだよそれ

「はぁ～、今回だけだからな」

「うん／／」

すげー嬉しそうだな

とりあえずそれからは食堂には行きたくないとわがまま姫がいうものだから用意してあったカップ麺を夕飯にし、ずっと雑談をし、シャワーを浴び終わる（凰は女子風呂に行った）と気が付けばもうかなり遅い時間となっていた

そろそろ寝るか

とりあえず布団を引き、

「おい凰お前はベッドで寝ろ」

さすがに女子を布団で寝かせるわけにはいかないし

「え、いいよ　映司がベッドで寝なよ」

こいつ変なところで気を使うからな

「これは部屋主である俺の命令だ、異論は認めん。」

すると凰は笑顔になり

「あんたって本当に優しいよね・・・」

「気のせいだ。」

「素直じゃないんだから。」

「それはお前だ。」

とりあえず凰はベッドの中に入り、電気を消した後俺も布団に潜った

「ねぇ、あたしのことは鈴って呼んでくれない？」

またか

「別にいいがなんでだ？」

「なんでもいいでしょ。」

「それとあんたってどんな女子がタイプなの？」

「知らん」

「ちなみに私は？」

「いいほうじゃないのか。」

「・・・・・・・・そっか／／／／」

鈴は幸せな気分のまま、眠りについた

・　・　・

・・・・

―試合当日―

組み合わせは、一夏と鈴
噂の新入生同士の戦いとあって、アリーナは全席満員
それどころか通路まで立って見ている生徒で埋め尽くされている

そして、俺はピットから篠ノ之、セシリアと一緒にリアルタイムモニター見て、二人の戦いを見守る

一夏と鈴は既にアリーナ中央で試合開始のときを静かに待っている

ちなみに白いＩＳが一夏で、赤いＩＳが鈴だ

鈴のＩＳは甲龍（シェンロン）
ブルー・ティアーズと同じ、非固定遊部位（アンロックユニット）が特徴的だ。俺はあれが目みたいで気色悪く感じた

『それでは両者、規定の位置まで移動してください』

アナウンスに促されて、一夏と鈴は空中で向かい合う

「一夏、今謝るなら少しくらい痛めつけるレベルを下げてあげるわよ。」

「雀の涙くらいだろ。そんなのいらねえよ。全力で来い！」

「一応言っておくけど、ＩＳの絶対防御も完璧じゃないのよ。シールドエネルギーを突破する攻撃力があれば、本体にダメージを貫通させられる」

つまり『殺さない程度にいたぶることは可能』ということだ

『それでは両者、試合を開始してください』

ガキィンッ！！

試合開始のブザーが鳴り終えた瞬間に二人が動いた

そして、一夏の《雪片弐型》と鈴の青龍刀の形をした《双天牙月》がぶつかり合う

「ふぅん。初撃を防ぐなんてやるじゃない。けど――」

鈴の双天牙月をバトンを扱うかのように回すと自在に角度を変えながら斬り込んでくる

「くっ・・・」

「――甘いっ」

「ぐあっ！？」

パカッと鈴の肩アーマーがスライドして開く。中心の球体が光った

瞬間、一夏が地表に打ち付けられた

「なんだあれは……？」

一緒に見ていた篠ノ之がそう呟く

「『衝撃砲』ですわね。空間自体に圧力をかけて砲身を生成、余剰で生じる衝撃それ自体を砲撃化して撃ち出す。ブルー・ティアーズと同じ第三世代型兵器ですわ」

篠ノ之は一夏が心配で聞いていないが、確かに厄介だな

「鈴」

「なによ？」

「本気で行くからな」

今の一夏の目は絶対に負けないと心に刻んだ目だ

「そんなこと、当たり前じゃない！格の違いってのを見せてあげるわよ！」

鈴は双天牙月を構え直す

一夏は距離を詰めようと加速姿勢に入った

あれは、一週間、俺たちが協力して身につけた技能『瞬時加速（イグニッションブースト）』を使う気だ
成功すれば代表候補生の鈴とはいえダメージを与えられる。失敗すれば、そこで終わりだ

「うおおおおっ！」

ズドオオオオオオオオンッ！！！

「！？」

突然大きな衝撃がアリーナ全体に走る
鈴の衝撃砲でもこんな威力はない

よく見るとステージ中央から煙が上がっている
さっきのは『それ』がアリーナの遮断シールドを貫通して入ってきた衝撃波のようだ

俺は乱入してきたヤツを見た
姿からして異形なＩＳだった。深い灰色をしたそのＩＳは手が異常に長く、つま先よりも下まで伸びている

そして、そのＩＳが俺と同じ『全身装甲（フルスキン）』であることだ

「もしもし！？織斑くん聞いてます！？凰さんも！聞いてますー！？」

声を荒げている山田先生。どうやら一夏と鈴は突入隊がくるまで食い止めるようだ

「本人たちがやると言っているのだから、やらせてみてもいいだろう」

「お、お、織斑先生！何をのんきなことを言ってるんですか！？」

「落ち着け。コーヒーでも飲め。糖分が足りないからイライラするんだ」

「……あの、先生。それ塩ですけど‥」

「……」

ぴたっとコーヒーに運んでいたスプーンを止め、白い粒子を容器に戻す

「なぜ塩があるんだ」

「さ、さあ…？でもあの、大きく『塩』って書いてありますけど……」

「……」

「あっ！やっぱり弟さんのことが心配なんですね！？だからそんなミスを――――」

「……」

気づけよ、山田先生。明らかにその言い方はヤバいだろ

「あ、あのですねっ――――」

「山田先生、コーヒーをどうぞ」

「へ？あ、あの、それ塩が入ってるやつじゃ……」

「どうぞ」

「いただきます……」

「暑いので一気に飲むといい」

ご愁傷様！

「先生！わたくしにＩＳ使用許可を！すぐに出撃できますわ！」

「だめだ」

「なっ！？　な、何故ですの！？」

いてもたってもいられなくなったセシリアの申し立てを即答で一蹴する。

「お前のＩＳは一対多向きだ。多対一ではむしろ邪魔になる」

「そんなことありませんわ！　このわたくしが邪魔だなどと――」

「ほう、では連携訓練はしたか？　その時のお前の役割は？　ビットをどういう風に使う？　味方の構成は？　敵はどのレベルを想定してある？　連続稼働時間はどうだ？　まだまだあるぞ」

「わ、わかりました！　もう結構です。」

「ふん。わかればいい」

「それにこれを見ろ」

ブック型端末の画面を数回叩き、表示されたのはこの第二アリーナのステータスチェックだった

遮断シールドがレベル４に設定、扉がすべてロック……あのＩＳの仕業か

一夏と鈴はそのＩＳと戦っている。

一夏＆鈴Ｓｉｄｅ－

「……鈴、あとエネルギーはどのくらい残ってる？」

「１８０ってところね」

乱入者と戦闘している一夏と鈴
一夏が何度も斬りかかるがかわされ、鈴音の衝撃砲は防がれてしまう
「ちょっと厳しいわね……現在の火力でアイツのシールドを突破して機能停止（ダウン）させるのは確率的に一桁台ってとこじゃない？」
「ゼロじゃなきゃいいさ」
「あっきれた。確率はデカイほどいいに決まってるじゃない。」
「うっせーな……」
「――で、どうすんの？」
「逃げたけりゃ逃げてもいいぜ」
「なっ!?馬鹿にしないでくれる!?あたしはこれでも代表候補生よ。それが尻尾を巻いて退散なんて、笑い話にもならー――」
喋っている鈴音の横をビームがかすめる
一夏たちは再度集中力を高める
「……なあ、鈴。あいつの動きって何かに似てないか？」
「何かって何よ？」
「いや、なんつーか……機械じみてないか？」
「ＩＳは機械よ」

何言ってんのこいつ？死ぬの？みたいな表情をする鈴音

「そう言うんじゃなくてだな。えーと……あれって本当に人が乗ってるのか？」

「は？人が乗らなきゃＩＳは動かな――――」

とそこまで言って鈴の言葉が止まる

「――――そういえばあれ、さっきからあたしたちが会話してるときってあんまり攻撃してこないわね。まるで興味があるみたいに聞いてるような……」

「仮に、仮にだ。無人機だったらどうだ？」

「なに？無人機なら勝てるっていうの？」

「ああ。人が乗ってないなら容赦なく全力で攻撃しても大丈夫だしな」

《雪片弐型》の威力は、恐ろしく高い。そのため訓練や学内対戦で全力を使うわけにはいかないが無人機なら最悪の事態を想定しなくても済むのだ

「全力も何もその攻撃自体が当たらないじゃない」

「次は当てる」

「言い切ったわね。じゃあ、そんなこと絶対にあり得ないけど、あ

れが無人機だと仮定して攻めましょうか」

一夏に一策があると知ってか、鈴音はにやりと不敵に笑った

「しくじったらわかってるわね？」

「ああ、わかってる。……それじゃあ――」

「一夏ぁっ！」

突然、アリーナに声が響いた。鈴の声ではない、ましてや俺のでもない。

アリーナピットの剥き出しの部分。

「男なら……男なら、そのくらいの敵に勝てなくてなんとする！」

そこにいる、箒のものだった。

はぁはぁと肩で息をしている。ここまで走ってきたらしい。

それより、何でここに来てんだ、箒。

「――――」

（！！　まずい！）

敵ＩＳの興味が箒に向けられた。俺たちからセンサーレンズを反らし、箒をじっと見ている。

何を思ったのか、ビーム砲が着いた腕を箒に向けた。

「箒逃げろ」

箒に忠告したが間に合わない

「鈴やれーー」

「わかった。ってちょっと馬鹿何してんのよ、あたっちゃうでしょ！！」

急に鈴の前に移動した
あれでは衝撃砲があたってしまう
しかし

「いいから撃て！」

「あーもうどうなっても知らないわよ」

そして鈴の衝撃砲をくらい、それを零落白夜（れいらくびゃくや）発動のためのエネルギーに変えた

「――――オオオッ！」

右手の《雪片弐型》が強く光を放つ。中心の溝から外側に展開したそれは、一回り大きいエネルギー状の刃を形成していた

（俺は千冬姉を、箒を、鈴を、映司を、関わる人すべてを――――守る！）

スバァンッ！と必殺の一撃は敵ＩＳを切ろうとした

しかし

ズギューン！！

銃撃音がしたと思うと一夏に当たり、最後のチャンスが無駄になってしまった

なんとか白式（びゃくしき）のシールドエネルギーが残っていたがもう零落白夜（れいらくびゃくや）は無理だろう

「な、なんだ！？」

状況が呑み込めず一夏が混乱していると

「こーら、ダメだぞ。人のおもちゃを勝手に壊そうとしちゃ～」

見てみると漆黒のＩＳを身に纏った女性がいた

「あんたは・・・・・」

どこかで見た記憶はある

だが一夏は思い出せなかった

「え～　忘れちゃったの」

その時、不気味な笑みをこぼした
その瞬間一夏はすべてを思い出した
自分が誘拐されたとき、意識を失う前にある女性をはっきりと見た
それが
「貴様ーーーーーーー！！！！！」
そしてその女性に突っ込んでいった
普段の一夏では見られないほどの怒りの表情をしている
もちろんそんな顔を見るのは初めてなので
鈴、箒、セシリア、山田先生は言葉がでない
そんな中でも千冬は冷静に指示をだした
「セシリア状況が変わった。悪いが援護に行って来てくれないか」
「わ、わかりました！」
セシリアはアリーナにと向かった
「神谷万が一の時は頼んだぞ。」
「了解」
それだけ言い画面にまた視線を戻した
・
・

・・・

「お前だけはーーーーーーーー！！！！！」

力の限り雪片弐型（ゆきひらにがた）を振ったが簡単にかわされてしまい

「そんな大振りじゃあたんないよ～～～～」

そして

「も～う，これで終わりだよ。」

かわしたと同時に近づき、密着した状態でビームピストル（ケルディムガンダムのを想像してください）を連射した

全部かわせる訳なく

「うわーー！！！」

今の一撃で意識を失ってしまいとうとう白式の装甲が解除されたので、空中から落ちてしまった

「一夏！！」

とりあえず鈴が一夏をキャッチした

「返事をして一夏」

鈴は一夏に呼びかけるが返事はない

「なんだ～、期待してたのにガッカリ。ん？」

「よくも一夏さんを」

するとセシリアがビットを謎の女性のもとに飛ばし攻撃し始めた

「へぇ～、これが例の・・・・でもさ」

「何か忘れてない？」

「何をおっしゃって・・・」

「あんまりこっちに集中しないほうが身のためだよ～。」

すると箒が

「セシリア逃げろ！」

「え！？」

「きゃーー！！！」

その瞬間大量のビームが飛んできた

もちろん避けることが出来ず、もろにくらってしまった。

そう第二の乱入者、そして一夏の劇的な豹変に最初に乱入した無人ＩＳのことを忘れていて、

意識をそっちに向けていなかったせいで大ダメージをくらってしまった。

そして状況は一気に不利なものとなってしまった。

今動けるのは鈴だが、一夏を抱えているせいで闘うことはできない

そして

「もうつまんな～い、少しは遊べると思ったのに～。」

「ゴーレムもう飽きたから、そこの子とまとめてやっちゃって。」

そして無人ＩＳ－ゴーレム－は鈴と一夏に近づきビームをまとめて二人に撃とうとしようとしている

「一夏ーー！」

箒が近づこうとするが

ズギューン！！

威嚇射撃され

「なんの力もない人が近づかない方がいいよ～。」

といわれ、箒は自分の専用機がないこと、そしてこの状況を見てるだけしかできないことを悔しんだ

そしてゴーレムは徐々に近づいてた

至近距離からの一撃

そう鈴は思った
しかし下手に動いても謎の女性に撃たれてしまう
もう為す術はなくなった

その時鈴は一人の人物を思い出していた
どんな時も優しくしてくれ、助けてくれた
そして次第にだが、その人物のことを思うようになっていた
そして今わかった
自分はその人物のことが好きだということ

そしてついにゴーレムとの距離が0になり、ビームが放たれそうになった

そして鈴はその人物の名前を呼んだ

「映司ーーーーーーーーー!!!!」

その瞬間不思議な電子音が聞こえた

【タカ!ゴリラ!バッタ!】

そして同時に

ズドオオオオオオオンッ!!!

もの凄い衝撃音がした

鈴は何事かと周りを見渡すと
壁に叩き付けられた無人ＩＳの姿

鈴の前にさっきとは別の全身装甲（フル・スキン）のＩＳ

だが不思議と鈴には誰だかわかり

「え、映司・・・」

と涙をながしながら彼の名前を呼んだ

そして

「はぁ～、なんでこうなるかね～。」
「まぁいいや、おい鈴」
「後は俺に任せろ。」
と映司は言った。

九話（後書き）

どうでしたか？

また不明な点もしくはおかしな点がありましたら教えてください

基本的に暇なので修正箇所を言ってくだされば可能な限りすぐに直しますので

十話（前書き）

やっぱり戦闘シーンを書くのは難しい

あんまり長くないですがどうぞ

十話

少し遡り　映司Ｓｉｄｅ－

「織斑先生あの女性は誰ですか？」

「残念ながら知らん。あいつをあれほどまでにさせるとはな、本当に何者なんだ？」

どうやら先生でもわからないらしい

そして一夏が撃ち落とされた

そしてとうとう堪忍袋の緒が切れたのか

「・・・・・・神谷行ってこい。」

「この状況を打開してこい。」

「そんな！？無理ですよ！！」

山田先生が当然の反応をしているが、

「山田君そう思うのも無理もない。」

「だが今はそうするしかないのだ。いけるか神谷？」

「任せてください。んじゃいってきますか。」

「ああ、頼んだぞ。」

急いで一夏の元へ向かった

そして徐々に近づいていくと鈴に近寄ってくる無人ＩＳが見えた

走りながら、ベルトにタカ、ゴリラ、バッタのメダルを入れ

「変身！」

【タカ！ゴリラ！バッタ！】

タカゴリバになり、バッタレッグの跳躍力で無人ＩＳのとこまで一気に跳びゴリラアームで全力で殴った

ズドオオオオオオオンッ！！！

するとバカみたいに無人ＩＳはぶっ飛び、壁に叩き付けられた

どうやら今の一撃が効いたのか動かなくなった

「え、映司・・・」

後ろから呼ばれたので振り向くと、涙を流しながら一夏を抱えている鈴がいた

とりあえずこの状況に

「はぁ～、なんでこうなるかね～。」

溜息が出てしまった

そして

「まぁいいや、おい鈴」

「後は俺に任せろ。」

といい、鈴を安心させた

・・・・・

「ふぅ～ん、君ってもしかしてＩＳを動かせる二人目の男だったりするかな？」

突然そんなことを聞いてきたので

「だったらどうするつもりだ？」

「ふふ～、彼と君のＩＳはもちろんだけどそれを完全に使いこなしている君も欲しいな～。」

どうやら、俺とセシリア、一夏とセシリアの試合の映像がどこから

か漏れてしまっているようだ
それをこいつは見て、このような事態を引き起こした
それにしても迷惑な話だ
「だったら個人的に俺や一夏のところに来ればいいだろう。なぜだ？」
「え～、だってその方が盛り上がるじゃん～」
「それにもしかしたら二人とも大したことないかもしれないじゃん。」
「だ～か～ら、こうして実力を試したの。そしたらそこの子のＩＳ自体は面白いけど使う方はぜ～んぜんダメ」
「それにあまりにもしつこいからまとめて消しちゃえ～ってしたんだよ。」
「あんた名前は？」
「う～んここはティアナとでもしておこうかな。」
「それより～、あたし達の仲間になってくれる？」
達？あいつ以外にもいるというわけか
しかし

「仲間になるつもりは微塵もない！」

「へぇ～そうなんだ。じゃあさ、君も消えちゃえ！！！」

その瞬間、ビームピストルを連射してきた。

「くっ！」

とりあえず避ける

「知ってるんだよ。君のＩＳには飛行能力が無いことぐらい。」

「だからどうした」

「飛べないのなら工夫して闘えばいいことだ。」

そして、両前腕部にあるガントレット状武器・ゴリバゴーンをティアナに向け
バゴーンを腕からロケットのように射出する－バゴーンプレッシャー－を使った

「ちっ！？」

急に飛んできたのに、焦ったがなんとか緊急回避することが出来た

「まさかこんな隠し玉があるなんてね・・・・」

「でももう通用しないわ。」

ふむ、確かにそうだが

「だったらメダルを変えればいい話だ」

こいつの実力はそこそこ強い
少なからず中途半端な亜種形態じゃ埒が明かない

使うか重量系のコンボ

攻撃をかわしながら、タカからサイ、バッタからゾウのコアメダルに変えドライバーを傾けスキャンした

【サイ！　ゴリラ！　ゾウ！　サッゴーゾ……サッゴーゾ！！】

「ハッ！！！」

「ウオオオオ！！！」

大きく相手を威嚇し、ドラミングを始めた

「な～にそれで強くなったつもり」

ティアナは今だ自分のほうが有利と思っていた

しかし後にサゴーゾの恐ろしさを知ることになる

「オオオオ！ウオオオオオ！」

胸を叩いた瞬間に大きな波動が放たれる

その瞬間

ティアナは空中から地上に叩き付けられた

「な、なんで！？」

急な出来事にティアナは理解出来なかった

これこそサゴーゾの固有能力〜ＩＳでいうワンオフ・アビリティー（単一仕様能力）〜重力操作を使ったのである

そして一気に映司の反撃がはじまった

なんとか立ち上がろうとするティアナをゴリラアームで殴り、そしてひるんだとこをサイヘッドのグラビドホーンで頭突きをくらわし、もう一度「バゴーンプレッシャー」を放ち今度は当てた。

さらにもう一撃とした時、直感で危険を感じその場を離れるとビームが通りすぎた

どうやら無人ＩＳが復活し、援護したのだ

「あんたのことは絶対に許さない！！　次には絶対に殺す！！」

子悪党が言う捨て台詞を吐き、去ろうとした

追いかけたかったが無人ＩＳを放っておくわけにはいかず

「ちっ、鈴少し下がってろ」

「う、うん」

そして一気に勝負を決めるため、スキャニングチャージした

そしてその場で跳躍し、着地の衝撃と共に灰色の３つのリングで標的を地面に捕縛し、手元に引き寄せて頭突き・ゴリラアームでのフックパンチを同時に叩き込む－サゴーゾインパクト－を

「オオオオオ！セイヤーー！！！」

叩き込んだ

無人ＩＳのシールドエネルギーは０となり、活動が停止した

「はぁ・・・はぁ・・・」

しかしやはりコンボはものすごい負担が掛かる

体力もだいぶ上がっているがそれでも

強制的に変身が解除されてしまい

その場で倒れてしまった

「あ～だるい・・・・」

「もう動きたくない。」

すると鈴、セシリアが駆けつけてくれた（一夏には箒が）

「「だ、大丈夫映司（ですかさん）？」」

そしてその後どっちが映司を運ぶかで争っていたが

当の本人は寝てしまっていて知る由もない

十話（後書き）

どうでしたか？

十一話（前書き）

ハロリの声優が道重とか・・・・・・

十一話

目を覚ますとまっしろな空間にいた

まさか……（´△`）

「ふふ、会いたかったわぼ・う・や」

いやーーー（ p_q）エーン

映司は逃げたした

えっ、今の誰かだって？

ヒント

最初その人物？とセシリアを間違えた

水棲系のコアメダル

みんなはもうわかっているだろうが正解は

「捕まえたわ！」

ぎゃあ～～

抱き付いて来たのはそう
メズールである

何故こうなったかというと
・
・　・
・　・　・
・

修練の門に入れられ大概のヤミー、グリードを倒した時にメズールと出会った

最初はコアメダルを狙って戦って中々決着がつかなかった

本編でもメズールは本当の愛情を求めていたようにこのメズールもそうだったようで、もうめんどくさかったから

「俺が本当の愛情を教えてやる！！」

と（嘘を）言ったらものすごく食い付いてきた

それからが本当に大変だった

その後平和的に解決し、消える前に

「ま、また会いに行くわ／／／／」

とだけ言い消えた

そして、その後に夢にちょくちょく出てくるようになり最近は見かけないと思ったら……

早く起きろ俺！！！！

「まったくいつも逃げて素直じゃないんだから／／／／」

いーやーーーー

そこで目の前が真っ暗になった

・　・　・　・　・　・

目を覚ますと鈴が目の前にいた。

「おい何してる?」

「ひゃっ!?」

「おっ、お、おっ、起きてたの!?」

「今な、というか何をそんなに焦っているんだ?」

「あ、焦ってなんかないわよ!勝手なこと言わないでよ、馬鹿!」

ひどい言われようだな

「というかここ何処だ?」

「保健室よ。あんたが倒れた後にここまで運んであげたんだから感謝しなさいよ!」

ちなみにセシリアとなかなか決着がつかず、最終的にジャンケンで決めることになり結果鈴が勝ち保健室まで運んだのだが映司はもちろん知らない

「ありがとな」

そう言い、軽く撫でた

「・・・・／／／」

こういう時はなぜか黙るのだが気にしないでおこう

「一夏は大丈夫なのか？」

「とりあえず大丈夫みたいよ今はあんたとは別室で休んでいるみたい。ＩＳのほうもそこまでのダメージじゃなかったみたいだし」

「そうか、ってお前一夏のことろにいかなくてもいいのか？というより約そｋ「もういいわよ」いいってお前な～」

「いいって言ってんだからいいのよ！」

「今までの俺の苦労は何だったんだよ．．．．．．．」

「あ、あのさあの時助けてくれてあ、ありがとね／／／／」

「ああ、気にすんな。」

「ね、ねぇそれと今度さどっか遊びに行かない？／／／／」

「別にいいｇ「映司さん、具合はいかがですか？わたくしが看護に来て――あら？」」

また遮られた（σ´・ε・、）σ

「どうしてあなたが……？映司さんが起きるまで抜け駆けはなしと決めたでしょ！！」

「そ、そういうあんただって抜け駆けしてきてるじゃない！！」

「そ、それは・・・・・」

「もう出てってよ。映司はあたしが看病するんだから！！！！！」

もう勝手にやってくれよ

・・・・・・・・・・

ここはＩＳ学園の地下五十メートルに存在する区画、ここに立ち入るにはレベル４と言う、ほぼ最大の権限を有してなければ立ち入れない秘密区画に、千冬と真耶の姿があった。

どうやら映司がほぼ無傷で倒した無人ＩＳを解析してるようだ

「やはり無人機ですね。登録されていないコアでした。」

「そうか」

「ＩＳのコアは世界に４６７しかありません。でもこのＩＳにはどれでもないコアが使用されていました。一体・・・・・」

謎は深まるばかり

十一話（後書き）

本編では巨大グリード暴走態やら完全復活もすぐに退場のメズールがあまりにも不憫なのであまり出番はないですが時々出てきます

イメージとしてめだかの生徒会戦挙時の安心院みたいな感じで行きたいと思います

十二話（前書き）

アニメ通りな展開です

十二話

その後、一夏共々回復しあの時の事情を聞いた

どうやらティアナと呼ばれる女性は第二回モンド・グロッソ決勝戦当日に起きた一夏の誘拐事件
その時にいた一人らしい
さらにあいつらは仲間がいるということから組織ぐるみの犯行ということになる
そして一夏は自分のせいで姉が優勝出来なかったと思い、それが負い目となっている

織斑先生はまったく気にしていないようだが一夏は今でも悔やんでいる
そんな中犯人の一人が現れたもんだからあんなにキレたらしい

しかし今では落ち着き、次会うにまで絶対強くなるという宣言をした

・・・・・・

休日が明け、だるいなか教室につくと女子達がこれまたいつも以上に騒いでいた

とりあえず先に来てた一夏に聞いてみた

「なぁ一夏よ、何があったんだ？」

「あ、映司おはよ。いや俺にもよくわからないんだ」

すると織斑先生が来た

「席に着け。ホームルームを始める」

「今日は何と転校生を紹介します」

これはまた中途半端な時期に来たもんだ

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。みなさんよろしくお願いします」

てか男！？

俺と一夏だけじゃなかったのか

そして周りも同じことを思ったらしく

「お、男…？」

と聞いた

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を

「きゃーーーっ！」ってえ？」

「男子、三人目の男子！！」

「しかもうちのクラス！！」

「美形、守ってあげたくなる系！！」

とざわついている女子達を

「騒ぐな！静かにしろ！！」

と一喝

「今日は二組と合同でＩＳ実習を行う。各人着替えて第二グラウンドに集合。」

「それから織斑、神谷デュノアの面倒を見てやれ、同じ男子同士だ。では解散！！」

「君たちが織斑君と神谷君？はじめまして僕は「あ～いいからいいから、移動が先だ。女子が着替え始めるから」ってうわ／／／」

強引に一夏はデュノアの手を取った

「俺らがアリーナの更衣室で着替えるんだ。」

「実習の度に移動だからなるべく早く覚えろ。迷って遅刻なんてなってみろ出席簿が飛んでくるぞ」

「う、うん／／／／」

「なんだそわそわしてトイレか？」

「ち、違うよ／／／」

一夏が疑問に思っているが

「一夏よ、子供じゃないんだからいつまでも手を握って案内する必要ないだろう」

「あ、わりぃデュノア」

「だ、大丈夫だよ。気にしないで」

すると前から

「あ！？噂の転校生発見！！」

「しかも織斑君と神谷君も一緒！！」

するとぞろぞろと女子が湧いてきた

しかも後ろまで

ちっ
「おい、走るぞ」
「わかった！」
そして急いで道を曲がった
後ろで女子が何か言ってるが無視無視
するとデュノアが不思議そうに
「なんでみんな騒いでいるの？」
「そりゃＩＳを操縦できる男って今のところ俺たちしかいないからだろ」
「あ、ああ・・・うんそうだね」
「とにかく走れ」
「「はあ：はあ：」」
「何とか振り切ったみたいだな」
「てかしつこすぎだろ」
「ごめんね。いきなり迷惑かけちゃって」

「別に気にすんな、なぁ一夏？」

「ああ。それより助かったよ」

「やっぱ学園に男二人はつらいからな。」

「そうなの？」

「これからよろしくな。俺は織斑一夏。一夏って呼んでくれ」

「神谷映司。好きに呼んでいいから」

「うん、よろしく一夏、映司。僕のこともシャルルでいいよ」

「うわ！？時間やばいな、すぐに着替えちゃおうぜ」

「別に俺は着替えなくてもいいんだけどな・・・・」

と着替え始めると

「うわぁ／／／」

と顔を隠した

「早く着替えないと遅刻するぞ。うちの担任はそれは時間にうるさい人で。」

「う、うん！き、着替えるよ。でも、その、あっち向いてて……ね？」

「いやまぁ、着替えをジロジロ見るつもりはないが。なんでもいいが急げよ」

見てみるとすでにシャルルは着替え終わっていた

「な、何かな？」

「うわ、着替えるの超早いな。なんかコツでもあんのか？」

「い、いや別に。ははは～」

などと一夏が話しているうちに俺も着替え終えた

「これ、着るときに裸っていうのがなんか着づらいんだよなぁ。引っかかって」

「ひ、引っかかって？／／／／」

「おう」

「・・・・・／／／／」

「ん？そのスーツ着やすそうだな。」

「デュノア社製のオリジナルだよ。」

「デュノア？お前の苗字もデュノアだよな？」

「父が社長をしてるんだ。一応フランスで一番大きいＩＳ関係の企業だと思う」

「へぇ～社長の息子なのか。どうりでな」

「ん？どうりでって？」

「いや～気品つうかいいとこの育ちって感じがするじゃん。納得した」

「うん・・・・」

「そろそろ時間がやばいというのを君たちはわかってるのか？（ニコニコ）」

もの凄い笑顔で言ってあげましたよ

「ご、ごめん・・・」

「わ、わるい」

・　・　・　・　・

「本日から実習する」

「はい！」

二組と合同ということでいつもの倍の人数が集まっている

「まずは戦闘を実演してもらおう。凰！オルコット！」

「「はい！！」」

「専用機持ちならすぐ始められるだろう。前に出ろ！」

「めんどいな～、なんで私が」

「はぁ～、なんかこういうのは見せ物のようで気が進みませんわね」

二人ともその気持ちよーーくわかるぞ！！

「お前ら少しやる気を出せ。あいつに良いところを見せられるぞ」

織斑先生が二人に呟いたかと思えば

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！！」

「実力の違いを見せる良い機会よね！専用機持ちの！」

するとシャルルが俺のとこに来て

「今先生なんて言ったの？」

「わからないが・・・まぁいいじゃんやる気でて」

「それで、相手はどちらに？わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」

「ふふ～ん。こっちの台詞～。返り討ちよ」

「慌てるなバカども。対戦相手は「ど、どいてくださ～い」」

あ、空から山田先生が降ってきた

って俺のとこにかよ！？

すかさずドライバーにタカ、ゴリラ、ゾウをいれ

「変身！」

【タカ！ゴリラ！ゾウ！】

ドカーン！

煙が晴れると

タカゴリゾーになり山田先生を受け止めた
ただ受け止め方がお姫様だっこという形になってしまって

「「「「キャーーーー／／／／／！！」」」」

なにやら女子の黄色い声が上がった

「あ、あのう、神谷くん助けてくれたのは嬉しいのですが下ろしてくださいますか・・・・／／／／／／」

山田先生が顔を赤らめながら言った

そりゃそうだ
生徒の目の前でこんな恰好を見られるのは恥ずかしいに決まっている

「あ～、すいませんでした。今下ろします」

「い、いえ！き、気にしないで・・・・」

とりあえず下ろすと映司には見えなかったが、若干残念そうな顔をした山田先生であった

変身を解除した瞬間、ビームが横切った

はっ　Σ（・ω・ノ）ノ！

見てみるとセシリアがいた

「ほ、ほほほ～。残念です～外してしまいましたわ。」

笑顔で言わないで・・・・

更に横から連結音がしたので見てみると

「映司～～～～」

鈴が双天牙月（そうてんがげつ）を飛ばしてきた

洒落になんないＹＯ～

しかし山田先生の射撃によって助かった

「神谷くん怪我はありませんか？」

「はぁ、はい。ありがとうございます」

助かった～

「山田先生は元代表候補だ。今くらいの射撃は造作もない」

「昔のことですよ～。それに候補生止まりでしたし。」

謙遜までして本当にいい人だ。ああいう人に幸せになってもらいたいものだ

うんうん

などと頷いていると

セシリア&鈴VS山田先生の試合が始まった

「デュノア、山田先生が使っているISの解説をしてみせろ」

「あっ、はい・・・・」

ようは量産型の中でも操縦しやすく汎用性が高いというわけか

しかしさっきから見られているような気がする

いや見られているというより観察されているというほうが当てはまる

さらに言えば俺のIS－オーズ－を出した時から見られている感じがするから俺ではなくISのほうを見ているのか

しかし確かに珍しいISだがこうも見られるとは・・・・・・警戒しとこう

などと考えると試合は終わっていて、山田先生が勝ったみたいだ

「これで諸君にも教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

「次にグループとなって実習を行う。リーダーは専用機持ちがすること。では分かれろ！！」

「いっち～、教えて～」

すぐさま布仏が来た

「はぁ～別にいいが、その呼び方はやめろ！！」

・・・・・

「第一印象から決めてました！！」

一夏のところから何か聞こえたと思えば

シャルルや俺のところにまで影響がきて

女子達が手を差し伸べてきた

はぁ～　　ねるとんかゞ（・Д・、）

・・・・・・・・・

授業も終わり、昼休み

屋上でいつものメンバー＋シャルルが集まっている

「どういうことだ？」

不満げに篠ノ之が言った

「みんなで食った方がうまいって。それにシャルルは転校してきたばっかりで右も左もわからないだろ」

「そ、それはそうだが」

「ええっと、本当に僕が同席してもいいの？」

「んなこと気にすんな。さっさと食うぞ」

「ありがとう映司、優しいね」

満面な笑みで言ってくるシャルル

こういう男子を男の娘というのか

「別に。こんなの普通だ」

と言いつつ俺は自分で作ってきた弁当をだした

前世で1人暮らししていたから、簡単な料理くらいなら作れる

すると急に寒気が

前を見るとセシリアと鈴が

「あらあら映司さん、それは誰に作ってもらったのですか？（ニコニコ）」

「ねぇ映司、今ならあんただけは見逃してあげる。だから正直にいいなさい（ニコニコ）」

二人とも目が笑ってないんだよ（＾ー゜）b

「いやこれは自分で作ったんだが。」

「第一作ってもらう相手いないし・・・・」

その時セシリアと鈴の目が光ったがもちろん映司は知らない

「「な、なら私(あたし)が・・・・・」」

すると二人は火花を散らした

「いいから食うぞ」

とりあえず二人を止めた

すると鈴が弁当を開けた瞬間、一夏が

「お～酢豚だ」

嬉しそうに言った

好きなのか？

（ちなみに一夏と鈴の仲は戻ったが、お互いあくまでも良き友達というレベルになった）

「そう今朝作ったのよ！ねぇ映司よかったら「コホン、映司さん私今朝はたまたま偶然目が覚めましてこういうものを用意しましたの」うーー」

といいサンドイッチを出してきた

「イギリスにもおいしいものがあることを納得してもらいませんとね」

「ふぅ～ん、んじゃ一つもらうよ」

適当に一つ取り食べてみるか

ぱくっ・・・

もう大胆ですわとか言ってるがこの際無視だ

こんなシャマル並みの料理食えるわけない

「ちょっとあんたｎ「鈴！！！」／／／／」

鈴に邪魔されては困るので真剣な眼差しで見ると急に真っ赤になった

・
・
・

どうやら一夏には篠ノ之が作ってきたみたいだ

一夏が篠ノ之にから揚げを食べさせてあげている

するとシャルルが

「あ、これってもしかして日本ではカップルがするっていう『はい、あーん』っていうやつ？仲睦ましいね～」

「まったくだ、まぁ幼馴染だからこんくらい普通なんだろう」

「ふふ、というかさっきから見てるけど映司のお弁当って本当においしそうだよね」

「そうか？普通だが」

「特にその卵焼き。おいしそうだね」

「食べるか？」

「え、いいの？」

「はいよ」

そしてシャルルに食べさせた

「って映司さん何してらっしゃるんですか！？」

「別に男同士なんだからいいだろ、なぁシャルル？」

「・・・・う、うん／／。それとおいしかったよ／／／／」

「そりゃどうも」

こうして昼休みは終わっていった

ちなみに

陰で「「男なのになぜか負けた気が・・・・・」」と落ち込んでいたセシリアと鈴がいた

十二話（後書き）

実は昨日の時点この話は出来てました

しかしその時はまだシャルとのフラグは一切ありませんでした

そしてそれを投稿したときに感想で（シャル党でしたっけ？）猛烈なシャルのファンからパッシング来ると思い修正したらこんな時間になりました

本当にすいませんでした

十三話（前書き）

サゴーゾよりシャルが（こんなに人気が）強いとはｗ（。ｏ。＊）ｗ

シャル登場がＰＶ歴代トップになるとは

十三話

「え、えええっと今日も嬉しいお知らせがあります。また一人クラスにお友達が増えました。」

「ドイツから来た転校生のラウラ・ボーデヴィッヒさんです」

まわりでどういうこと？とか二日連続で転校生なんてとか呟いているが確かに同意だが

「み、みなさんお静かに！！まだ自己紹介が終わっていませんから。」

すると織斑先生が

「挨拶をしろラウラ！」

「はい、教官」

二人は知り合いなのか？

「ラウラ・ボーデヴィッヒだ」

・・・・・・・ん？

「あの以上ですか？」

「以上だ」

そうだきっと恥ずかしがり屋なんだな

すると一夏のほうを見て

「！貴様が――――」

すると一夏のとこに向かって行く

嫌な予感がするな

俺も立ち上がり

バシッ！！

ボーデヴィッヒの平手打ちを握手するという形で止めた

「よろしくなボーデヴィッヒ、俺は神谷映司だ。」

「なっ！？貴様なにをする！！」

「まま、仲良くしようぜ」

「き、きさｍ――――っ！！！！」

その時ラウラは一瞬で感じた

軍人なので何度も死線をさまよっているから人より危機察知能力が長けている

そして今、ラウラにこう呼びかけている

ーこいつには逆らうなー と

そして反論するのをやめ、一夏に

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

とだけ言って席についた

・

・・・・・

今アリーナで一夏の訓練のため、篠ノ之やセシリア、鈴、シャルル、そして俺が集まっている

しかし篠ノ之、セシリア、鈴の教えがひじょーにわかりずらいので困っていたところシャルルが模擬戦を申し込んだ。

確かに一夏の場合、口で説明するよりも実践で学んでいったほうがいいだろう

そしてシャルルと模擬戦したのだが、何も出来ず一方的にやられて終了

その後、シャルルによる自分達のＩＳについての解説がはじまった

そして次に一夏に射撃を練習を始めた

次第に女子達がざわつき始めたので周りをで見てみると

ボーデヴィッヒがいた

「織斑一夏。貴様も専用機持ちだそうだな」

「ならば話は早い。私と戦え！」

「嫌だ。理由がない」

「ふっ、貴様にはなくても私にはある。」

「今でなくてもいいだろう。もうすぐツーマンセルトーナメントがあるんだからその時で。」

「なら・・・」

と言ってレールカノンを撃ってきた

すぐさまシャルルが防ぎ

「いきなり攻撃を仕掛けるなんて、ドイツの人は沸点が低いんだね！！」

シャルルも構えた

「フランスの第2世代ごときが私の前に立ち塞がるとわな。」

「いまだに量産型の目途が立たない第3世代型よりかは動けるからね」

なんとかその場は先生の注意によりおさまった

・・・・・・・

俺と一夏で寮に戻っていると

「答えてください教官!!!」

「なぜこんなところで教師など!」

と声が聞こえたので見てみると、

ボーデヴィッヒと織斑先生がいた

「・・・）なぁ映司これって？」

「・・・）少し静かにしろ」

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

それからもボーデヴィッヒの説得が続いたが、そろそろ来るな・・・

「――そこまでにしておけよ、小娘！！」

「少し見ない間に偉くなったな。１５歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は……」

「寮に戻れ、私は忙しい」

そしてボーデヴィッヒは走り去ってしまった

「そこの男子共。盗み聞きか？異常性癖は感心しないぞ」

バレたか

「なんでそうなるんだよ！千冬ね「学校では織斑先生と呼べ」」

「は、はい……」

「くだらんことをしている暇があるなら自主訓練でもしてろ。このままでは月末のトーナメントは初戦敗退だぞ」

「俺はそれが望みなんですがね」

「はぁ～馬鹿者が。あと織斑、お前が気にするようなことではないからな」

なんやかんやで弟のことおもってるじゃんか

「それと神谷、気をつけろよ」

（一応この前の視線の件は織斑先生にだけはなしてある）

「わかりました。あ、一夏先に寮に戻ってくれないか？」

「？別にいいがどうしてだ？」

「ちょっとした用がな・・・・・」

・　・　・　・　・　・

一夏と別れた後、適当に歩き回った

そろそろか
後ろにむかって

「いい加減鬼ごっこ続けるのはやめないか？」

そうさっきからずっと後ろで誰かがついてきている気配がした

織斑先生も気づいたらしくさっきのあのセリフを言ったのだ

ちなみにアリーナでＩＳを展開しなかったのも、相手に何かしらのアクションをさせるためだ

声をかけた瞬間、逃げる音がしたので追いかけた
そしてあっという間に犯人を追い込み、捕まえた

しかしその時何か柔らかい感触がした

えっ・・・・・・・・

よく見ると捕まえたと同時に胸もさわってしまったみたいだ
だが捕まえた人物ーシャルル・デュノアーは男のはずなのに

「エット、シャルルサン。コ、コレハ・・・・・」

「・・・バレちゃったか」

・・・・・・・

とりあえず俺の部屋に移動し、話を聞くことになった

「さて、シャルルさん？」

「う、うん」

「そろそろ、説明してほしいんだが？」

「……わかった。僕の実家からの命令なんだ」

「実家？デュノア社か」

「僕はね・・・・父の本妻の子じゃないんだよ」

「父とはずっと別々に暮らしていたんだけど、二年前に引き取られたんだ。そうお母さんが亡くなった時、デュノアの家の人が迎えに来てね。それでいろいろ検査を受ける過程でＩＳ適性が高いことがわかって。」

「んで、非公式だったけどテストパイロットすることになってね。でも、父にあったのはたったの二回だけ」

「話をした時間は一時間も満たないかな。」

「その後のことだよ、経営危機に陥ったの。」

「ＩＳの技術・情報力不足に悩まされて、未だ生産できるＩＳが第２世代止まり。それで３世代のＩＳ開発も遅れてて、この学園で３世代のＩＳとの戦闘データを取るために転入したの」

「そして俺や一夏と接近するために男となった」

「同じ男子なら日本で登場した特異ケースと接触しやすい。可能であればその使用機体と本人のデータを取れるだろうってね」

「俺や一夏、白式やオーズのデータを盗めと命令されたのか」

「そう。特に映司が使っていた不思議なＩＳをね」

「はあ～、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとね。それと、今まで嘘ついててゴメン」

「・・・・・・それで？」

「それでって？」

「お前この後どうなるんだ？」

「映司には女だってばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び出されるだろうね。後のことはわからない、良くて牢屋行きかな。」

いろいろと大人にも事情があるのはわかるだが
「おばあちゃんが言っていた、子供は宝物……。この世でもっとも罪深いのは、その宝物を傷つける者だ。」

「だからお前だけが罰せられるのはおかしいって話」

「で、でも」

「さらに、ＩＳ学園特記事項、本学園における生徒はその在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。ようは最低でも三年間は手出しできない」

「まぁ三年もあれば世界情勢なんてコロッと変わるさ」

「よく覚えていたね。特記事項って五十五項もあるのに」

「さすがに全部は覚えていないが、使えそうなやつぐらいならなんとかな」

「ふふ、映司庇ってくれてありがとね」

「ああ、気にすんな」

この時のシャルルはとても自然な笑顔であった

―おまけ―

「あ、ちなみにあの時どさくさに紛れて触ったよね映司　（ニコニコ）」

（・”・；）　ウッ

十三話（後書き）

シャル強すぎる

一向に書けずに気づいたらもうこんな時間

今日は早めに寝ようかな

十四話（前書き）

パソコンで見たらひじょーに見ずらい

見るならぜひ携帯のほうでお願いします

十四話

「あら？」

鈴は学年別トーナメントのための特訓のため、アリーナに来ていた

すると後ろから声をかけられ振り向くと

セシリアがいた

「ん？早いわね」

「てっきり私が一番乗りかと思っていましたのに」

「あたしはこれから学年別トーナメント優勝にむけて特訓するんだけど」

「私もまったく同じですわ」

「「・・・・・・」」

「この際どっちが上かはっきりさせとくってのも悪くないわね」

「よろしくてよ。どちらがより強く優雅であるか、この場で決着をつけてさしあげますわ」

「もちろん私が上なのは、わかりきっているけど」

「ふふ、弱い犬ほど良く吠えると言うけれど本当ですわね」

「どういう意味よ！」

「自分が上だってわざわざ見せようするところなんて典型的ですもの」

「その言葉そのままそっくり返してあげる！！」

二人はＩＳを展開し、近づこうとした瞬間

ドゴォォォォン！

何者かが砲撃してきた

見てみると漆黒のＩＳを装着した一ラウラ・ボーデヴィッヒ一がいた

「ドイツ第三世代機・シュヴァルツェア・レーゲン！！」

「ラウラ・ボーデヴィッヒ・・・・」

「どういうつもり！？いきなりぶっぱなすなんていい度胸してるじゃない！！」

「中国の甲龍（シェンロン）にイギリスのブルー・ティアーズか……ふん、データで見た時の方がまだ強そうではあったな」

「何？やるの？わざわざドイツくんだりからやって来てボコられたいなんてたいしたマゾぶりね。それともジャガイモ農場じゃそういうのが流行ってんの？」

「あらあら鈴さん、こちらの方はどうも共通言語をお持ちでないようですから、あまりいじめるのはかわいそうですわよ」

「貴様達みたいな奴が私と同じ第三世代の専用機持ちとはな。数くらいしか能のない国と、古いだけが取り柄の国はよほど人材不足と見える」

その一言がきっかけに

「この人はスクラップがお望みみたいよ！」

「そのようですわね！」

若干キレて
そしてとどめに

「ふん！ふたりがかりで来たらどうだ。下らん種馬を取り合うようなメスに、この私が負けるものか」

完全にキレてしまった

「今なんて言った！あたしの耳には『どうぞ好きなだけ殴ってください』って聞こえたけど！！」

「この場にいない人間の侮辱までするなんて。その軽口、二度と叩けぬようにしてあげますわ！！」

「ふっ、とっとと来い」

「「上等！！」」

映司Ｓｉｄｅ－

俺と一夏、シャルルは廊下を歩いていた

ちなみにだがシャルルは一夏と同室だ。

そしてたまたまボディーソープが切れたので補充しようとしたところ

まぁ見てしまって女とバレてしまい、俺を呼び三人で話し合いをした結果

この三人での秘密としようとなった

ちなみに俺はシャルルから

「少なからず責任ぐらいとってよね～　（ニコニコ）」

言われた

一夏に言うセリフでは・・・・・・・・・・

などと考えていると

妙に騒がしいのに気づいた

そして女子達の会話を聞いてみると代表候補生三人で模擬戦をしているらしい

気になり行ってみると

『ドゴォン！』

急いでピットに出ると爆発音がした。煙が晴れると

倒れているセシリア、鈴。そしてそれを見下ろしているボーデヴィッヒ

「くらぇぇぇ！」

鈴が衝撃砲を放ったのだが

「ふん無駄だ、シュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前では。」

そう言い右手を出すと、ボーデヴィッヒは一切被弾していなかった。

「龍咆（りゅうほう）を止めやがった!!」

「シャルルあれって・・・・・」

「うん、ＡＩＣだね」

「そうかあれを装備していたから龍咆を避けようとしなっかたのか」

「ＡＩＣ・・・なんだそれ？」

どうやら一夏以外はわかっているみたいだ

「シュヴァルツェア・レーゲンの第三世代兵器。アクティブ・イナーシャル・キャンセラー」

「慣性停止とも言う」

「へぇ～」

「本当にわかっているのか！！」

「今見た。それで十分だ」

それからはもうボーデヴィッヒの一方的な暴力であった

ラウラのワイヤーブレードで首をしめ、鈴とセシリアを殴る蹴るの

繰り返し

とうとう生命維持警告域超過の警告が出た

しかしまだ攻撃を止めない

そろそろやばいな・・・・・だがこのバリアが邪魔だ

コンボしかないか・・・・・

と考えいるととうとう一夏の我慢の限界が来てキレた

そして一夏は白式を展開し、全エネルギーを集約させ『零落白夜』を発動させ、
バリアを破壊した。

「その手を離せ！！！」

そしてボーデヴィッヒに一気に接近し、雪片弐型を振り下ろした

しかしまた停止結界に止められ

「感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな」

「やはり敵ではないな。」

「この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の一つでしかない」

「消えろ！！」

大型レールカノンを撃とうとしたがシャルルが助けた

今のうちに

「変身！」

【タカ！トラ！チーター！】

タカトラーターになりセシリア、鈴のところに向かった

「チッ！消えろ！！」

そして二人を担いだ俺に向かってカノンを撃ってきた

だが

「おせぇーよ」

高速移動でかわし、一夏のとこにあずけた

「一夏二人を任せたぞ。」

「お、俺も「もうシールドエネルギーがほとんどないだろ。俺がシャルルを助けに行くから任せたぞ」ああ。」

「え、映司さん・・・」

「映司・・・・」

セシリアと鈴が申し訳なさそうに言う

「気にすんな。」

そう言い、シャルルのもとにむかった

シャルルは左腕をワイヤーで縛られ、ボーデヴィッヒに引っ張られていた

そしてプラズマ手刀を出し

「いくぞーー！！」

シャルルに向かって、切りかかってきたが

なんとかトラアームで防いだ

「なっ！？き、貴様邪魔をするなぁ！！！」

「悪いがそれは出来ねえよ。それよりもうこんぐらいにしとかないか？」

「ふざけるな！！！」

シャルルを縛っていたワイヤーを消し、さらに切りかかったがかわし

「シャルルとりあえず下がれ」

「で、でも「頼む」・・・わかったよ。でも気を付けてね。」

「ああ、わかった。じゃあボーデヴィッヒ続きを始めるか」

「貴様あああぁぁぁ！！」

こうして映司ＶＳラウラの戦いの火蓋が切った

十四話（後書き）

とりあえずアニメ一期まではがんばります

十五話（前書き）

今回作者独自の解釈のもと、話が進みます

十五話

「はぁぁぁ!!」
まずボーデヴィッヒが攻めてきた
プラズマ手刀で切りかかったが

「あめぇーよ」
右手のトラクローでとめ、左のトラクローで引き裂こうとしたが

「チッ!!」
後方へ下がりかわしてから、そのまま停止結界で俺の動きを止めようとしたが

「チーターの瞬発力とスピードをなめんなよ!!」
一瞬でその場から離れた

「な、なんて速さ!?・・・なら!!」
レールカノンで撃とうとしているが俺に向けていない・・・・・まさかっ!!

「一夏逃げろ!!」
あの野郎!俺が無理だからって一夏を狙いやがって

だがどうやら違ったらしく

「え、映司後ろ！」

一夏が叫ぶ

「なっ！！」

見るとボーデヴィッヒがすでに接近していた

「ふっ、貴様があんな荷物になるようなやつらを戦場に連れている時点で勝ち目などない！！！」

零距離から停止結界をくらった

確かに動けないが・・・・・・完全体のガメルの重力操作のほうがもっときつかったよ！

「はぁぁぁ！！」

なんとか自力で解除した

「そ、そんな馬鹿な・・・・」
まさか破られるとは思わず、ただただ驚愕するがすぐさま切り替え
ワイヤーブレードで俺の両腕を縛られ、動きが制限されてしまったが

「おいボーデヴィッヒ。拘束するならもっと全体的にするんだったなぁ」

「な、なにを!?」

動ける部分でメダルをトラからカマキリに変え、

【タカ!カマキリ!チーター!】

タカキリーターになり、マウントされているカマキリソードでワイヤーブレードを切った

そしてまたチーターのスピードを使い、高速で移動をしボーデヴィッヒを翻弄させた

そして後ろからカマキリソード切りつけ、そしてまた離れる―ヒット&アウェイ―の戦法をとった
これはこの亜種形態にあっている戦法なのだからと停止結界をする

際、停止させる対象物に意識を集中させなければ維持できない

つまりあいつがついていけないスピードで移動し続ければ停止結界は使用できないはず・・・だと思う

「くっ！」

意外にもこの仮説はあってたらしく、さっきから何も出来ていない

すると

「貴様なんかに負けてたまるかぁぁ！！！！！」

ボーデヴィッヒはレールカノンをところ構わずにぶっぱなしてきた

「このままじゃほかの奴にまで被害が・・・・」

仕方ないので移動しながらスキャニングチャージしようとしたが

「いい加減にしろ！」

見るとボーデヴィッヒに刀を突きつけている織斑先生がいた

とりあえず俺は変身を解除した

「はぁ～、やれやれこれだからガキの相手は疲れる」

「模擬戦をやるのは構わん。だがアリーナのバリアーまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそうおっしゃられるなら。」

素直にボーデヴィッヒはＩＳを解除した

「織斑、デュノア、神谷お前たちもそれでいいな？」

「は、はあ」

「教師には『はい』と答えろ。馬鹿者！！」

「は、はい」

「僕もそれでかまいません」

「わかりました俺もそれでいいです」

「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止する。解散！」

そう言いこの場を納めた

帰り際に織斑先生が俺に

「話がある。あとで来い」

とだけ言って去って行った

十五話（後書き）

今回ライオンも出したかったけどどうしても無理でした
今後に期待を

十六話（前書き）

なかなかタコの使うタイミングが見当たらない・・・・・

十六話

模擬戦での騒動後、今俺らは保健室にいる

というのもセシリア、鈴のおみまいにきたのである

とりあえず二人は所々包帯で巻かれているが、重傷とまではいかなかったらしい

「別に助けてくれなくてよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

とりあえず第一声がそれかよ・・・・・・

「お前らなぁ～」

どうやら一夏も呆れてしまったみたいだ

「二人とも無理しちゃって～」

シャルルがそんなことを言った

「あん？どういうことだ？」

意味がわからなかったのでシャルルに聞いてみた

「二人とも好きな人に格好悪いところを見られたから、恥ずかしいんだよね～」

なにかシャルルが呟いたので聞こうと思ったら

「ななな何を言ってるのか、全っ然っわかんないわね！」

「べべっ、別にわたくしは無理なんかしてませんわ」

と思いっきり動揺しながら言ってるがどうしたんだ？

「というかさ、なんでお前らはボーデヴィッヒと模擬戦をし始めたんだ？」

そんなことを聞いたらタイミング悪く、飲み物を飲んでる最中だったのでむせてしまった

「お、おい大丈夫か？」

さすがに悪気がしたので二人の背中をさすった

「あ、いや、それは・・・・」

「まぁなんと言いますか、女のプライドを侮辱されたから・・・・ですわね。」

「うん？」

どうやら一夏はわからないみたいだが

「一夏よ、女子にもいろいろとあるんだから俺らがいちいち気にしなくてもいいんだぞ」

「ならいいが・・・」

「・・・あ!!もしかして映司の、う一一一!?」

するとすぐさまセシリアと鈴はシャルルの口をふさいだ

「アンタって本当に一言多いわね!」

「そ、そうですわ。まったくです～。」

何してんだよ

すると呆れた一夏が

「やめろって二人とも、さっきからけが人のくせに動きすぎだぞ」

ポンッ

二人の肩に触ると

「「いっっっ!!!」」

痛がってうずくまってしまった

「ほらやっぱり痛いんじゃん、馬鹿だな無理して～」

バシッ
とりあえず一夏を叩いた

「バカ野郎。怪我しているところを刺激すんなよ」

「いってぇ～。でも二人とも悪かったな」

「ま、まぁいいけどさ・・・」

「今回だけですわよ・・・・」

と言っているが一夏のことを睨んでいた

すると

ドドドドドドドドッ・・・・・！！

地鳴りがした

しかも徐々に大きくなってきている

ドカーン！

するとそこそこの人数の女子がドアを突き破って来た

そして

「織斑君！」
「デュノア君！」
「神谷君！」

「な、な、なんだなんだ！？」

「うるせぇ・・・・・・」

「ど、どうしたの、みんな？？」

「「「これ！」」」

女子達が一斉になにか突き出した
見てみると学内の緊急告知の文書だった

学年別トーナメントは二人組で行うことになりペアは任意で決めていいこと、ペアがいない娘は抽選で決めるということが書かれていた

「とりあえず私と組もう、織斑君！」

「私と組んで、デュノア君！」

「私と組まない？神谷君！」

「ええっと・・・・わ、悪い俺はシャルルと組むから諦めてくれ。」

「ちなみにだが俺も先約もいるんだ。今回は諦めてくれ」

すると女子達は「まぁ、そういうことなら」とか「男同士なら絵になるし」とか「神谷君が他の女子と・・・・・ふふ」と言いながら去っていった

怖え～よ　（（（（。Д。））））

「って映司あんた誰と組んだの？」

「そうですわ！！！」

「いねぇ～よ。あの場を誤魔化すための嘘だよ。」

「なら映司私と組みなさい！！親友でしょ！」

「いえ、ここはクラスメイトである私が――――」

「ダメですよ」

と遮る声が
見ると山田先生が

「あ、山田先生どうしてここに？」

「あ！神谷君／／／じ、実はですねお二人のＩＳの状態をさっき確認しましたけど、ダメージレベルがＣを超えています。トーナメント参加は認められないことを伝えにきまして・・・／／／」

「そんな!?私十分に戦えます!」

「そうです。納得できませんわ!」

すると表情が真剣な顔に変わり

「ダメと言ったらダメです。当分は修復に専念しないと、後々重大な欠陥を生じさせますよ。」

すると鈴が

「な、なら映司、あんたデュノアか一夏と組みなさい!!」

「あ?さっき一夏が女子の前で宣言してしまったんだから今更変えるのはきついだろ」

「・・・・ちっ!!」

舌打ちしちゃったよこの子は

・・・・・

「では私はこれで。あ、あの神谷も頑張ってくださいね／／／」

と言って山田先生が去って行った

「映司って人気者だね・・・・・・」

もの凄いシャルルが睨んでくるが俺は悪くない・・・・・・はずだ

十七話（前書き）

期間をあけたが量は少ないし大してストーリーは進みませんが

どうぞよろしくお願いいたします

十七話

あの後一夏達と別れ一人織斑先生の所へ向かった

「すいませんこんな遅い時間になってしまいまして」

「かまわん。とりあえず座れ」

「それで話っていったい？」

「ああ、お前に頼みたいことがある」

「ボーディッヒのことですか…」

「ああ、お前にラウラを任せてみようと考えているんだが」

「何故俺なんですか？別に一夏でもいいのでは？」

「今のあいつが何言ってもラウラがそれを聞くとでも？ならば少なからず貴様が言った方が聞くだろ」

「そんなもんですかね～」

「それに貴様のことをある程度信頼してるんだが」

とニヤリと笑みを見せた

・・・・はぁ～

「わかりましたよ。そんなこと言われたら断れませんし、善処してみますよ。」

「ふっ、頼んだぞ。」

・　・　・　・　・

―翌日―

さてどうしたものか
あれからある程度考えたんだが話しかけるきっかけが全然見当たらない
第一昨日模擬戦したばっかりだから話しずらいなぁ～

などと考えていると

「おい！」

後ろから話かけられた

振り向くとボーデヴィッヒがいた

まさかあっちから話しかけてくれるとは思っていなかったから少し驚いたが

「ん？なんかようかボーデヴィッヒ？」

「貴様はなんでこんなとこにいる？」

質問の趣旨がよくわからない

「あ?言っている意味がよくわからないのだが・・・・」

「貴様ほどの実力持っている者がなぜこんな学園にいる?」

なるほど
俺の力に気づいたわけか・・・・・でも

「安全できちんと学業に専念できるからこの学園に入ったんだよ」

さすがに中卒で企業にはいるのもなぁ・・・・・・

「私のところ（軍）に来い!!!」

「あ～ボーデヴィッヒさんよ。その発言は誤解を生む可能性があるからやめようか。」

「・・・・・??」

わかってないみたい

「それと俺、軍っていうのはあまりなぁ～。ガッチガッチな訓練やら生活をするのはめんどいし」

正直俺には向いてない

「だがこんなとこで学べるものなどない！！！」

「それを判断するのはお前ではなく俺だ。第一そんなこと言うならなんでお前もここに来たんだ？」

「そ、それは・・・・・・」

「言いたくないなら言わなくてもいいけどさぁ」

とりあえず話が出来ただけ良しとしよう

「んじゃボーデヴィッヒ、またな」

「・・・・・・あぁ」

そう言いその場を後にした

ラウラＳｉｄｅ－

私は昨日の模擬戦を振り返り、やはりあの男－神谷　映司－は他の奴とは違うということを再確認した

私の持てるすべての武器の攻撃も簡単に往なされ、停止結界すれも破られてしまった

そんな奴がこんな場所にいるなどとは

私の部隊にいてくれたら・・・・・・・・・はっ！？　　な、何を考えているんだ／／／

そ、そうだあいつさえいれば我が部隊は負けなしのものとなるとか、考えていただけだ／／／

一人ツンデレをしていると前からその張本人である映司が見えたので

「おい！」

と話しかけてしまった

・
・
・

「行ってしまった・・・・・」

話終わり去っていく映司を見て若干寂しさを覚えてしまったラウラであった

映司Ｓｉｄｅ―

学年別トーナメント当日―更衣室にて―

あれから、ちょくちょくボーデヴィッヒとは話すようになりそこそこいい関係になった

しかし依然として一夏のことを恨んでいるようだが

これぱかりはどうにかならないので口出しはしなかった

ちなみに学年別トーナメントは布仏とペアになった

ん？理由？

なんとなくだ

とまぁ着替えながら一通りの出来事を思い出していた

「へぇ～。しかし、すごいなこりゃ……」

ふと一夏が言い、何かと思い見てみるとモニターに観客席、それも特別に用意されている席に各国政府関係者、研究所員、企業エージェント、その他等のお偉いさん方がいた

「三年にはスカウト、二年には一年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。」

「ふーん、ご苦労なことだ」

どうやら自分には関係ないと考えたのか軽く言う

「はぁ～なんでこんな人前で・・・・・めんどくさい」

「一夏はボーデヴィッヒさんとの対戦だけが気になるみたいだね。映司はいつも通りだけど」

「ん？まあ、な。」

「あんまり感情的にならないでよね。ボーデヴィッヒさんは、おそらく一年の中では現時点での最強だと思う」

「ああわかってる。だが映司のほうが上だろ。なぁ映司？」

「興味ない」

「相変わらずだな」

などと話していると対戦表が掲示された

見てみると

「対戦相手が決まったね」

見てみると

「「えっ！？」」

「・・・・・・・」

ラウラ・ボーデヴィッヒ　篠ノ之　箒ＶＳ織斑　一夏　シャルル・デュノア

となっていた

（ちなみに映司は同じクラスの女子とだったがまぁスルーして）

十七話（後書き）

とりあえずアニメ一期までなら具体的なストーリーが出来てるのですが

もしそれも終わってアニメも二期やんなかったら

前々からリリなの小説を書きたかったので書こうと思ってるのですがどうでしょう？

十八話（前書き）

シャルルの使っている武器が何なのか
判断出来ない

十八話

「しょっぱなからとか、運がいいのか悪いのか。」

観客席に移動した後（一応制服を着ている）、鈴とセシリアの間に挟まれた

そしてふと一言と呟いたがどうやら二人には聞こえていなかったみたいだ

「あの二人はボーデヴィッヒさんのＡＩＣをなんとかしないかぎり勝機はありませんわね」

「ええ、あれには思い出したくないほどにやられたかね……」

「大丈夫だろ」

「「え！？」」

二人は俺が言ったことに驚いていた

「前回の俺の戦いである程度の攻略のヒントは与えているし、それにあの二人ならなんとかするだろう」

アリーナのほうを見ると対峙する一夏とボーデヴィッヒがいた

アリーナＳｉｄｅ－

「一回戦目で当たるとは、待つ手間が省けたというものだ」

「それは何よりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」

カウントが始まる

皆さまざまな理由でアリーナにいる一夏達を見る

そしてカウントが一になり

「「叩きのめす！！」」

と一夏、ラウラが言い放ち試合が始まった

試合が始まるや否や一夏が瞬時加速で先制を狙った

しかし、ボーデヴィッヒは右手を突き出し、ＡＩＣで一夏の動きを止めた

「くっ……！」

「開幕直後に先制攻撃か。わかりやすいな」

「そりゃどうも。以心伝心で何よりだ」

そのままボーデヴィッヒがレールカノンで撃とうとしたが、一夏の後ろからシャルルが現れ

アサルトカノン「ガルム」で射撃して、ボーデヴィッヒのレールカノンの砲撃をずらした

「逃がさない！！」

後ろに下がったボーデヴィッヒに追い打ちをかけるシャルル

シャルルお得意の高速切替（ラピッド・スイッチ）を使い反撃に出るが
箒に邪魔されてしまった

「私を忘れてもらっては困る」

箒は刀を構えシャルルに突撃するが一夏がそれを防ぎ、シャルルが
狙い撃ちをしようとした

しかしボーデヴィッヒがワイヤーで無理矢理箒を後ろに投げ、そのままプラズマ手刀で一夏に切りかかった

またシャルルにはワイヤーを飛ばしたが、それはかわして切りかかろうとしている箒に

「相手が一夏じゃなくってごめんね」

「な！？馬鹿にするな！！」

とは言うもののシャルルの攻撃を防ぐことが出来ず、シールドエネ

ルギーをどんどん削られている筈であった

・
・　・　・　・
・

所変わりモニター室

この試合を見ていた山田先生が

「先に篠ノ之さんを倒す作戦でしょうか？」

と質問し、それを織斑先生が

「賢明だな。ボーデヴィッヒは自分側が複数の場合を想定していない。パートナーのことは端から数に入れていない。」

「それに比べて織斑君とデュノア君の連携はすばらしいの一言ですね」

「このくらいは出来て当然だ」

・

・・・・

シャルルは箒に止めを刺し、また一夏の援護に入った

「おまたせ」

「助かったぜ、ありがとよ。箒は？」

「お休み中」

「さすがだな。それじゃあ、俺はこれで決める！！」

一気に勝負を決めるため零落白夜（れいらくびゃくやを発動した

シャルルも連装ショットガン「レイン・オブ・サタデイ」を出し、

撃ちながら接近した

ボーデヴィッヒはＡＩＣを使い、シャルルの動きを止めた

しかしシャルルに集中している内に一夏が切りかかったが、かわされてしまった

「もしかして……」

一夏はあることに気づき、また切りかかった

「無駄なことを」

しかし今度は一夏がＡＩＣで動きを止められ、レールカノンを構えたが

「忘れたのか。俺たちは二人なんだぜ」

するとまたもや一夏の後ろからシャルルが現れ、連射した

今回はあたってしまいボーデヴィッヒのＩＳから黒い煙があがっていた

「やっぱり！！思った通りだ」

一夏はＡＩＣの弱点に気づき、それが正しかったと検証できた

そしてまたシャルルの連射をくらい、

逃げたところを一夏が止めで刺そうとしたが、運悪くエネルギー切れを起こしてしまった

「限界までシールドエネルギーを消耗してはもう戦えまい！」

なんとか一夏の援護に出たシャルルだったが

「邪魔だ！！」

ワイヤーブレードで攻撃されてしまった

「シャルル！！」

シャルルに気を取られてしまい

「はぁぁぁぁ！！！」

プラズマ手刀で攻撃され、地面に叩き付けられてしまった

さらに追撃しようとしたがシャルルがそれを止め

「まだ終わってないよ」

一瞬で距離を詰めながら射撃した

「瞬時加速だと!?データにはなかった」

「今初めて使ったからね!」

「この戦いで覚えたというのか!!」

「だが私の停止結界の前では無力!」

ドンッ!

しかし後ろから攻撃され、見てみるとシャルルのアサルトライフルを構えた一夏がいた

「この死に損ないがぁっ！」

一夏にワイヤーで攻撃したが

「どこを見ているの？」

シャルルがいつの間にか間合いを詰め

「この距離なら外さない」

盾の装甲がはじけ飛び、

「『盾殺し（シールドピアース）』……！」

ボーデヴィッヒの腹部に、パイルバンカーの一撃が叩き込まれた
今の一撃でエネルギー残量は大幅に削られ、さらにボーデヴィッヒは壁に叩き付けられた

「やった！」

一夏の一言で周りの観客たちは盛り上がった

だがそれでも終わらず、シャルルは何度も何度もバンカーを叩き込んだ

ラウラＳｉｄｅ－

私は負けられない……負けるわけにはいかない！！

人工合成された遺伝子から作られ、人の温もりなど知らずに生きてきた。

ただ兵士として必要な技能と心のみを教えられてきた。

誰よりも優秀な兵士としての性能を手に入れていた。それが私の存在意義だった。

だが……最強のＩＳが現れたことにより、ただちに私にも適合性向上のため肉眼へのナノマシンの移植手術が施された。

しかし私の体は適用しきれずその結果

私は出来損ないの烙印を押された。

そんな私に光を、希望を、生きる意味を与えてくれた人、織斑千冬。

あの人の教えで私は部隊内最強の地位を手に入れた。だが、それはもう私の生きる意味ではなくなっていた。

私は、教官のようになりたかった。

常に強く、凛々しく、堂々と、自分という存在の意味を疑いもしない、人を超越したような存在だと感じた。

その姿に憧れた、教官のようになりたかった。

教官がただ近くにいるだけで、生きる力が、勇気が、私の中から湧いてくるのを感じた。

でも、教官が弟のことを話すときだけ、優しそうな笑みを浮かべる。それは教官がただの人間だということを意味していた。

ちがう、私の憧れる教官は強く、凛々しく、堂々としていてのに

だから許せない

教官をそんな風に変える男

認めない

（力が、欲しい）

『――願うか……？汝より強い力を欲するか……？』

寄こせ最強の力を

比類ない最強の力を！！！

その瞬間ボーデヴィッヒのＩＳから電撃が走り、そして形が徐々に

変わり

ついにボーデヴィッヒをのみこみ、それの姿は女性の形をしたものとなった

十八話（後書き）

リアルタイムでオーズの最終回を見ていたらこんか時間に…

しかし見た感想として終わりかたが綺麗にまとまっていた

監督さんにはもう感謝感激です

十九話（前書き）

またオリジナル展開を付け加えました

十九話

映司Ｓｉｄｅ－

シャルルの盾殺し（シールド・ピアース）、アルトのリボルビング・ステークみたいだな

かっこいいな～

などと考えていると、ボーデヴィッヒの叫び声が聞こえ見てみるとボーデヴィッヒは黒い靄？みたいなものに取り込まれていた

そして現れたのは黒い女性の形をしたＩＳ（これ以降は黒いＩＳと表記）だった

また嫌な感じがするな

「悪い二人とも、ちょっと行ってくる」

「「えっ！？」」

二人を余所に俺はアリーナに向かった

・・・・・・・

アリーナに着くと黒いＩＳが一夏に切りかかり、一夏はそれを防ようとしたが力負けをし倒されてしまった。
そして一夏を切った。その一撃で白式はシードエネルギーが０となったから光となり消えてしまった。

見ると一夏の左腕から出血していた

すると何を考えたのか

「この野郎！！！」

黒いＩＳにつこんで行った

あの馬鹿……

「何をしてんだ！！」

なんとか俺が一夏を止めようとしたが

「放せ！あいつ、ふざけやがって！ぶっ飛ばしてやる！」

「いいから落ち着け」

「放せよ映司！！邪魔をするならお前も一一一一一」

一夏の胸ぐらを掴み

「おい、いい加減にしろよ！何があったが知らないが今のお前がいつに挑んだところで何になる！！」

俺の言葉に少し落ち着いたのか

「あの技は千冬姉だけのもんなんだ……」

「はぁ～、今の白式のはシールドエネルギーがない。それにお前がやんなくても教師部隊がなんとかするみたいだ。」

「……映司、これは俺がやらなければいけないんじゃなく俺がやりたいんだよ」

「で？シールドエネルギーはないんだぞ」

「エネルギーがないなら持って来ればいいんだよ。」

シャルルがそう提案し、リヴァイヴからコードを出しそれを一夏の白式の待機状態であるブレスレットに繋いだ

「リヴァイヴのコア・バイパスを解放、エネルギーの流失を許可」

シャルルが白式にシールドエネルギーを与える

「約束して。絶対に負けないって」

鉄砲の形で一夏に指を指した

「もちろんだ。負けたら男じゃねえよ」

「じゃあ、負けたら明日から女子の制服で通ってね」

「そうだそうだ。そんくらいはしてもらわｎ「映司が」いと困る。」

ん？……俺か！？？（、□、；）

「あの～シャルルさんこれｈ「いいぜ」一夏君よ、笑顔でそういうこと言わないでくれるかな！！」

やばいぞ～勝手に話がついちゃっているよ

・　・　・

エネルギー供給が終わったのかシャルルのラファールが消えた

「これで完了だ」

「ありがとよ。白式を一極限定モードで再起動する」

「やっぱり武器と右腕だけで限界だね。」

起動したものの、シールドエネルギーの残量を考えるとあれが限界なんだろう

「充分さ！」

そして黒のＩＳがこっちを向いた

そうだ一言、言っとかなきゃ

「おい一夏よ、もしダメだったらお前も道連れにするからな」

「任せろ！」

「零落白夜――――発動！」

「行くぜ偽者野郎。」

『ガキン！』

まず最初の一撃で相手の刀を弾き、そして次の一撃で縦に黒いＩＳを断ち斬った

そしてボーデヴィッヒが出てきて、一夏は受け止めようとする

……だが

「うわっ！？」

黒い靄が一夏を吹き飛ばし、またボーデヴィッヒを取り込んでいった

今度はさっきよりか大きさが小さくなったというか俺らと同じくらいになり、さっきより頑丈な鎧を纏っていた

「一夏大丈夫か！？」

篠ノ之が一夏に駆け寄る

「ああ、だけど一体何が……」

ラウラＳｉｄｅ―

嫌だ

私はあいつなんかに助けてもらいたくない

私は、私は……

その瞬間また私に靄が纏わった

それはもう嫌だ

助けてください教官……映司！！！！！！！

映司Ｓｉｄｅ―

すぐさま教師部隊がボーデヴィッヒを取り押さえようとしたが簡単

に一蹴されてしまった

現時点でまともに戦えるのは俺だけか

その時、ふとある言葉を思い出した

『ああ、お前にラウラのことを任せてみようと考えているんだが』

はぁ～、俺は織斑先生に任されたじゃないか

・・・・・・

さてどうするか

ボーデヴィッヒを無傷で助けるにはどうすればいいか悩んでいると

「映司……」

シャルルが不安そうな顔で近づいてきた

「ん？どうした？」

「絶対に無茶しないでよ。あのＩＳ見てる限り一筋縄ではいかないってことはわかるけど、それでも……」

「安心しろ。俺もボーデヴィッヒも無傷で終わらせてやるよ」

そしてシャルルを軽く撫でた

しかし、本当に困ったなぁ

ボーデヴィッヒが中にいるからコンボはさすがに使えないし

う～ん……ん！？

そういえばこんな状況に似たのをオーズでも見たことがあるな

なんだっけ？

……あっ！？

カザリのヤミーだ！！

カザリのヤミーは宿主に白ヤミーを寄生させて、成長したヤミーは宿主を己の体内に取り込んでしまう

これの対処法は…あれだ！！

ドライバーにタカ、トラ、チーターのメダルを入れ

「変身！」

【タカ！トラ！チーター！】

「行くぞ！！」

チーターのスピードで一気に黒いＩＳに近づく

黒いＩＳは刀を振ってきたが、加速した勢いでのトラクローの一閃

で弾き

黒いＩＳの肩を掴み

「これならどうだぁ！！！」

敵に組み付いて素早い連続蹴りを繰り出す―リボルスピンキック―を喰らわした

すると蹴り続けていると鎧が破壊でき、ラウラが見えた

だが蹴りの速度を緩めると徐々に靄が元に戻ろうとしたので

「ボーデヴィッヒ！！」

呼びかけると

「え、映司……」

「た…助けて…！」

小さな声で俺に助けてと言い、手を伸ばした

「助けるよ！絶対！」

俺も必死に手を伸ばし、そして

『ガシッ！！』

ボーデヴィッヒの手を掴み、引っ張った

そしてそのままボーデヴィッヒを抱えた

「……映司…」

俺の名前を呼んだ

「はぁ～、無理しやがって。いいから今は寝てろ」

そう言うとボーデヴィッヒはまた目を閉じた

「まったく、なんてかわいい寝顔をしてんだよ」

「「映司〜」」

一夏、シャルル、篠ノ之が来た

「やったな映司！！」

「でもよくあんなこと思いついたよね」

「だがまぁ…よくやったな」

（上から一夏、シャルル、箒という順番である）

「ああ、ありがとな。これでやっと帰れるよ」

などと話し盛り上がっていた

これですべて終わりかと思った

しかし黒いＩＳはむくりと立ち上がった

「な、なんで！？」

「操縦者は今はいないはずなのに！」

「前回の無人ＩＳと関係あるんじゃ……」

「チッ！！だが今は好都合だ！！」

「お前ら悪いが離れてくれ」

「「「わかった　（よ）」」」

だいぶ離れてくれた

これで心置きなく使える一猫系のコンボ一が

タカをライオンのコアに変えスキャンした

【ライオン！　トラ！　チーター！　ラ・タ・ラ・タ～！　ラトラーター！！】

「うおおおおおおおお！」

ラトラーターになったと同時に強力な熱線ーライオディアスーを黒いＩＳに放った

もちろん防ぎようがなく、大ダメージとなった

その証拠としてところどころからショートしている部分が見えるからだ

「はあああああ！」

ライオディアスを消し、黒いＩＳにトラクローで切り裂き

「はあっ！」

二本のトラクローで突き

「ふっ！はあっ」

さらに切り裂き後ろへ吹き飛ばす

止めを刺すため

コアメダルをもう一度スキャンして

『スキャニングチャージ！』

「ふっ！！」

そして全身を輝やかせつつ前方に黄色い３つのリングを出現させ、

チーターのスピードでリングを潜り抜け急接近し

「はあああ！！」

「セイヤーッ！」

トラクローでＸ字に切り裂く―ガッシュクロス―で切り裂いた

黒いＩＳは爆発し、煙がはれると待機状態のレッグバンドとなっていた

「はぁ…はぁ…」

変身を解き、ふらつきながらも一夏達のところにむかった

ラトラーターは豊富な能力を備えているが、その反面コンボの中でも特に制御が難しい

もう少し力の制御が出来るようにしとかなきゃ

そして倒れそうになるが

「映司！！」

シャルルに支えられた

「わ、悪い。運んで行ってくれないか？」

「ちょ、ちょっと映司／／／／」

結局その後は一夏が代わりにが運んだが、ずっとシャルルは顔を赤らめたままであった

十九話（後書き）

セシリアと鈴が空気に……

次回にね……うん
出します

二十話

ラウラＳｉｄｅ―

『ボーデヴィッヒ！！』

『助けるよ！絶対！』

これは……夢？

でも絶対に助けてくれるか／／／

だがここで夢は終わり、目を覚ました

「私は……、何が…起きたのですか……？」

状況を確認するため隣に座っていた教官に聞いた

「一応重要案件であるうえに機密事項なのだがな」

「ＶＴシステムは知っているな？」

「Ｖａｌｋｙｒｉｅ　Ｔｒａｓｅ　Ｓｙｓｔｅｍ（ヴァルキリー・トレース・システム）……」

過去のモンド・グロッソの戦闘方法をデータ化し、そのまま再現・実行するシステム。

「そう。ＩＳ条約でその研究どころか開発、使用全てが禁止されている。それがお前のＩＳに積まれていた」

「精神状態、蓄積ダメージそしてなにより操縦者の意思。いや願望か、それらが全て揃うと発動するらしい」

「私が望んだからですか……」

私のせいでこんなことに……

「ラウラ・ボーデヴィッヒ！」

「は、はい！」

「お前は誰だ？」

「私は……」

「誰でもないなら丁度いい、お前はこれからラウラ・ボーデヴィッヒになればいい。」

「え？」

「それとお前は私にはなれないぞ」

そう言い去ろうとしたが振り返り

「忘れていた。神谷からの伝言だ。」

「『ボーデヴィッヒは長い上に呼びづらいから今度からはラウラと呼ぶから』だそうだ。まったく教師をなんだと思っているんだ。」

と言いつつ、まんざら嫌そうな顔ではなかった

「大人しくしていろよ」

そう言い去っていった

「ふ、ふふ……ははっ」

不思議と笑いがこみ上げてきて、久しぶりに本当の意味で笑った

映司Ｓｉｄｅ－

ふらふらになりながらも部屋に戻っていた

ちなみに一夏は切られたとこの治療で篠ノ之はその付き添い

シャルルは一緒について行ってくれると言ったが途中で女子共に囲まれてしまった

俺だけ無事に抜け出すことができ、今にいたるん？なぜ助けないかだって？

助けないんじゃなく助けられないんだ……

すまんシャルルよ

しかし

「だる～～。コンボにもそこそこ慣れてきたがそれでもきっついな～」

とうとう限界で倒れそうになったが

ポスッ

ふと誰かにもたれかかってしまった

見てみると呆れた顔をした織斑先生がいた

「はぁ～、何をしている馬鹿者が」

「す、すいません。わざとじゃないんですが……」

そう言い先生の肩の肩を貸してくれた

「構わん。」

「あの～これは？」

「廊下で倒れられていては邪魔だからな」

なかなかの毒舌っぷりだこと

「わざわざすいません」

「ラウラを助けてくれたからな、気にするな」

「先生のそういうとこ本当にかっこいいですよね」

「……」

ヤバイ怒らせちゃった　（（（（（；゜Д゜）））））

「あ、あの～生意気なこと言ってすいませんでした」

「……！！あ、ああ気にしていない」

なんか一瞬驚いたように見えたが気のせいだろう

「それと」

「はい？」

「ラウラのことすまなかった。しかしおかげであいつもいろいろと吹っ切れることが出来たみたいだ」

「まぁ先生との約束だったし、それに俺自身もなんとかしてやりたいとは少しながら思っていましたからよかったですよ。」

「ふっ。だが……覚悟しておけよ」

「何をですか？」

「はぁ～、まったくお前というやつは……」

「？？？？？？？？？？？」

よくわからないが、何故か呆れられてしまった

二十話（後書き）

出来たら深夜にもう一度投稿するかもしれません

二十一話（前書き）

これは明日投稿すんのは無理かも

二十一話

「う〜〜〜」

「ねえ映司、本当に大丈夫？」

今男子三人で食堂に移動している

あの後は部屋で少し仮眠をとっていたが一夏達に起こされてしまい、泣く泣く食堂に行くことになった

・・・・・・・

「結局トーナメントは中止だって」

シャルルがふとそんなことを言ってきた

「ただ個人データは取りたいから、一回戦は全部やるようだよ。」

ってことは俺もか
嫌だな～

「ふぅ～ん。ん？」

一夏が何かに気づいたみたいで視線をそっちに向けたら

女子がこっちを見ながら話している

「優勝、チャンス消えた……」

「交際、無効……」

「うわーーん！」

「「「うわーーーーーーん」」」

泣きながら走り去っていってしまった

何だあれ？

さらに横を見ると篠ノ之がいた

一夏が席を立ち、篠ノ之のとこに向かっていった

「そういえば箒、先月の約束な」

「え！？」

「付き合ってもいいぞ」

「おーーーー！！」

「ほ～」

まさかの告白に俺らは驚いた

「なに！？」

「本当に！本当なのだな！！」

「お、おう」

あまりの必死さに一夏も驚いている

「コホン。なぜだ?理由を聞こうじゃないか」

「幼馴染の頼みだからな。付き合うさ」

「そうか!!」

「買い物くらい」

あっ殴られた、

「そんなことだろうと思ったわ!!」

そしてトドメのーーーーローキック　（＊＾ー゜）ｂ

一夏はうずくまっている

「しっかしあいつも女子の気持ちをわかってないね～」

「映司だってわかってないくせに……」

「ん？何か言った？」

「べつに～」

不機嫌なシャルルであった

「織斑君、デュノア君、神谷君朗報ですよ！！」

「今日は大変でしたね。でも三人の労をねぎらう素晴らしい場所が今日から解禁となったのです！！」

「え？」

「場所？」

「男子の大浴場なんです！！」

・・・・・

話し合いの結果バラバラに入ったほうがいいということで、じゃんけんをして順番を決めた

順番は

1、俺
2、シャルル
3、一夏

という順番になり今俺はこの大浴場を楽しんでいる

「こんなにゆったりと出来た入浴も久しぶりだな。ふぁ～あ眠くなってきた」

若干うとうとし始めたので上がろうとしたら

「お、おじゃましま～す／／／」

「！！！！！！！！！」

一気に眠気なんぞもんは吹っ飛びやがった
おいおい洒落になんないぞ

「あ、あんまり見ないで。映司のエッチ／／／／」

「な、なななんでここに／／／／／」

「僕が一緒だと嫌？」

「そ、そういうわけではないんだがこれは・・・・・／／／／／」

「やっぱり映司とはいってみようかな♪って思ったから。迷惑なら上がるよ」

「いやいやいや、俺はもう上がろうとしてたから、堪能もしｔ「待って！！」」

「大事な話だから映司にも聞いて欲しい」

「・・・・・・・わかった」

「その～前にも言ったことなんだけど」

「学園に残るって話か？」

「そう、それ。僕ねここにいようと思う。映司がいるからここにいたいと思うんだよ」

「・・・・・・・・・・」

黙って話を聞くことにした

「それにね、もう一つ決めたんだ」

「僕の在り方を」

そう言い背中にくっついてきた

「／／／あ、在り方？」

「シャルロットって呼んでくれる？二人きりの時でいいから」

「それが本当の・・・・・・・・・・・・」

「そう、僕の名前。お母さんがくれた本当の名前。」

「わかったよ”シャルロット”」

「うん」

・・・・・

翌日

「え、え～と今日はみなさんに転校生を紹介します。」

山田先生が歯切れ悪そうにそう言った

そして入ってきた生徒を見て教室がどよめいた

だってその人物は――――――――

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしくお願いします」

なんだから

しっかしこれがあいつなりの答えか

「え、ええっとデュノア君はデュノアさんということでした」

「は!?」

篠ノ之が驚いたようだが無理もないだろう

「え?デュノア君って女……?」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って、織斑君、同室だから知らないってことは――」

教室中が騒がしくなった

うんうん本当に一人部屋でよかった　（＾－＾＊）

しかし

「ちょっと待って！昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね！？」

ギクッ（；。Д。）！

少しま、まずいかも

「一夏！！」

一夏にキレる篠ノ之

「き、昨日は俺らはたまたまべ、別々に入ったから」

よし苦しいがボロだけは出さなかったことにかんｓ「だけど映司は偶然一緒になったみたいだからあるいわ・・・・・・・・・」

あるいわじゃねーーよバカ！！！

おいどうすんだよ殺気じみたものがさっきからセシリアから送られてきているし

他の女子からもチラチラ見られているし

ここはなんとかしなきゃ

「じ、実はｄ『ドオォォォォォォン！！』ひゃーーーー！！！！！」

壁をぶち壊し鈴が来てしまった
おいおいＩＳ起動させてんじゃねーーかよーーー！

「映司！！！！」

こんな至近距離で龍咆(りゅうほう)は死ぬって！！

無情にも龍咆(りゅうほう)は発射された

いやーーーーーーーーーーーー

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・あれ？

何も起きなかったのか？

恐る恐る目を開け見てみると、停止結界を発動していたラウラがいた

「あーーー助かった。ラウラありがｔ『チュッ』ん！？」

キ、キスされた・・・・・・・・・・・・しかも深めのやつ／／／／／

「お、お前を私の嫁にする！決定事項だ！異論は認めん！」

「「「「「「えーーーーーーーーーーー！！！！！！！！！！」」」」」」

この時三人ほど黒いオーラが出ていたけど映司はそれどころではなかったのであった

・・・・・・・・・・・・・

場所は変わりとある研究所にて

モニターにはセシリアとのクラス代表決め、乱入者と無人ＩＳの際、そしてラウラが暴走した際に戦っている

ある人物が映り出されていた

「うふふふ～、もう少しで会いにいくから楽しみに待っててね～”
えー君”♪」

二十一話（後書き）

最後になんとかプッチャンじゃなく天才さんが出しました

上手く表現出来たか微妙だが……

二十二話（前書き）

なんとか大学の前期の単位一つも落とすことなくすみました

だいぶ気持ちが楽に

二十二話

ここはまた例の研究室である

ウサミミが装着されたカチューシャをつけており、童話に出てきそうな独特な格好をしている
例の人物ー篠ノ之　束ーはディスプレイを操作していた

すると

♪～♪～♪～

独特な着信音がなり、コンパクトにたたまれていた束のウサミミがピーンとなり

「！！こ、この着信音はぁ」

「もすもす、終日（ひねもす）～？」

「はぁ～い♪皆のアイドル、篠ノ之束だよ」

電話をかけた箒はキレて電話を切ろうとしたが

「って待って待って！切らないで箒ちゃ～ん」

「姉さん．．．．．．．」

「やぁやぁやぁ。我が妹よ～。うんうん。用件は分かっているよ～」

「欲しいんだよね～？君だけの専用機が」

「！」

「勿論、用意してあるよ♪最高性能にして規格外、そして『白』と並び立つ者―その期待の名前はぁ～」

「『紅椿』（あかつばき）ッ！！」

・・・・・・・・・

辺り一面真っ白ということは、またここか・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

メズールが来る前に逃げなければ

「ぼうや何処にいくのかしら♪」

あら見つかっちゃった

振り返るとメズールがいつも通りいた。後ろには大量の水が淀めきながら

・・・・・・・・・・・・ん？

「あの～メズールさん後ろのは・・・・・・・・・・・・・」

「あらどっかの誰かさんが、次々と女子達を落としていってるから
少し反省させるために・・・・・・・・・・・・・・ふふ♪」

こわぇ～よ（（（（（；゜Д゜）））））

「わ、悪い。今回はこれで」

と言い全力で逃げ去った

しかしあっちは液状化して前に回り込んだ

「もう逃げられないわよ。それじゃ」

「…少し、頭冷やそうか？」

「い、いやーーー！！！！」

声優が違うぞ　（＊＾－゜）ｂ

・・・・・・・

「はぁ・・・・・・はぁ・・・・・・・、はぁ～死ぬかと思った～。ん？」

目を覚まし、ふとなにか感触があると思い見てみると足が出ていて

布団をめくり確認してみると何故か服を一切着ていないラウラがいた

「うわーーーーーー！！！！」

「ん？なんだ・・・・・もう朝か・・・・・」

「い、いつの間に入ってきたんだ!?というか服着ろ!!」

こいつは

「?夫婦とは互いに包み隠さぬものと聞いたぞ?」

「ましてやお前は私の嫁」

「おいその嫁ってのは何だ?」

「日本では気に入った相手を俺の嫁とか、自分の嫁とか言うそうだが」

「今の俺ならそんなこと言ったやつには説教してやる」

と言い指をさそうとしたら、腕を絡め取られて

「お前はもう少し寝技の訓練をすべきだな」

「寝技を磨きたいというなら私が相手になってやらんでもないぞ／／／／」

顔を赤らめるなーーー！！！！！

結局なんとかこの状況から脱出するのに１０分もかけてしまった

・・・・・

今俺は、シャルロットと臨海学校の準備をするため街に繰り出していた

「はぁ～、夢の中で死にそうになるわ、起きても疲れるわでもうつらい。」

「あのさ、どうして僕だけ誘ってくれたの？／／／／／」

「一夏は篠ノ之と買い物の行くって言ってたから本当は一人で行くはずだったが、前にお前女子用の水着持っていないって言ってたからさ。だからよかったら一緒に行こうかと思って。迷惑じゃなかったか？」

「べ、別に迷惑だなんて全然思ってないよ／／／／」

「・・・・・・・逆にちょうどよかったよ」

「ん？なんか言ったか」

「えっ！？べ、別に気にしないで！！」

「まぁいいけどさ」

目的の駅に着き、降りるとシャルロットが

「あ、あのさ手繋いでもいいかな？／／／／」

「？まぁそのくらいならいいが」

そして手を繋ぎ

「んじゃ行くぞ」

「う、うん／／／／」

しかし映司は知らなかった

映司達の後ろでずっと隠れながら二人を見ている人物―セシリア―と一鈴一がいることを

「ねぇ・・・・・・・」

「なんですの・・・・・・」

「あれって手握ってない?・・・・・・・・・」

「握ってますわね・・・・・・・・・」

「そっか、見間違いでもなく、白昼夢でもなく、やっぱりそっか。――よし殺そう」

「ほう、楽しそうだな。」

「ラウラさん!!」

「そう警戒するな。今のところお前たちに危害を加えるつもりはない。」

「信じられるものですか！！」

「・・・・そうか」

と言い立ち去ろうとした

「ちょっ、待ちなさいよ」

「どうするつもりですの？」

「決まっているだろう。あの二人に混ざるそれだけだ」

「未知数の敵と戦うにはまず情報収集が先決でしょう！！」

「そうですわ。ここは追跡の後ふたりの関係がどのような状態にあるのかを見極めるべきですわ！！」

「うんうん」

「なるほど一理あるな」

こうしてまた一人増えてしまった

・・・・・

「ねえ映司お願いがあるんだけどさぁ」

「なんだ？言ってみい」

「ほらもう僕って女子ってバレちゃたじゃん。だからせめて二人だけの時には”シャル”って呼んでもらいたいんだけど。いいかな？」

「ああ、だけどそんなのでいいのか？」

「うん！！」
（やったーー！！これって少しは特別な存在だよね／／）
・・・・
一度自分の買うために別れることになり、一応気に入ったのがあったのでそれを買った
（イメージとしてはまよチキ！の坂町　近次郎が着ていたのだと思ってください）
そして買い終わった後、電話がありシャルのもとに向かうとまだ買っていないみたいだ
「どうしたんだ？」
「えっとね、ちょっとね、映司に選ぶの手伝って欲しいなぁ～と思

って」

「俺が？まぁいいが・・・・・・・・」

そして店の中に入ったが完全にアウェイじゃないか

シャルは水着選びでどっかにいったし、困った・・・・・・・・

刺激しないようにやんわりと断ろう

「はぁ！男が女に逆らうって言うの！ふざけんじゃないわよ」

女尊男卑はこんな人にまで影響を与えるとは

チッ！！

顔は全然良くない、性格は最悪・・・

とりあえず一通りを説明すると

「あっちに行こう映司。少し迷っているんだ。だから決めるの手伝ってくれない？」

「りょ～か～い」

この場を去ろうとしたら

「あんた達自分の立場がわかってないみたいね」

お前は三下の悪役か

「そっちから喋けてきたのでしょ？僕の連れが何したと言うんですか？」

どうやらシャルも頭にきたみたいで若干好戦的な態度になっている

このままじゃ埒があかない

しょうがないこっちが折れるか

「はぁ～、わかりました。今回はこっちが片づけておきます。なので貴方はさっさと立ち去ってください。不愉快です。」

「なんですっｔ「ちなみにこれはあまり言いたくなかったけど、俺らはＩＳ学園の生徒なんですよ。どっちが不利かよく考えてから今後は言動したほうがいいですよ」チッ！！」

そう言い、どっかに立ち去ってしまった

疲れた～

「映司ありがとね。あのまま続いていたらどうなっていたかわかんなかったよ・・・・・・」

「んなもん気にすんなよ。」

「うん！！」

あんな奴のことは早く忘れるに限る。

二十二話（後書き）

よく二次小説ではアニメでは出てこなかった偉そうな女が出てるので今回自分なりに挑戦してみました

二十三話（前書き）

中々進まない

二十三話

あの後、シャルの水着を選ぶのを手伝いどうやら買うのを決まったらしい

とりあえず俺は外で待とうとしたら

「映司ちょっと来て！」

急にシャルが俺の手を引き、更衣室に連れ込んだ

「いきなり何すんだよ」

最も疑問をシャルにぶつけると

「いや、その・・・・・選んだ水着が似合ってるか見てもらいたくて」

（今外に出たらあの三人組みにバレちゃうし）

そう更衣室の外にはさっき尾行していたセシリア、鈴＋ラウラがい

るのである

せっかく二人っきりの時間なのにバレたら絶対に邪魔されてしまう。
なので強引にだが無理やり隠れるため、更衣室に入ったのである

「だからって更衣室に入れる必要ないだろうが」

外に出ようとしたら

「ま、待って!!すぐに終わらせるから」
（うぅ・・・・勢いでこんなことしちゃったけど、どうしよう）

すると急に着替え始めた

おいおいシャレになんないぞ!
こんなのバレたら相当やばいだろ

けど

さ、さすがに今出たところを見られたら勘違いされそうだし

だがここにいるわけにもいかないし・・・

「え～と、別に変なとこなんてないぞ。むしろ似合ってるぞ／／」

早くこの空間から抜け出したい・・・・・・・・

「じゃあ、これにするね」

ふ～なんとか無事にすんd「お客様？」

外から店員の声が聞こえてきた

ま、まずい・・・・・・・・・・・・・・・

そして

「ん？今の声・・・・・・・もしや」

そして

織斑先生がカーテンをめくった

「か、神谷君デュノアさん!?」

「何をしている.・・・・」

バレた.・・・・・（´Д`）

今俺とシャルは正座しながら山田先生に説教されている

せめて店の中はやめてもらいたかったです

「いいですか、いくらクラスメイトと言ってもけじめはつけなければいけません!!」

「試着室に男女二人で入るなんて駄目です!!!」

織斑先生はただ溜息をついているだけだった

・・・・・・

少し遡り

ラウラは水着の種類の量に驚いていた

「これが全て水着か」

「この世にはこんなに様々な水着があったとは・・・・・」

とりあえずは学園指定のものがあるから別にいいかと考えていた

しかし

「しっかり気合入れて選ばなきゃねー」

ふと客の会話が聞こえてきて耳を傾けると

「似合わない水着を着ていったら彼氏に嫌われちゃうもん」

「他のこと全部百点でも水着がカッコ悪かったら致命的だもんね～」

ズキュン！！！

あまりの事実にショックを受けてしまったラウラであった

・・・・・

時はまた映司達が説教されている時に戻り

適切なアドバイスをしてもらうべく、ラウラはある人物に電話をかけていた

「クラリッサ私だ。緊急事態発生」

そう電話をかけた相手とはドイツのＩＳ配備特殊部隊「シュヴァルツェ・ハーゼ」副隊長のクラリッサ・ハルフォーフである

よく色々な（誤った）知識を教えてもらっているため、今回も相談を持ち掛けたのだ

『ラウラ・ボーデヴィッヒ隊長。何か問題が起きたのですか？』

「う、うむ．．．．．例の神谷映司のことなのだが」

『あ～、世界で二番目のＩＳが使える男で隊長が好意をよせている彼ですか』

「そうだ、お前が教えてくれたところの所謂私の嫁だ！！」

なぜか嫁を強調したのだがみなさんは気にしないでね

「実は今度臨海学校というものに行くことになったのだが、どのような水着を選べばよいのか選択基準がわからん」

「そちらの指示を仰ぎたい」

『了解しました。この黒ウサギ部隊は常に隊長と共にあります』

『ちなみに現在隊長が所有しておられる装備は？』

「学校指定の水着が一着のみだ」

『グッ！！何を馬鹿なことを！！！』

『確かＩＳ学園は旧型スクール水着でしたね。それも悪くはないでしょう』

『だが・・・・しかしそれでは・・・・』

「それでは・・・・・・・？」

『色物の域をでない！！！！！』

「ならば・・・・・どうする？」

『私に秘策があります』

そう言い目を光らせた

二十四話（前書き）

仮面ライダーオーズ　コネクトという動画をひたすらリピートしていたら時間が……

また短いですがどうぞ

二十四話

ー臨海学校当日ー

「今十一時です。夕方までは自由行動、夕食には遅れないように旅館に戻ること。いいですね？」

山田先生がそう言い

「「「「「「はぁーーーーい」」」」」」

そして一斉に皆行動を始めた

というか俺らは目のやり場にものすごい困っているのに、さっきから女子達の視線が半端ないんだが

「ねぇねぇオリムー、イッチ～一緒に遊ぼ」

「おういいぜ」

ふと布仏達が話しかけてきた

だが一夏は別のグループの女子に連れ去られてしまった

すると

「おー高い高い。遠くまでよく見えるわ～。」

いきなり鈴が背中に飛びついてきた
ちなみに鈴の水着はタンキニタイプの水着らしい
よくわからないが・・・・・・・・・・・・
まぁ鈴の活発なイメージにはよく似合っている

「いきなり飛びついてくんな。猫かお前は！！」

「あ～楽しそう。私もやりた～い。」

「その次あたし。」

「アトラクションじゃねーよ！！！」

「な、なにをしていらっしゃいますの！」

そう言いセシリアがやって来た
セシリアの水着はブルーのビキニを着て、腰に薄い青色のパレオを巻いたものでセシリアによく似合っていた
というかなんで俺さっきから水着の説明してんだ??

「見ればわかるでしょ。移動監視塔ごっこ」

「うわっ／／／」

さらに抱きついてきた

「映司さん、バスの中での約束を忘れましたの！！！！」

セシリアがざくっ！とパラソルを砂浜に刺す

こ、こわい　（（（（（；゜Д゜））））））

そしてセシリアが一通りの準備をして

「さぁ映司さん、お願いしますわ」

「あんたこそ映司に何させるつもりよ！！！」

「見てのとおり、サンオイルを塗っていただきますわ」

「レディーとの約束を違えるなど、紳士のすることではありませんわよ」

はぁ～、こんなことなら素直に断っておけばよかった・・・・・・・・

だが仕方ない

「わかったよ。」

手にサンオイルをたらし、セシリアの背中に塗っていく。

「ひゃん!?え、映司さん、サンオイルは少し手で温めてから塗ってくださいな」

知らね～よ、前世でもこんな経験したことないのに

「悪い。こういうことすんの初めてなんでな。」

「は、初めてなら仕方ないですわね。／／／」

「あんたなんで嬉しそうなのよ?」

しっかしセシリアの肌すべすべしてんな～
それに綺麗だし.....ってこんな考えすぐさま消えろ!!

とりあえず一通り終わり

「なぁ背中だけでいいんだよな?」

「い、いえ、せっかくですし、手の届かないところは全部お願いします。」

「全部！！！」

「脚と、その、お尻も／／／／」

「なっ！？「はいはい、あたしがやったげる。」」

「きゃあっ！？り、鈴さん、いい加減に！！！」

怒って体を起こすセシリア

しかし水着をつけてない状態なので

「きゃあああっ！？」

「なんでーーーー！！」

ＩＳを起動し、殴られた

・

・・・・

「はぁ～、こうして波に揺られながら空を見上げるのもなかなかいいｍ「映司ー、向こう岸まで競争ね～」なぜこうゆっくり出来ない」

「負けたらかき氷奢りなさいよ」

「お、おい待てよ」

だがそう言ってる間にも差は広がっていく

鈴Ｓｉｄｅー

セシリアには悪いことしたけど、今回は譲ってもらうわよ

セシリアやラウラに負けてられないんだから！

だが急に足をつってしまった

「あ、足がつって・・・」

必死にもがいたがそれでも駄目で溺れてしまった

だが異変に気づいた映司が鈴を助けた

あ、映司！映司の腕だ・・・・・

映司Ｓｉｄｅ－

とりあえず砂浜まで運び

「おい鈴！！大丈夫か？」

「だ、大丈夫」

「災難でしたわね鈴さん」

「えっ！？」

「私が旅館までお送りしてさしあげますわ」

「いや待って！！私は映司と「鷹月さんちょっと手伝ってくれませんこと？」」

「わかった手伝うわ！！」

「ちょっと映司助けて。映司ーーーー！！！」

そして二人は鈴の腕を掴み、運んでいったしまった

まぁ、あの様子なら大丈夫だろ

二十四話（後書き）

活動報告にちょっとした質問があるのでよければそちらを回答していただければありがたいです

二十五話（前書き）

質問に答えてくださってありがとうございます

二十五話

「あ、映司。ここにいたんだ」

鈴達と別れた後、後ろから声をかけられたので振り向くと

「・・・・・・・・・・おい、なんでここにミイラがいんだよ」

あれは多分バスタオルだろう。それで全身を覆い隠したやつがシャルの隣にいた

「ほら、映司に見せたら。大丈夫だよ」

「だ、だ、大丈夫かどうかは私が決める・・・・・・・・・」

「その声・・・・・・ラウラか。はぁ～、何やってんだよ？」

「ほーら、せっかく水着に着替えたんだから、映司に見てもらわないと」

「ま、待て。私にも心の準備というものがあって・・・・・・・」

「ふぅ～ん。だったら僕だけ映司と海で遊んじゃうけどいいのかなぁ～♪」

「そ、それは駄目だ・・・・・・。え、ええい」

バスタオルが宙を舞いラウラの水着が露となった

ラウラの格好は黒のビキニ、それもシースをふんだんにあしらった物を着て、長い銀髪をツインテール？をアップにした髪型にしていた。

普段のラウラからでは想像しなかった格好＋顔を赤らめ恥ずかしがっている姿にはかなり可愛いと思ってしまった

「わ、笑いたければ笑えばいい・・・・・・・／／／／」

「おかしなところなんてないよね映司？」

「ああ、可愛いと思うぞ。だから少しは自信を持てって」

「なぁ!?そ、そうか私が可愛いのか。そのようなことを言われたのは初めてだ／／／／」

これは本当に可愛いな。小動物みたいな感じでもうやばいな

「神谷くーん!」

「さっきの約束!ビーチバレーしようよ!」

「わー、イッチ～と対戦～。ばきゅんばきゅーん」

あ～そう言えばさっき誘われたな

「それっ。」

俺にビーチボールを投げてきたので、それを受け取り人差し指でボール回しをしながら

「ちょうど人数もあってるし、やりますか」

ちなみにこっちのチームは俺、シャル、ラウラとなっている

てかいつの間にかギャリーがかなり増えている

「ふっふっふっ。七月のサマーデビルと言われたこの私の実力を．．．．．見よ！」

知らねーーーよ！！！！

「任せて！」

シャルがレシーブして

俺がスパイクで決めようとしたが、布仏がたまたまボールを弾き、

「アタック！！！」

それを少女Ａ　（名前がわからないので仮名ということで）がスパ

イクを放った

それが運悪くぼーっと立っていたらしいラウラの顔にぶつかってしまった

「大丈夫か？」

「ラウラどうしたの？」

俺とシャルはラウラに近づくと

「か、かわ、可愛いと．．．．．言われると、私は．．．．．．．．．うぅっ／／／／」

「ひょっとしてまだ照れてたの？」

「はぁ～大丈夫か？」

ラウラの顔を覗き込むと

「っ！？／／／／」

顔を真っ赤にし、海に向かって走っていってしまった

「あいつどうしたんだ？これ追いかけたほうがいいのだろうか？」

「ほっといてあげたほうがいいよ」

そっとしておくか・・・・・・・・・

「ビーチバレーですか、楽しそうですね」

山田先生が来た
山田先生の水着は黄色のビキニである

ただね・・・・・うん、これ以上言うとシャルに成敗されそうだから黙っておこう

「先生も一緒にどうですか？」

「ええ、いかがですか織斑先生？」

そしてその瞬間周りは、ざわついた

そりゃそうだ織斑先生の水着は黒のビキニでスタイルの良さ、自分に合った着こなし
もうモデルとしてもやっていけるぐらいのレベルの高さだった

「織斑先生モデルみたい」

「かっこいい～」

どうやら他の女子も俺と同意見だったみたいだ

「先生私とどうぞ。私交代しますから」

「では」

「はいやりましょう！！」

こうして相手側に織斑先生が、こっちには山田先生が入った

「ねぇ映司。映司って織斑先生みたいなのがタイプなの？」

「まぁ本音を言えばああいう人がいいが、俺じゃあ不釣合だし」

「何より織斑先生が俺なんかを相手にするわけないだろ。」

「はぁ、ライバル多いなぁ・・・・・・そこに織斑先生まで入ってくるなんて」

シャルは何故か溜息をついていた

「なんかよくわからないが頑張って。」

「はぁ～～～～」

さらに溜息つかれちゃったよ

二十六話（前書き）

眠い

二十六話

あっという間に時間は過ぎ、今俺たちは大宴会場で夕食を取っていた

ちなみに座席は端から一夏、シャル、俺、セシリアとなっている

ラウラはテーブル席で、篠ノ之は俺らの反対側にいる

「うん、うまい。さすが本わさ。」

「本わさ?」

すると何を考えたのか、シャルはわさびの山をそのまま食べてしまった

「っ～～～～～～～～～～～～!!」

「お、おい大丈夫かよ?」

「ら、らいひょうぶ・・・・・。ふ、風味があって・・・・・お、

おいしい・・・・ね」

こいつどんだけ優等生なんだよ・・・・・・・・・・

とりあえずシャルに俺のお茶を渡した

「っ・・・・ぅ・・・・・・」

何かと思い見てみればセシリアがもじもじしていた。しかも全然箸に手をつけてないようだ

「どうした？正座がきついのならテーブル席に行ったほうがいいぞ」

「へ、平気ですわ・・・・・・この席を獲得するのにかかった労力に比べれば、このくらい・・・・・・」

後半から聞き取れなかったのだが

「？？？？」

「映司、女の子には色々あるんだよ」

「はぁ・・・・・大変なんだね。」

「う、ぐ・・・・・・、んっ・・・・・・」

「はぁ～、セシリアどうしてもテーブル席は嫌なのか？」

コクン
無言で頷いた

「わかったよ。俺が食べさせてやるよ、それでいいな？」

さすがに見ていられない

「それは本当ですの！？そ、その食べさせてくれるというのは！」

物凄い顔を輝かせながら近づいてきた

「さすがにどれも手をつけずにいるのは旅館の人の迷惑になるしな。」

「んじゃまずは刺身でいいか？」

「はい！！あっ、わさびは少量で・・・・・・」

はいはいと

「ほら」

「は、はい。あー・・・・」

しかし中々物事はうまく運ばないもので

「あああーっ！セシリアずるい！」

セシリアの隣のバレてしまい

「あの神谷君に食べさせてもらってる！」

「セシリアの卑怯者！」

「しかも神谷君なんて。一番のレアじゃない！！」

おい最後のはなんだ！！！！

女子達が騒いでいると

「お前たちは静かに食事することができんのか！！」

ほら来た　（　・´ー・、）

織斑先生の一喝により静まった

「お、織斑先生・・・・・・」

「神谷、あまり騒動を起こすな。鎮めるのが面倒だ」

「わ、わかりました・・・・・」

俺ばかりよく責められるこれいかに

って俳句を作ってる場合じゃないんだよ!!

「という訳で悪いがセシリア、ここは自分で「ムーーーーー」はぁ～」

物凄い膨れっ面で俺を睨んでくるが、それはただ単に可愛いだけだぞセシリアよ

仕方ないので小声で

「次でラストだからな」

「は、はい!!」

そしてまた刺身をセシリアに食べさせた

「・・・・・・／／／／」

セシリアは顔を赤らめている

「「「「「あーーーーーーーー!!!!!!!!!!」」」」」

ずるいやら、二度もなどと言ってるがこんなもんやったもん勝ちだ

「神谷ーーーーーーーーー!!!!!」

おかげで先生はカンカンだけどね」（・ˊ－・、）「

・・・・・・

暇だ～～～～～～

俺は今一人で部屋にいる。
ん？一夏は一緒の部屋じゃないのか？

理由は男子が抜け出して騒ぎを起こしたら大変なので、俺らにはそれぞれ監視役として先生が同室している

一夏は織斑先生、俺には山田先生

ただ山田先生は今だ戻ってこいないので、一人を満喫しているのだがものの五分で飽きてしまった

一夏のとこには織斑先生がいるし、何よりあの二人の姉弟水入らずの時間を邪魔するなんてことはしたくはないし

適当に館内をふらつくか。それぐらいならいいだろうし

・・・・・・・

ふらついている途中で女子に部屋に遊びに来ないかと誘われたり、
他のクラスの女子から話かけられたりしていたら電話がかかってきた
見ると一夏だった

「はいはい？」

『あ、映司今何してんだ？』

「適当に館内ふらついているけど何故？」

『いや今千冬姉に頼まれて飲み物を買いに行かされてるんだが量が
多くて、映司少し手伝ってくれないか？』

「ん。別に暇だからいいけど」

『悪いな』

「んで今何処に居るんだ?」

・・・・・・・

ところ変わりここは一夏・千冬の部屋で座り込んでいる
その前にはビール片手に片膝をつきながら座っている千冬がいる

「おい、いつもの馬鹿騒ぎはどうした?」

「い、いえ、その・・・・・」

「お、織斑先生とこうして話すのは、初めてですし・・・・・・」

「まぁいい。そろそろ肝心の話をするか。」

「でお前らあいつのどこがいいんだ？まぁ篠ノ之の場合は一夏だがな」

「べ、別に一夏のことなんか・・・・・・／／／」

「となると映司のことですか？」

箒のことは置いといて、質問した鈴

「ああ。まぁ確かにあいつは一夏並に家事も料理も出来るし、成績も良い、それにマッサージも上手い。付き合える女は得だな。どうだ欲しいか？」

（ちなみに千冬は休日にたまに映司を呼び出しては家事やら料理やらをやらせているのでそんなことを知っているのだが・・・・・・）

「「「「くれるんですか！！！！」」」」

「やるか馬鹿」

「「「「えーーーーー！！！！」」」」

「女ならな奪うくらいの気持ちでどうする。自分を磨けよガキども」

「というかそんなことを先生が勝手に決めていいことなのか??」

密かにそんなことを思ってしまった箒であった

「ん~?先生聞きたいことがあるんですけど」

さっきの会話に疑問を覚えたシャルルが千冬に質問した

「なんだ?」

と言いつつ、ビールを飲んでいると

「さっき家事や料理が出来ると言ってましたがなんでそんなことわかるんですか?」

「!?ゴホッゴホッ」

急に答えずらい質問をされてしまったのでむせてしまった。そして気づいてしまった。
自分自身でさりげなく墓穴を掘っていたことに

「ど、どうしてだ?」

「まだマッサージはわかりますが、なんで家事と料理の腕前がわかるんですか?今のところ授業でそのようなことはしていないので知る由もないのに、知っているということは授業以外にそういう機会があったのかと思いまして」

「そ、それはだな.....はっ!!」

そして気づくと千冬に詰め寄る四人組

「先生そのこともとても気になりますが、今はそれとは別に」

「とっても気になることがあるんですよ」

「先生教えてください」

「教官正直に教えてください」

「「「「織斑先生は映司のことをどう思っているんですか？」」」」

そう恋する乙女にとってこれ以上のライバルは増やしたくない

だがそこに千冬が入ってしまうと・・・・・・・・・・・・とてもじゃないが太刀打ち出来ない

「そ、それは・・・・・・・・・」

あと一歩というところで、タイミングがいいのか悪いのか

「ただいま～」

「お邪魔しま～す、ってなにしてんの？」

一夏と映司が帰ってきてしまった

「あ、ああ気にするな・・・・」

「「「「チッ！！！！」」」」

なんか四人が舌打ちしたが俺のせいじゃないよね？

二十六話（後書き）

一夏とカイトの声優が一緒ということに今さら気づき

今さら驚いてしまった

二十七話（前書き）

イナズマ行きたかったけど授業が……

二十七話

ー翌朝ー

「ふわぁ～、箒？」

一夏はあくびをしながら、別館へ向かう途中で箒と会った。

箒の視線をたどると

道端にウサギの耳が生えている。しかも『ひっぱってください』と書かれた木製の板も一緒で

「なあ、これってもしかして・・・・」

「知らん。私に聞くな。」

それだけ言い去っていった

「おい！ほっておいていいのか？」

「何してらっしゃいますの？」

「いや、ちょっとな・・・・・」

「えい！！！」

一夏はそのウサ耳を思いっきり引っ張る

『キィィィィン……』

何かが落ちてくるのがわかった。そして

『ドカーーーーン！』

何かが地面に激突したようだ。

煙が晴れると、そこには人参が地面に突き刺さっていた。

「あっはっは！引っかかったね、いっくん。ぶいぶい」

人参が真っ二つに割れて、中から人が出てきた。腰まである長い髪、ウサギ耳のカチューシャをつけ、青と白のワンピースを着た女性が

「お、お久しぶりです、束さん」

「うんうん。おひさだね。本当に久しいねー。ところでいっくん。箒ちゃんはどこかな？」

「えーと．．．．．．」

どう答えればいいか迷っていると

「まっ、この私が開発した箒ちゃん探知機ですぐ見つかるけど。じゃあいっくん。また後でね」

そして探知機片手にどこかへ去っていった

「い、一夏さん？今の方は一体・・・・・・・・・」

「篠ノ之束さん。箒の姉さんだ」

「えええええっ！？」

・・・・・・・

映司Ｓｉｄｅ－

「よし専用機持ちは全員揃ったな」

俺ら専用機持ちは滝の前の岩場に集まった。しかし・・・・・

「ちょっと待ってください。箒は専用機をもってないでしょ」

そう何故か篠ノ之までいたのである

「そ、それは・・・・・・」

「私から説明しよう。実はだな「やっほ～～～～～～～！！！」・・・・・・」

「ちーちゃ～～～～～～～～～～～ん！！！！」

急に織斑先生の説明を遮り、誰かが物凄い勢いでこっちに向かってきている
織斑先生と篠ノ之は物凄い嫌そうな顔をしている

てかこの声どこかで聞いた覚えが・・・・・・・・・・・はっ！！！
とっさに思い出した俺は気づかれないようにセシリアの後ろに隠れた

「やあやあ！あいたかったよ、ちーちゃん！さあ、ハグハグしよう！愛を確かめ「うるさいぞ、束」」

「ぐぬぬぬ・・・・・相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

織斑先生に謎の女性が飛びかかってきたがそれをアイアンクローで止めた
だがすぐに脱出し、隠れていた篠ノ之のとこに向かい

「じゃじゃーーん!!やあ!」

「・・・・・・どうも」

「ひっひひ~、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなぁ。おっきくなったね、箒ちゃん。特におっぱいが」

がんっ!!

木刀で一突き

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったぁ。箒ちゃんひど~い!!ねぇ、いっくんひどいよね~~?」

「おい束、自己紹介くらいしろ」

「えー、めんどくさいなぁ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」

やっぱり（´・ω・）

「束って・・・・・」

「ＩＳの開発者にして、天才科学者の・・・・」

「篠ノ之束・・・・」

突然のご本人登場にみんな驚いているが俺には関係ない！！
早くこの場から立ち去ってくれ～～～

「あれっ～～～おかしいな。いないな～」

キョロキョロ

「どうしたんだ束？」

「ちーちゃん！ちーちゃん！えー君どこ行ったか知らない？」

はっ！？　Σ（゜д゜lll）

映司の希望も虚しく終わってしまった

「？誰だそいつは？」

「えー君はえー君だよ～」

「もしかして神谷のことか？神谷なら．．．．．．．．．何を隠れているんだ？」

見つかったーーー　（（（（；゜д゜））））

「（キラーン！）えー君見～けっ！」

すると束は一目散に俺のとこに向かってき、抱きついてきた

「えー君ひどいよ～。せっかく愛に来たのに隠れるなんて、束さんは泣いちゃうよ～～～～」

「は、離れてください／／／あ、あと会いという字が愛になって違っていますよ／／」

「束さん的にはそっち目的で来ちゃいました～♪」

「いやーーーー！！！！」

「「「「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」」」」」

まさかの出来事にみんな唖然としてしまった

いち早く元に戻った織斑先生が

「お、おい神谷、束これは一体どういうことなんだ？・・・・・・・・・・」

「ふふふ～、えー君♪」

「はぁ～、俺から説明します。」

……

修練の門での修行が終わりこっちの世界に戻って来んだが

「ここどこ？」

そう見知らぬ場所に置いてかれてしまった

「はぁ～どうしたもんか・・・・・・・・・」

どうやって戻ろうか悩んでいると

『ドカァァァァァァァンッ！！』

爆発音がしたのでそこに向かっていった

？？？？？Ｓｉｄｅ－

「うーーん、さすがに束さんもこの状況はお手上げだね～」

にんじんは結構のダメージを受け、目の前には量産型ＩＳのラファール・リヴァイヴが十数機、そして極めつけに専用機持ちが一人

そう篠ノ之束はとある企業のＩＳ部隊に追い詰められていた

たとえＩＳの開発者でもこれだけの数の暴力にはどうにも出来ない

「Ｄｒ．篠ノ之、素直に私たちに従ってください。そうすればあなたの身の安全は保証しましょう」

「うーーーん、束さんは誰かの命令で動きたくないからその申し出は断るよ～～」

「そうですか・・・・・では強行策に移るまでです」

「・・・・・・・・・・・・・・・」

さっきの笑みが嘘のようで、表情がとても冷たいものとなった

束はこの状況を打破する考えを探したがいっこうにまともなものが出ず、諦めかけていた

（箒ちゃん、ちーちゃん、いっくんごめんね・・・・・・・・・・）

だが

「なぁ」

映司Ｓｉｄｅ－

とりあえず見えてきたのは一人の女性がＩＳを装備している人たちに追い詰められているものだった

「はぁ～、さすがに黙ってる訳にはいかないよな・・・・・・」

そして近づき

「なぁ」

と声をかけた

「「「「「！！！！！！！！！！！！！」」」」」

急に声をかけたので全員驚いたが、ＩＳ部隊の中でも専用機持ちが

「なぜこんなとこに男がいるか疑問が残りますが、この際気にしないでおきましょう」

「即刻この場から去ってください。これは警告です。もし無視するようなら・・・・・・・・」

消すってか・・・・・・上等！！！

修行の成果でも確認しますか

「はぁ～だるいからさっさと終わらせてやるよ」

ドライバーを出しクワガタ、トラ、バッタのメダルをいれ

「一体何を・・・・・・・・」

専用機持ちが問いかけてきたので

「まぁ、見てなって。変身！」

【クワガタ！トラ！バッタ！】

「なぁっ！？」

「！？」

男がＩＳを使っているので当然襲われていた女性、ＩＳ組も驚いているのでスキだらけである

だがこちとら、そんなスキをつかないほど馬鹿じゃないんだよね～

「はあああああ！」

ガタトラバになり、トラクローで量産型ＩＳを引き裂いたり、バッタレッグで蹴ったりなどの攻撃をし数を減らそうとした

しかし数が多過ぎるので相手もアサルトカノンで反撃してきた

「チッ！！だったら」

「はああっ！！」

「「「「キャーーー！！！！！」」」」

クワガタヘッドから広範囲に雷撃を放ち、その攻撃をくらった過半数の量産型ＩＳのシールドエネルギーをほぼ０にした

そして残りの量産型はトラクローにクワガタヘッドの電撃を纏わせ、それで次々に切り裂いていった

「つ、強い・・・・・・」

専用機持ちがそう言ってるが俺もここまでとは思ってなかった
しかも嬉しいことにクワガタヘッドの電撃を放っても全然感電しな
かったのである

「残りはあんただけだが」

「チッ!!お前らは下がっていろ」

多分部下である、彼女らを下がらせた

てかあの専用機どっかで見たことがあると思ったらアルブレード・
カスタムにそっくりじゃないか!!!

G・レールガンは見当たらないものの、ブレード・トンファーや両
肩にはウイングがあるし、なによりカラーリングが水色とほぼ一緒
なのだ

ただ何故この世界にあるんだ?後で機会でもあったときに神様にで
も聞いてみますか

とりあえず今はこいつとの戦いに集中しなければ

二十七話（後書き）

アルブレード・カスタムをチョイスした理由は次回にとって置きます

ちなみにアルブレード・カスタムを知らない人に補足というか説明すると第3次スーパーロボット大戦αで出てくる機体でリュウセイ・ダテというパイロットが一時期乗っていた

ただ作者はＲ－ＧＵＮパワードを主に使っていたのでアルブレードはそこまでじゃない

二十八話（前書き）

映司達がいる場所は夏ミカンが夢で見たディケイドＶＳ他の全ライダーが戦ったところです

最近ならアンキロサウルスヤミーにオーズとバースが戦った場所です

二十八話

専用機持ちはブレード・トンファーを構えた。こっちもトラクローを構え

「「はあああああ！！」」

ガキンッ！

そして衝突する両者、そこから攻防が始まった

だが若干手数は相手側が多く、ついに

「ぐっ！！！」

一撃もらってしまった。ひとまず距離をとり

「チッ！このフォームじゃあ相性が悪いか・・・・・・なら！」

接近戦でさらにあの手数の多い攻撃にもってこいなメダルの組み合

わせを瞬時に考え、クワガタをタカにしバッタをコンドルに変え

【タカ！トラ！コンドル！】

タカトラドルになり、また接近した

「な！？変わった．．．．」

「．．．．．．．．．．．．．．」

専用機持ちは頭部と脚部が変わったことにまた驚き、襲われそうになっていた女性は何故だかはわからないが、まるで俺を観察しているような感じで俺をジロジロ見ていた

まぁ今はどうでもいい

専用機持ちに近づき両腕のトラクローで切りかかったがもちろん止められて鍔迫り合いの状態となった

「くっ！！だがそれではさっきの二の舞になるだけだ！！」

「それはどうかな?」

「なに!?」

ブレード・トンファーを弾き、コンドルレッグに付加されている強靭な爪・ストライカーネイルとラプタードエッジを使い回し蹴りをして専用機持ちにダメージを与えた

この際、蹴撃に合わせた真空刃を発生させ、ダメージをさらに上げている

「くっ!さっきはこんなものなかったはずなのに!!」

今度はあっちから突っ込んできたが左手のトラクローで受け止め、右手の手の甲で腹部を殴りよろけので、真空刃付きの回し蹴りをくらわした

「こ、こんな一方的なんて・・・・・・・・・」

そしてトドメに真空刃付きの後ろ回し蹴り　(これのイメージはキ

バ27話に出てきたクラブファンガイアにキバがくらわしたエンペラームーンブレイクだと思ってください）をブレード・トンファーでガードしている上から叩き込み、奴の武器を破壊した

「そ、そんな・・・・・」

唯一の武器を壊したのでもう戦う術はないはず

「んでまだやるのか？別にこっちは構わないがどうする？」

「チッ！！ここは撤退するぞ！！！」

「「「「「はい！！」」」」」

そう言い全員去っていった

とりあえず居なくなったの確認してから変身を解除した

さてどうしようか・・・・・

とりあえず襲われそうになっていた人物に近づき

「ええと大丈夫ですか？」

「・・・・・・・・・・・・一つ聞いていいかな～？」

「は、はぁ。いいですけど」

「束さんはそんなＩＳ作ったり見た覚えがないんだけど、一体そのＩＳは誰がどう作ったの？」

目をキラキラさせながら俺にそんなこと聞いてきた

この人いったい何を・・・・・・・・・・待てよＩＳの開発者って確か篠ノ之　束だったよな

「あの～あなたの名前ってもしかして篠ノ之　束さんですか？」

「まさしく、私が天才束さんだよ～。ねえねえ、それよりそのＩＳどうしたの～？」

や、やばいバレた、どうしよう・・・・・・・・・・

下手に嘘言ってもこの人には通用しなさそうだし

「ええと、作ったのは○○社ですがそのＩＳ自体のアイデアは俺が「君が考えたの！！！」そうですが」

まあ、作ったのは神様だってこと以外はあながち嘘では無いし大丈夫だろう。

「へぇ～君が考えたんだ～。天才束さんでもこんなのは思い浮かばなかったよ～。」

「そ、そうですか。それは嬉しいかぎりですよ」

「そういえばなんで助けてくれたの？全くの見ず知らずの関係だよ？」

「さすがにあんな状態を見たらとりあえずは仲裁に入るでしょうが。それに赤の他人というだけで、助けない理由にはならないでしょ。」

とだるそうな顔だったが、一転し急に真剣な表情で言う映司

「う～ん束さんは興味ないこと以外はどうでもいいからね～。でも・・・・・・」

「でも？」

「君は束さんを驚かすほどの発想力、それにちーちゃんとはまた違った強さを持っているし」

「ふふふ～、君のこと気に入ったよー」

「よろしくね～、〝えー君〟♪」

と言い抱きついてきた

「なぁっ／／／」

・・・・・・・・・・・・・・

もちろん一部は上手く誤魔化したとこもあるが、とりあえず一通りの出来事をみんなに説明した

「ふふふ～、懐かしいね～。全くあの時のえー君たら『たとえ世界を敵にまわしてもお前だけは守る！！』なんて言うんだも～ん／／／／」

「言ってねーーーよ！！！！」

「えー君ったら恥ずかしがちゃって／／／」

いやんいやんとか言いながら顔を赤らめるな！！！！

ポンッ

ふと肩に手を置かれたので振り向くと、疲れた顔をした織斑先生がいた

「お前もあいつに苦労してるのだな．．．．．．．」

「はい．．．．．．．．」

「「はぁ～」」

二人同時に溜息が出てしまった

「神谷」

さらに呼ばれたのでそっちを見ると篠ノ之　（妹）がいて

「その、なんだ。あんな人物だが少なからず私の姉だ。だから助けてくれてありがとう」

「ああ、どういたしまして」

「「「「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」」」」

セシリア達がもの凄く睨んでいる気がするが気のせいであってくれ！！！

・　・　・　・　・　・

「ふっふっふっ、大空をご覧あれ」

あの後、なんとか織斑先生が本題に戻してくれた

ちなみにだが見ず知らずの場所からは、束さんがすぐ直してくれたにんじんに乗せてもらい脱出した。

だが移動中はずっと抱きついていたがね・・・

「第四世代！？」

「やっと第三世代型の試験機が出来た段階ですわよ！」

「なのにもう・・・・・」

もちろん皆驚いている

「そこがほれ～、天才束さんだから」

「さあ箒ちゃん、今からフィッティングとパーソナライズを始めようか」

「さっ、篠ノ之」

「箒ちゃんのデータは先行していれてあるから後は最新データに更新するだけだね～」

束さんの作業を見て

「すごい、信じられないスピードだ」

鈴が驚いているが、多分他のみんなも同じことを考えているのだろう

「はいフィッティング終了。ちょ～早いね、さすが私～。えー君褒めて褒めて～」

「はいはい」

「えへへ～、そんじゃあ試運転も予て飛んでみてよ。箒ちゃんのイメージ通り動くはずだよ」

「はい！それではやってみます」

集中し、そして上昇したが

「何あれ！早い！！」

「これが第四世代の加速ということ！」

「どうどう箒ちゃんが思った以上に動くでしょ～」

『ええ、まぁ』

しばらく飛んだあと、束さんがミサイルを出し撃ったが全弾、刀の衝撃波で破壊した

「やるな」

「すげぇ」

「ふふふ～、すごいでしょ～」

『やれる、この紅椿なら！！』

だがその様子を何故だかわからないが俺はあまり良いと言えなかった

どうやら織斑先生も同じような考えみたいだ

二十八話（後書き）

アルブレードカスタムを理由は簡単で実は前々からタカトラドルは出したかったのですがあれに合う相手がいませんでした

しかしふと第3次スーパーロボット大戦αをやっているときにアルブレードを見つけて戦い方、武器の種類を考えたときにジャストミートしたのでアルブレードカスタムにしました

あと作者が勝手にアルブレードカスタムの武装をブレード・トンファーだけにしてしまいすいませんでした

話の都合上こうするしかなかったのでどうかご勘弁を

二十九話（前書き）

待たせてしまいすいませんでした

活動報告でもいいましたがナターシャは出すことにしました

無人ＩＳに賛成した方々本当にすいませんでした

では始まります

二十九話

「大変です！織斑先生っ！」

山田先生が慌てて織斑先生のとこに向かい、

「どうした？」

「こっ、これをっ！」

携帯端末を渡し

「特命任務レベルA、現時刻より対策をはじめられたし・・・・・・」

「テスト稼働は中止だ！！お前たちにやってもらいたいことがある」

「はぁ・・・・・はぁ・・・・・こちらの方は？」

息を切らしながら聞き

「篠ノ之　束だ」

「えーーーーー！！！！！」

驚いていたが、まぁ普通にそうなるか

・・・・・・・・・

俺達専用機持ちは旅館の宴会用の広間に集められた。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用ＩＳ『銀の福音』が制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった」

「衛星の追跡の結果、福音はここから2キロ先の空域を通過することがわかった。時間にして五十分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった」

「教員は学園の訓練機を使用して空域および海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は専用機持ちに担当してもらう。」

「は、はい！！」

「つまり暴走したＩＳを我々が止めるということだ」

「ま、マジ！！」

「いちいち驚かないの」

「それでは作戦会議を始める！！意見のある者は挙手するように」

「はい」

セシリアが手を挙げた。

「目標ＩＳの詳細データを要求します」

「うむ。だが決して口外するな。情報が漏洩した場合、査問会にかけられ、最低2年間の監視がつけられる」

「了解しました」

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型、私のＩＳと同じオールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だわ」

「この特殊武装が曲者って感じがするね。連続しての防御は難しい気がするよ」

「このデータでは格闘性能が未知数だ。偵察は行えないのですか？」

「それは無理だ。この機体は現在も超音速飛行を続けている。アプローチは1回が限界だろう。」

「一回限りのチャンス・・・・・ということは一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかないですね」

「うんうん・・・・・・・ってえ!?」

「あんたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ問題は・・・・・・・・」

「どうやって一夏をそこまで運ぶかだね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動はどうするか・・・・・・・」

「目標に追い付ける速度が出せるＩＳでなければ、超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「ちょっと待ってくれ、俺が行くのか?」

「「「「「当然!!!」」」」」

「ユニゾンで言うな!!」

「第一こういうことなら映司のほうが適任だろ!!」

「ほら！！あの重力を扱うやつでなら「無理に決まってるだろ」え！？」

「確かにサゴーゾの重力操作でならあいつの動きも封じることは出来るし、破壊力もある」

「な、なら「お前さ、サゴーゾを含めた俺のＩＳには基本飛行能力が無いということを忘れてないか」うっ・・・・・・」

「それにあいつが沿岸部にひたすら居てくれるならまだしも、海のど真ん中にいんだろ」

「さすがに有効範囲外だ」

「だから今回はお前が適任なんだよ」

「で、でも・・・・・・」

「織斑これは訓練では無い、実戦だ！！」

「！！！！！」

「もし覚悟がないなら無理強いはしない。神谷に全てを任せる」

「はい！？」

何故俺だけ　ｏｒｚ・・・・・・などと落ち込んでいると

「やります。やってみせます」

ふぅ～　（；´∀｀）

「よし！それでは専用機持ちの中で最高速度が出せる機ｔ「ちょっと待った～！その作戦はちょっと待っただよ～」」

「とぉ～～～～」

屋根裏から飛び出てきた束さん

「また出たよ」

同感だ一夏よ

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっといい作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング！」

「出て行け」

頭を抱えながらそう言う織斑先生

「聞いて聞いて～、ここはだ～んぜん紅椿の出番なんだよ～」

と自信満々に言う束さん

「何！？」

・・・・・・

ところ変わり滝の前にて

「紅椿行くぞ！！」

静かにだがそう言い、紅椿を展開した篠ノ之　（箒）

「織斑先生、篠ノ之博士がここにいることを上層部は？」

そう織斑先生に聞く山田先生

「連絡はついている。今は暴走したＩＳを止めることが最優先だ」

「それじゃー箒ちゃん、展開装甲ＯＰＥＮ～」

束さんがそう言い、篠ノ之は展開装甲をとやらを出した

「展開装甲はね第四世代型の装備で～、一言で言っちゃうと紅椿は雪片弐型が進化したものなんだよね～」

「進化・・・・・」

「なんと全身のアーマーを展開装甲にしちゃいました～。ぶいぶい」

「織斑先生、俺はもう何も感じなくなってきたのですがこれはもう末期でしょうか？」

「安心しろ神谷。私も同じだ」

「「はぁ～～～」」

溜息の回数が異様に増えているんだよね～

「しかしあれだね～、海で暴走というと十年前の白騎士事件を思い出すね～」

「ん！？・・・・・・・・・」

白騎士事件

ＩＳ発表から一カ月後に起きた事件。日本を射程範囲内とするミサイル基地のコンピューターが一斉にハッキングされ、２３４１発以上のミサイルが発射されるも、全部がＩＳ「白騎士」が迎撃した上、それを見て「白騎士」を捕獲もしくは撃破しようと各国が送り込んだ大量の戦闘機や戦艦などの軍事兵器の大半を撃破した事件。この時の死者は皆無だった。この事件以降、ＩＳの関心が高まることと

なる。

「うっふふふ～、白騎士って誰だったんだろうね～。ねっ、ねっちーちゃん」

「知らん」

「うんうん、私の予想ではバスト８８『ガンッ』きゅ～ぅ」

織斑先生に殴られているのだが何故？？？？

「ひ、ひどいよちーちゃん～、束さんの脳は左右に割れたよ～。」

「そうかよかったな。これからは左右で交互の考え事ができるぞ」

「あ～！？そっか～、さっすがちーちゃん！！あったまいい～」

そう言い織斑先生に飛びつく束さん

「話を戻すぞ！で束、紅椿の調整にはどれくらいの時間がかかる？」

引きはがしながら聞く織斑先生

「織斑先生！！」

とそこへ、割って出たセシリア

「なんだ」

「私とブルー・ティアーズなら必ず成功してみせますわ！！高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られてきていますわ」

「そのパッケージは量子変換してあるのか？」

「そ、それはまだですが・・・・・・」

「ちなみに紅椿の調整時間は七分あれば余裕だね～」

と今度は束さんが割って入ってきた

「よし。本作戦は織斑、篠ノ之の両名による目標の追跡・撃墜を目

的とする。作戦開始は三十分後、各員直ちに準備にかかれ」

・・・・・・・・・

見つめ合う一夏と箒

「なーんかいい感じじゃ～ん」

と箒を茶化す束

「そ、そんなことはない／／／／」

「そんなぶすーとした顔しないで、笑って笑って」

「この顔は生まれつきなので」

「そうだっけ～？まっ、とっとと紅椿の調整やっつけちゃおう」

「これが紅椿か・・・・・・私だけの専用機」

ぼそっとだがそう嬉しそうに呟く箒であった

・　・　・　・　・　・

ーおまけー

「今回やけに空気だったな～俺」

織斑先生とのミーティングの後、ふとそんなことを感じてしまい

「ん？どうした我が嫁よ？」

どうやら口に出してしまったようだ

「いや、なんでもないから気にすんな」

「そうか・・・・・・だが何かあったらいつでも私に言ってくれ」

「了解と、ありがとな」

「うむ。ん～ん～、あと少しで・・・・・・」

と言いながら、背伸びしながらも必死に俺の頭を撫でようとしたラウラに少し萌えてしまった／／／／／

二十九話（後書き）

遅くなってしまいすいませんでした

小説を読んでいて今後の展開を考えていた＋プライベートで少しあったのですがまぁそれは活動報告にて

ではまた

三十話（前書き）

遅れてしまいすいませんでした

とりあえずルーターが原因ということがわかったんですが未だに解決策が見当たりません

三十話

一夏と箒は、福音への移動距離が一番短いであろう地点の砂浜にいた。

そして一夏は時間を確認してから箒に合図を送ってから

「来い白式！！」

白式を展開し、箒もそれに続くように

「行くぞ紅椿！！」

箒も紅椿を展開した

「じゃあ箒よろしく頼む」

「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが」

「今回だけは特別だぞ」

と言い微笑む箒

「いいか箒、これは訓練じゃない。十分に注意をして取り組む「無論わかっているさ、ふふっ心配するな。お前はちゃーんと運んでやる。大船に乗ったつもりでいればいいさ」なんだか楽しそうだな」

「やっと専用機を持てたからか？」

「えっ！？私はいつも通りだ、一夏こそ冷静に作戦にあたることだ」

と胸を張りながらそう言い放つ箒

「わかってるよ」

とそこへ

『織斑、篠ノ之聞こえるか？』

千冬が通信してきた

「よく聞こえます」

箒が応える

『今回の作戦の要は一撃必殺だ。短時間での決着を心がけよ。撃つべきは銀の福音（シルバリオ・ゴスペル）、以降福音と呼称する』

「「了解！！」」

「織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか？」

『そうだな・・・・・・・だが無理はするな！！お前は紅椿での実戦経験は皆無だ、突然何かしらの問題が出るとも限らん』

「わかりました。ですが出来る範囲で支援します。」

「あの子ちょっと声が弾んでない？」
鈴がいつもとは違う箏の違いに違和感を感じ、俺らに聞いてきた

「ええ、そう聞こえましたわね」

「わからなくもないけど．．．．．」

「織斑にプライベート・チャネルは？」

「はい！」
山田先生が一夏にプライベート・チャネルを繋ぎ

『一夏』

「はい！」

『はぁ～、これはプライベート・チャネルだ』

『篠ノ之には聞かれない．．．．．

『あんな状態では何かを仕損じるかもしれん。いざというときはサポートしてやれ』

「わかりました意識しときます」

『頼んだぞ』

そう言いプライベート・チャネルからオープンチャンネルに切り替えた

・・・・・・・・

映司Ｓｉｄｅ－

作戦が始まり、篠ノ之が移動し始めたのだが

（これはまた速いな・・・・・・・・）

と驚いていると

「瞬時加速の比じゃないよ!!」

「驚異的な速さだ・・・・」

どうやら皆も同様に驚いていたが、篠ノ之はさらに加速しついに福音を発見した

一夏は零落白夜を発動し後ろから攻撃しようとしたがどうやら福音はそれに気付いたらしく上に急上昇して振り切ろうとした

しかしそれについて行き

『はあああぁ!!!』

一夏は切りかかったが福音はそれを躱して、距離をとってから光の弾丸を射出してきた

二人はそれを躱しつつ左右から接近し、まず篠ノ之が二本の刀を出し福音に切りかかり動きを止めた

しかし絶好のチャンスなのに一夏は違うとこに移動したのだ

（あいつ一体どうしたんだよ．．．．．．．．．）

と疑問に思ったが一夏の移動した先を見ると船があり、福音の光の弾丸が迫っていたので一夏が切り落とした

その後も一夏は船を守るため奮闘したがついにシールドエネルギーの方が二桁代になってしまってので零落白夜も消えてしまった

そんな一夏の様子に篠ノ之が文句を言っていたが突然動揺し始め、しまいには泣き崩れ手で顔を覆った

（！？馬鹿やろう！戦場でそんなことしてる場合じゃねえだろ！！）

注意しようとした矢先、福音が光の弾丸を二人に射出するという最悪の事態が起こってしまい

そして一夏は篠ノ之を庇い、落とされてしまった

・

・・・・・・・

作戦は失敗に終わり、織斑先生から俺らは現状待機という命令を受けた

今だ一夏は意識不明の状態で篠ノ之がずっとそばで見守っている

俺はひとまず部屋に戻り寝そべっている

すると枕元に懐かしい人物が

「これはまた久しぶりですね”神様”」

・・・・・・・

箒Ｓｉｄｅ－

「私は・・・・・・」

さっきまでの出来事がフラッシュバックされる
そして後悔の念にかられる

（いつも、力を手にはいるとそれに流されてしまう。挙句の果てがこれだ）

「お前に比べて私は・・・・・・・・」

「力の赴くままに暴力をふるっていただけだろうか？」

その後様子を見に来た山田先生に説得され、今は砂浜に来ている
そして小学校の時の一夏との思い出を思い出しながら海を見ていたら

「箒」

後ろから鈴に呼ばれた

「あのさ一夏がこうなったのってアンタのせいなんでしょ！！」

「で、落ち込んでるってポーズ？」

「ざけんじゃないわよ！！」

するといきなり胸ぐらを掴まれて

「やるべきことがあるでしょうが！今戦わなくてどうすんのよ！！」

（そんなことわかっている。わかっているが・・・・・・・・・）

「もうＩＳには乗らない・・・・・」

「ッ！」

バシンッ！

ビンタされ、そのまま倒れてしまった

「甘ったれてんじゃないわよ!!専用機持ちっつーのはね、そんなワガママが許されるような立場じゃないのよ。それともアンタは戦うべきに戦えない、臆病者なわけ!!」

「どうしろと言うんだ!もう敵の居所もわからない!戦えるなら、私だって戦う!」

その様子を見た鈴は笑みになり

「やっとやる気になったわね。あーあ、めんどくさかった」

と鈴は視線をあるところへ向けるので私もそっちを見るとセシリア、シャルル、ラウラがいた

「な、なに?」

「みんな気持ちは一つってこと」

「負けたままいいはずがないでしょ」

「ラウラ福音は?」

「確認済みだ」

そして表示されるディスプレイ

「ここから三十キロ離れた沖合上空に目標を確認した。ステルスモードに入っていたが、どうも光学迷彩は持っていないようだ。衛星による目視で発見したぞ」

「さすがドイツ軍特殊部隊。やるわね」

「お前の方はどうなんだ。準備はできているのか？」

「当然。甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済みよ」

「こちらも完了していますわ」

「僕も準備ＯＫだよ。いつでも行ける」

「待ってくれ、行くというのか？命令違反ではないのか？」

「だから？あんた今戦うって言ったでしょ」

「お前はどうする？」

「私・・・・・私は」

「戦う・・・・・戦って、勝つ！今度こそ、負けはしない！」

「決まりね。今度こそ確実に墜とすわ」

「ああ！！だが神谷はどうしたんだ？」

その言葉を聞いた四人は

「いつもめんどくさがっているくせに」

「なんだかんだで私達を助けてくださって」

「そして解決時には自分がヘトヘトの状態で倒れて」

「そんな困った嫁だから」

「「「「今度は私（僕）達が映司を助ける番だ（ですわ）（だよ）」」」」

「みんな・・・・・」

（そうだな、あいつにはいつも世話になっている。なら私も！！）

と新たな決意と共に四人のもとに向かった

三十話（後書き）

最後ら辺がいまいちでしたがどうでしたか？

とりあえずこの後にもう一度投稿する予定です

三十一話（前書き）

いつの間にか寝てしまっていて

急いで執筆の続き＋修整、ある程度の見直しをしていたらこんな時間に

三十一話

海上数百メートルの位置に膝を抱えながら座り込んでいる福音がいた

『キィィィン』

「？」

不意に聞こえてきた音に銀の福音が反応する

直後、超音速で飛来した砲弾が頭部を直撃、大爆発を起こした。

「初弾命中！」

しかし煙が晴れて見てみると無傷の福音がいた

「続けて砲撃を行う！！」

五キロ離れた場所に浮かんでいるＩＳ『シュヴァルツェア・レーゲン』とラウラは、福音が反撃に移るよりも早く次弾を発射した

しかしずっと砲撃を行っているものの全部回避し、さらに接近している

「くっ！予想より速い！！」

そして右手を伸ばしてきて、あと少しという距離まで来た

「はあああああぁ！」

だがセシリアがビットを福音にぶつけ、福音は落下し始めた

さらにスターライトｍｋＩＩＩで射撃したが福音は全て躱し距離をとった

「かかった！！」

今度はシャルルが表れ、ショットガン二丁による近接射撃を背中に浴び福音は姿勢を崩す

さらにシャルロットは得意の『高速切替』によってアサルトカノンを呼び出したが、福音が光の弾丸を射出してきた

防御パッケージ「ガーデン・カーテン」を使い防御した

「このくらいじゃ、落とせないよ!!」

・・・・・・・・

一夏Ｓｉｄｅ－

気が付いたら、俺は波の音が聞こえる砂浜にいた。太陽の熱で熱くなっている砂浜、潮の匂いと波の音。

そしてひとまず木に寄りかかっていると目の前に白い少女がいた
白い髪に白いワンピースだがその姿を見ていると

（なぜだろう・・・・・・懐かしい・・・・・・）

そう思ってしまった

「呼んでる……行かなきゃ……」

そう白い少女が言う

「えっ!?」

空に視線を向けると青空と白い雲しかなく、また視線を少女のもとに戻すと誰もいなかった

すると一気に周りは夕焼けの光景になり

「力を欲しますか……？」

「え……」

声がしたので振り向くと、白く輝く甲冑を身に纏った騎士の姿をした女性が立っていた

「力を欲しますか……？」

もう一度聞いてきたので

「うん」

と頷いた

「なぜ？なんのために？」

「うーん……そうだな友達を、いや仲間を守るためかな」

「仲間？」

「ああ、なんていうか世の中って結構色々戦わないといけないだろ？道理のない暴力って結構多いぜ」

「そういうのから仲間を助けたい。この世界で戦う仲間を」

「そう……」

「だったら行かなきゃね」

「えっ？」

振り向くと、白いワンピースの女の子が立っていた

「ほら、ね？」

そう言い俺の手をとってきた

「ああ」

・　・　・　・　・

箒達五人は善戦こそしたものの、徐々に追い込まれ

「ぐっ、うっ……！」

大量の光の弾丸をくらい、箒は地上に落ちてしまった

会いたい……

一夏に会いたい……

会いたい……

会いたい……

一夏に

箒はギリギリの状態の中そう思うと

「箒」

一番会いたかった人物から呼ばれた気がしたので目を開ける

潤んだ視界から見えてきたのは、白式第二形態・雪羅（せつら）を纏った一夏だった

「一夏……」

「ああ、待たせたな」

「一夏!?体は……傷は!!」

「大丈夫だ、戦える。みんなには止められたけどな」

そう言い微笑む一夏

「よかっ……よかった……本当に……」

「なんだよ、泣いてるのか?」

「な、泣いてなんかいないっ！」

「箒、これ」

と言い渡したのはリボンであった

「えっ！？」

「いつもの髪型のほうが似合ってるぞ」

「誕生日おめでとう」

「あっ……」

「今日は七月七日だろ。」

「じゃあ行ってくる」

そう言い福音に向かって行く一夏

「一夏……」

・・・・・・・・・

映司Ｓｉｄｅ－

「それでどうかしたんですか？」

神に尋ねてみると

「実は今回貴方を転生させた結果原作ではありえない展開や、原作では出てこなかった人物が出てきたりとすでにもう原作の登場人物だけでは対処出来ないほどになりました。」

「……」

「そして今起きている福音事件も多分原作通りには行かないと思います。」

「ちなみに今誰が福音を？」

「貴方がいつも一緒にいる人達です……」

「一夏達か？」

「はい……」

「俺が行かなかったら一夏達は？」

「このままでは……確実に死にます」

「……はぁ～、俺のせいでこんなことになるとはねぇ～」

「本当にすいませんでした。本来ならそこらへんの処理は私達がするのですが、こちらのミスでこんな事態に・・・・」

ムクリと立ち上がり外へ向かう

「あ、あのどちらへ？」

「一夏達のとこ。そちら側のミスだろうがなんだろうが知ったこっちゃないし、あんたらの尻拭いをする訳でもない」

「友達を助けに行ってくる」

「本当にすいません……もし！！」

「ん？」

部屋から出ようとしたら神様が何か言おうとしたので止まった

「もし今後貴方が困難にぶつかったとき、必ず手助けをしますので！！！」

「そりゃどうも」

そう言い部屋を出ていった

砂場に着き、ドライバーにタカ、クジャク、コンドルを入れ

「変身」

静かに言うと

【タカ！　クジャク！　コンドル！】

次の瞬間には映司の姿はもうなかった

・・・・・・・・・

何回もぶつかりあった後、福音は一夏に光の弾丸を射出してきたが

「雪羅『シールドモード』に切り替え！！」

左手を突き出すと零落白夜を利用したシールドが展開され防いだ

「すまん回復に手間取った」

「さぁ反撃のお時間ですわよ」

「ラウラ、セシリア」

「一夏さっさと片付けちゃうわよ」

「エネルギーは十分、僕たちの心配はいらないよ」

「鈴、シャルル」

一夏のもとに皆が集結し

「よーし！行くか！！」

そう言い福音のもとへ向かっていった

・・・・・

「うおおおおぉ!!」

福音に近付くも大量の光の弾丸のせいでシールドエネルギーが徐々に削られてしまい、零に近づき始めた

「やばい……エネルギーが!!」

すると箒の展開装甲のビットを福音に飛ばし距離をとらせてから一夏に近づき

「一夏これを受け取れ!」

紅椿の手が白式へと触れる

すると光出しどんどんとシールドエネルギーが回復してきて、つい

にフルパワーまで回復した

「な、なんだ……？エネルギーが回復!?箒、これは……」

「一夏奴を倒すんだ!!」

「ああ、行くぞ!!」

・　・　・　・　・

まず箒が二本の刀ー雨月（あまづき）・空裂（からわれ）ーで切りかかり福音の動きを止め

「一夏今だ!!!」

箒が叫び

「おおおおおぉ!!」

一夏も接近するが、その前に福音が超至近距離で光の弾丸をぶつけサマーソルトで箒を吹っ飛ばした後一夏と何度かぶつかり合い、また大量の光の弾丸を飛ばしてきた。

避けながら

「ラウラ！！」

「任せろ！」

ラウラに援護を頼み、ラウラはパンツァー・カノニーアを撃つ

福音がラウラに反応した一瞬のスキに一夏はまた切りかかるが躱されてしまい、大量の光の弾丸をラウラに浴びせた

「私もここにおりましてよ！」

ラウラに攻撃している福音の背後からセシリアはビットで攻撃する

「一夏！！もう一回よ！！」

さらに鈴が赤い炎を纏った弾丸ー崩山（ほうざん）ーを放つ

福音は鈴に向けて大量の光の弾丸を放つ

「鈴！！」

シャルルが鈴のカバーに入り

「一夏急いで！！もうもたない！」

福音が一夏を見失ったようで探しているところを

「今度は逃がさねぇぇぇっ！」

上空から零落白夜のエネルギー爪で福音を掴み海面に叩きつけながら移動し、

「うおおおおおおおぉ！！！」

砂浜に叩きつけた

だがあと一歩というところでイレギュラーが起きた

いきなり福音は衝撃波を出し、一夏を吹き飛ばした

「そ、そんな一体何が……」

一夏は突然の出来事に驚きながら福音を見ると、砂場が強烈な光の珠によって吹き飛んだ

その光の珠の中心、青い雷を纏った福音が自らを抱くかのようにうずくまっている

「!?まずい!これは『第二形態移行』だ!」

そう原作ではもっと前に起こるはずだった第二形態移行がこんな最悪のタイミングで起こってしまったのである

ラウラがそう叫ぶと翼が生えた福音が出てきた

すると福音は翼から収束された弾丸を撃ち出してきた

「くっ！？」

一夏はシールドモードで防いだがあまりの衝撃に耐えられず吹き飛ばされてしまった

「一夏！！うわぁぁぁ！！」

さらに箒にも撃ち

セシリアに翼での捕縛攻撃、シャルルに収束弾、ラウラに大量の光の弾丸をくらわした

皆福音の強烈な一撃に倒れてしまった

「つ、強い……」

箒はそう呟きながら立ち上がろうとした

「箒逃げろ！！！」

一夏がそう叫び箒は前方を見てみると福音が収束弾を作っていて、

それをこちらに向けていたのである

そして無情にも収束弾が箒に撃ち放たれた
どうなったか皆知りたかったが収束弾の爆風で舞い上がった砂煙で
よく見えない

「箒！！！！！！！！！！」

一夏は力の限り叫ぶ

「「「「箒（さん）！！」」」」

四人も叫ぶ

しかし

【タ～～ジャ～～ドル～～～！！】

どこか聞き覚えのある電子音が聞こえ、砂煙が晴れ見えてきたのは

無傷の箒と、大半が赤で占められている全身装甲のＩＳがいた

それを見て一夏達はある人物の名前を言う

「「「「「「映司(さん)！！！！！」」」」」」

・・・・・

映司Ｓｉｄｅ－

「はぁ～、せめて一声かけろよ。まぁいいや、悪いが篠ノ之少し下がっててくれ」

「あ、ああ！！」

あまりの急な出来事に篠ノ之は驚いていたが、すぐさま離れてくれた

福音が大量の光の弾丸を撃ち出してきたが

「はぁっ……はあああぁ！！！」

腕を前で合わせてた形から一気に広げると背部から扇状に開いた羽が出てきて、羽の先端にはコアメダルもどきがあり

「綺麗……」

誰かがそう言ったが今は気にせず

「はあああぁっ！！」

腕を斜め上に上げると、羽は全部とれて宙に浮き、

「はぁっ！！」

腕を前に突き出すと、コアメダルもどきは羽手裏剣となり飛んで行き光の弾丸を全て相殺した

「！！！！！」

福音は驚きながらも今度は収束弾を作った

だが

「はっ！！！」

折りたたまれた3対の翼・クジャクウイングを展開して飛び、収束弾を躱し、タジャスピナーから火炎弾で攻撃しながらさらにタジャスピナーに炎を纏わせて状態で福音を二、三度殴り福音は怯んだ

そしてその間に福音よりも高い位置まで上がり、コアメダルをもう一度スキャンし

『スキャニングチャージ』

という電子音が流れ、クジャクウイングで飛翔中に一回転し、赤い3つのオーリングを潜り抜けながらクロー状に変形して炎を纏ったコンドルレッグで急降下蹴りを叩き込む―プロミネンスドロップ―を

「はあああああぁ！！」

「セイヤーッ！！」

叩き込んだ

福音は今の一撃でシールドエネルギーが零になったようで活動停止し、ついにＩＳも解除された

「やっば！！」

ＩＳが消えると、ＩＳスーツを纏った金髪の女性が現れ、海に落ちていった。

とりあえず俺は金髪の女性を抱きとめ、皆のとこへ向かっていった

三十一話（後書き）

疲れた　眠い　　そして明日から講義が始まる……つらいです

投稿するペースが遅くなりますが必ずしますので今後ともよろしくお願いします

あと最後に質問というかアンケートなんですがプトティラとブラカワニは今後出してほしいという人はいますか？

出さずに今までのメダルでいいという人もいるかもしれませんので皆さまの意見を聞かせてください

ご協力お願いします

三十二話（前書き）

三十二話

「作戦完了！！と言いたいところだがお前たちは重大な違反を犯した」

「「「「「「はい！！！」」」」」」

俺たちは今、勝手な行動をしたので織斑先生からのお説教中だ

「帰ったらすぐ反省文の提出だ。懲罰用のトレーニングも用意されているからそのつもりでいろ！！」

「あ、あの織斑先生もうそろそろこの辺で。みんな疲れているはずですし、ほら神谷君なんてもう立ちながら寝ていますしって……え！！！！駄目ですよ、神谷君起きてください！！」

「！！す、すいません山田先生、織斑先生。でも体が物凄くだるいもんで……」

変身を解いた後も片膝をついてしまう程度の疲労だったので説教も乗り切れると思ったんだが、いざ始まるとものの数分で眠気が襲ってきてのだ。そして善戦虚しくすぐさま眠気に負けてしまった。

織斑先生はこちらをチラっと見た後

「ふぅ……しかしまぁよくやった。」

「「「「「え！！！」」」」」

まさかのお褒めの言葉に驚いているが

俺はそれどころではないんだが

織斑先生は若干顔を赤らめながら

「……あ～、全員よく帰ってきたな。今日はゆっくり安め。」

とまさかのお言葉の連続にみな唖然としているが、こちとらもう限界なのでその場で倒れ、そのまま寝てしまった

・　・

・・・・・・・

目が覚めると辺りは真っ暗であった

「ん～よく寝た。」

「寝すぎだ馬鹿者」

驚き声がしたほうを見ると呆れた顔をした織斑先生がいた

「！！ってなんだ～、織斑先生じゃないですか。驚かせないでくださいよ」

「知ったことか」

「んで何かようでも？」

「教師が自分の生徒の様子を見に来ることに何か問題でも？」

「そ、そうですか～。でも俺のことは気にしないでいいですよ。それにまだ後処理とか残ってますよね？だったらそっちを優先してくださいよ」

「はぁ～、他人のことばっかりじゃなく自分のことも気にかけろ」

と呆れながら言い軽く頭をチョップしてきた

「？？？？？？？？？」

「まるで分かってない顔だな……まったく」

「たまにはあいつらに頼ってやれ。たしかにお前のおかげで助かっているが、その度に倒れていてはあいつらが悲しむぞ」

「は、はい。では善処します」

「ふっ、ではな。大人しくしとけよ。」

と俺に微笑みつつ去っていった

「ふぅ～、とりあえずもう一眠りでもするか」

・・・・・・・

「はぁ～あ、白式には驚くなぁ～」

崖に腰掛けながらディスプレイを眺め、嬉しそうに呟く束

「まさか操縦者の生体再生まで可能だなんて、まるで「まるで、『白騎士』のようだな。コアナンバー００１お前が心血を注いだ一番目の機体にな」

束の背後にある林から千冬が姿を現す。

「やあ、ちーちゃん」

「例えばの話がしたい。とある天才が一人の男子を高校受験の日に

ＩＳがある場所に誘導できるとする。そこにあったＩＳを、その時だけ動くようにしておく。すると男が使えないはずのＩＳが使えたように見える」

「うーーん、それだとその時にしか動かないよね～。」

「ふふふ、実のところ白式がどうして動くのか私にもわからないんだよね～」

「まぁいい、今度は別の話だ。とある天才が大切な妹の晴れ舞台でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは専用機とどこかのＩＳの暴走事件だ。暴走事件に際して妹が乗る新型の高性能機を作戦に加える。妹は華々しくデビューというわけだ」

「すごい天才がいたものだね～」

「ああ、すごい天才がいたものだ、かつて十二ヶ国の軍事コンピュータをハッキングした天才がな」

「ねぇ、ちーちゃん。今の世界は楽しい？」

ふいに、束は千冬に問いかけた。

「そこそこにな」

表情を変えず応える千冬。

「そうなんだ」

「そうだえー君のことお願いだよ。えー君ったらすぐに無茶しちゃうからさ」

「お前に言われなくても分かっているさ」

「ふふ、ちーちゃんもだいぶえー君のこと気に入ってるでしょ」

「……そうかもな」

「では束さんも負けずに頑張らなくてはね～」

「あいつが余計に疲れるだけだから辞めておけ」

「そっか」

「――――――」

崖から吹き上げる風が、いきなり吹き出した。
その風の中で束は何かを呟いたが、その言葉は風の中に消えていった。そしてもう束はいなくなっていた。

・・・・・

「ね、眠れん……」

朝方からずっと寝てたからさすがにもう寝れないな

とりあえず暇つぶしに海岸へと向かっていった

海岸に着き、ぶらぶらと歩いていると

（あれって一夏と篠ノ之だよな？）

なぜか二人とも水着だったのだが気にしないでおこう

（なんだかいい雰囲気だし、邪魔するのも野暮だからな）

とその場を後にしようとすると

『カチッ』

後ろから機械音がし、恐る恐る見るとビットの銃口が俺に向けられていて
さらに横を見ると

「ふふ、ふふふふふ～」

不思議な笑い声をあげるセシリアと

「嫁よ、私は悲しいぞ。ＩＳが飛べるなんて聞いてなかったぞ。まさか私に秘密事をするなんて」

拗ねているラウラと

「それに束さんとも随分仲がいいんだね～」

笑っているはずなのだが目だけ笑ってないシャル

「よし殺そう！」

単色の目をした鈴

「……さらば」

逃げる俺

「「「「待てーーーー！！！」」」」

もう勘弁してーーーーー

三十二話（後書き）

明日は出来たら二話、最低でも一話は投稿しますので

あとプトティラとブラカワニですがプトティラは本編で出すことにしましたがブラカワニは少しきついので番外編という形にしました
楽しみにしていた人はすいませんでした

主人公設定二十三十三話（前書き）

またもやネットに繋げることが出来なくなりました

今日はまずドラゴンネストをやり終わえ，執筆をＹｏｕＴｕｂｅで作業用の音楽を聞きながらやっていました。そこまでは正常に出来ていたのですが，いきなりＹｏｕＴｕｂｅの動画が止まり，違うのをと思ってクリックしたら接続出来ないと画面が

さらに執筆し終えた作品を保存しようとしたらそこでも同じ画面がもうとりあえず諦めて携帯でやっていたらこんな時間に

本当にすいませんでした

主人公設定二十三十三話

神谷　映司

元学生だったが神のせいで転生することになった主人公

性格はめんどくさがりだが根はまじめで優しく良い子である

また前世で恋愛をしていなかったので女子から好意鈍い

また女子からの積極的なアプローチには弱くあたふたしてしまう

ＩＳ設定

オーズ

爬虫類、恐竜以外のコアメダルを所有

この作品では同じコアメダルは三枚から一枚になり

また映司以外はコア並びにベルト、スキャナーを持つことが出来ない　（映司から離れた場合光の粒子となって消え映司の元に戻る）

だが今後恐竜系のコアメダルは本編にて登場する予定

コンボの疲労などはそのまま蓄積される

ツールも後にメダガブリューも出す予定

・・・・・・・・・

ー翌日ー

今俺達は帰るため
全員がクラス別のバスに乗り込む

「……」

「え、映司大丈夫か？」

いつも以上にだるい俺に心配したのか声をかけてくれた一夏

セシリア達との鬼ごっこはあの後一夏と篠ノ之が駆けつけてくれて
なんとかその場は収まったのだが

（なんか二人には悪いことしたな……）

「一夏、その……邪魔して悪かったな」

「ん？なんのことだ？」

（本人は無自覚かい……まぁ本人がそういうならこれ以上は気にしないでおくか）

（しかし喉が乾いたな）

「なぁ、誰か飲み物持ってないか？」

「悪い、今持ってないや」と一夏が

「……ツバでも飲んでいろ」とラウラ

「知りませんわ」とセシリア

「あるけどあげない」とシャルロット

鈴は二組なのでいないし

篠ノ之とはそこまで親しくないし

（はぁ～諦めるか）

結局、飲み物はもらえなかったので大人しく寝ることにした

「一夏、悪いが疲れがまだ残ってるから寝させてもらうわ」

「はいよ。休憩所に着いたら起こすんでいいか？」

「ん、助かる。」

と言い目をつぶった

・・・・・・・・

シャルルＳｉｄｅ－

（うーん、ちょっと可哀想だったかな……？）

さっきはつい冷たく返したものの、シャルルは映司のぐったりと眠りに入る様子にちくちく良心の呵責を感じていた

（昨夜は映司が僕に隠し事をして、束さんともあんな仲良くしていたからついあんなことしちゃたけど……そろそろ許してあげようかなぁ）

荷物からお茶のペットボトルを取り出す

乗り込む前に自販機で買っておいたのが役に立ちそうだった

（みんな動かないみたいだし……よしっ！）

セシリアＳｉｄｅ－

（さすがに冷たかったかしら……？）

セシリアは、ため息を吐いて眠りに入る映司を見ながら、少しそわそわとしていた

せっかく優しくするチャンスだったのだが、ついあんな態度を取ってしまった

よくよく考えれば、他の女子が非好意的なのだから、千載一遇のチ

ャンスである

（そうと決まれば――）

鞄の中で横になっているペットボトルへと手を伸ばす
元々自分用に用意していたものだったが、思わぬところで使えそうだった

（善は急げですわね。……コホン）

ラウラＳｉｄｅ―

（さっきは、何か別の言い方があったのではないか……？）

そんな自問自答を繰り返しているのは、今回のビーチで新しい一歩を踏み出したラウラだったのだが

気づくと真っ先に冷たい反応をしてしまった自分が恨めしい
あそこで、笑顔を見せてこそいい女というものではないだろうか

そんなことを考えながら、ではどう巻き返すかと考えるラウラ

（そう……だな。どうも喉が渇いているようだし、朝方に買ったお茶が使えるか）

さっき取り出しておいたペットボトルをもてあそびながら、どう渡したものかと考える
せっかく他の女子が引っ込んでいる今こそ、チャンスだと見据えながら

（うむ。さりげなく隣に座って渡すか。……そ、それなら帰りはずっと隣にいられるな）

・・・・・・・・・

映司Ｓｉｄｅ－

「ふぅ……」

「「「え、映司！」」」

「……ん？」

名前を呼ばれた気がしたので俺は重たい目蓋を開けようとしたそれと同じタイミングで、車内に見知らぬ女性が入ってきた

「ねえ、織斑一夏くんと神谷映司くんっているかしら？」

「あ、はい。俺ですけど」
「……」
一夏が返事をするが、俺は一目チラッと見て気づいた
―この人と関わったらめんどさいことになると―
とりあえず起き
「君たちがそうなんだ。へぇ」
どうやら俺と一夏を見に来たらしいが誰なんだこの人は？
「あ、あの、あなたは……？」
一夏が尋ねると
「私はナターシャ・ファイルス。『銀の福音』の操縦者よ」
「え――」
「……」
予想外の言葉に俺達は驚かされた

あの福音の操縦者がまさか元気に挨拶に来るとはまったく思いもしなかったからだ

「これはお礼。ありがとう、白いナイトさん」

といきなりナターシャさんは一夏にキスしてきた。

「さてと――――」

（まさかこの流れからしたら……）

と予想した通りこちらに顔を近づけてきたので

「ほんとーーに気持ちだけで十分なので」

とナターシャさんの額を手で押しながら顔を近づけないようにして、なんとかキスを阻止出来た

「ぶぅ～、別にそのくらいいいじゃない」

「残念でしたね～。次回に会えた時のお楽しみということで」

（ふぅ～これでなんとか誤魔化せただろう）

すると急に顔を輝かし

「それってつまり、また私に会いたいってことだよね～。素直じゃないんだから～♪」

このこの～と言いながら俺の頬を指でつついてくる

なんでこんなことに……と頭を抱えていると

「隙あり～♪」

『チュッ』

不意討ちで頬っぺたにキスされてしまった

「な、なななぁ／／／／」

「本当にありがとうね、真紅のナイトさん♪」

「じゃあ、またね。バーイ」

「は、はぁ……」

「……／／／／／」

ひらひらと手を振ってバスから降りるナターシャ

一夏はぼーっとしたまま手を振り返して見送り

俺は必死に自分を落ち着かせようとした

ぞくり

「……」

ふと悪寒を感じ
おそるおそる悪寒を感じた方向を振り向いた

「浮気者め」

「映司ってモテるねぇ」

「本当に、行く先々で幸せいっぱいのようですわね」

すたすたと歩いてくる三人

天にでも祈るか（´△`）

・
・　・
・　・　・

「……」

バスから降りたナターシャは、目的の人物を見つけてそちらへと向かう

「おいおい、余計な火種を残してくれるなよ。ガキの相手は大変な

んだ」

そう言ってきたのは、千冬だった
ナターシャは、その言葉に少しだけはにかんで見せる

「思っていたよりもずっと素敵な男性達だったから、つい」

「やれやれ……。それより、昨日の今日でもう動いて平気なのか？」

「ええ、それは問題なく。――私は、あの子に守られていましたから」

ここで言う『あの子』とは、つまり暴走によって今回の事件を引き起こした福音のことを指していた

「やはり、そうなのか？」

「ええ。あの子は私を守るために、望まぬ戦いへと身を投じた。強引なセカンド・シフト……あの子は私のために、自分の世界を捨てた」

言葉を続けるナターシャは、さっきまでの陽気な雰囲気など微塵も残さず、その体に鋭い気配を纏っていく

「だから、私は許さない。あの子の判断能力を奪い、全てのＩＳを敵に見せかけた元凶を――必ず追って、報いを受けさせる」

福音は、そのコアこそ無事であったが、暴走事故を招いたことから今日未明に凍結処理が決定された

「……何よりも飛ぶことが好きだったあの子が、翼を奪われた。相手が何であろうと、私は許しはしない」

「あまり無茶なことはするなよ。この後も、査問委員会があるんだろ？しばらくはおとなしくしておいたほうがいい」

「それは忠告ですか、ブリュンヒルデ」

ＩＳ世界大会『モンド・グロッソ』、その総合優勝者に授けられる最強の称号・ブリュンヒルデ

千冬はその第一回受賞者であったが、正直その名前で呼ばれることは好きではなかった

「アドバイスさ。ただのな」

「そうですか。それでは、おとなしくしていましょう。……しばらくは、ね」

一度だけ鋭い視線を交わしあったふたりは、それ以上の言葉なく互いの帰路に就く

「ああ、そうそう」

「？」

「次、神谷にあんなことをしたら……わかってるな？」

ゴゴゴゴッとナターシャを睨みつける千冬
しかし、ナターシャは笑みを浮かべて答えた

「ふふふっ♪それも忠告として心得ておくわ。でも――障害が高ければ高いほど燃えるのよね」

ナイトによろしく♪と最後にナターシャは去って行った
千冬は頭を抱えて呟いた

「あいつはどれだけ女を落とせば気が済むんだ……」

主人公設定二十三十三話（後書き）

書いてて感じたんですが，なぜかナターシャさんと束さんが似ているキャラになってしまうんですよね～

三十四話（前書き）

だいぶ期間をあけてしまいすいませんでした

台風直撃の際にびしょ濡れになりながら講義を受けたのが原因で風邪をひいてしまい、中々執筆出来ませんでした

今は針治療のおかげでだいぶ楽になりましたが、已然として食事があまり喉を通りません

とりあえずいつも通りの長さですが楽しんでください

三十四話

鈴Ｓｉｄｅ－

－八月－

クソ暑いったらありゃしない

昔から、この国の夏は嫌いだ。大ッ嫌い

最初は両親の都合、次は祖国の都合でここにいる

凰鈴音

それがあたしの名前

ＩＳ『甲龍』の専属操縦者にして国家代表候補生

現在はＩＳ学園に通う一年生

「あっつぅ……」

八月、ＩＳ学園は遅めの夏休みに入る

そのせいで、世界中からやってきた学園生は現在ほぼ半分が帰省中

あたしも本当は国に帰ろうかと思ったんだけど――

「……」

でもやめた

帰ってもどうせ両親は一緒にはいないし、軍施設で面倒な訓練も受けたくない

それに別の理由だってある

（あいつ、いるんでしょうね。まったく。なんであたしから誘わなきゃいけないのよ。本っ当っ、あいつには苦労するわね！）

あたしは寮の廊下を歩きながら（ったく、なんでエアコン入ってないのよ！）、だんだんと腹が立ってきた

――そう、そうよ

あいつから誘いにくればいいのよ

そう思って足をUターン――させたところで、ばったりと会った

「おい、どうした？」

「え、え、映司！？な、なんでアンタここにいんのよ！へ、部屋じゃないの！？」

「別に、適当にふらついていただけだが。あン？何持っているだ？」

「な、なんでもないわよ！」

反射的に、あたしは手に持っていたチケットを後ろに隠してしまう

……ああ、しまった

『ふふん、

気づいた？実は――』

って流れならすんなり言えたのに！言えたのに！

「……」

ぐ……

『何してんだ、お前』って顔してるわね……

あー、ごほんごほん！

「きょ、今日は暑いわね」「ああ、この時期ほど忌々しいものはないな」

「そ、そんなに嫌いなんだ」

あまりにも嫌っているので最初は驚いた。だがあたしと似たような考えなのだと思うと、ちょっと嬉しい

「てか俺の部屋にでも来るか？エアコンつけるぞ」

ん？もしかして、これってチャンス……？

「ま、まあ、そうね。じゃああんたの部屋に行ってあげる。飲み物出しなさいよ？」

「了解っと。麦茶でいいよな」

「冷たけりゃなんでもいいわよ」

そう言って、あたしは映司と並んで歩く。

今は寮内も閑散としていて、ちょっとしたふたりきりだった

（そ、そういえばあたしって汗臭くないわよね……？）

急にそんなことが気になってしまって、あたしは映司の隣から半歩

横にずれる

大丈夫。大丈夫……だとは思うんだけど、この暑さなんだから、別にちょっとくらい汗をかいてても仕方ないわよね

――うん、仕方ない！

「お～い」

「！？な、何よ！？」

ずいっと映司がこっちに顔を寄せてきた

――わあっ、近い、近いっ！

あたしは反射的に、その顔を押し返す

「さっきから何度も呼んでいるだが」

「う、うん！？そ、そう！それは悪かったわね！か、考え事をしてたのよ！」

「鈴が考え事？……ぷぷっ」

「べ、別に良いでしょ！！」

「はいはい。まぁ本当に困ったら相談しろよな。」

「ふ、ふん……。わかってるわよ……／／／」

う、やばい……　　ドキドキする

なによ、バカ

いつもそうやってさりげなく優しくするんだから。

それに……なんかさらに格好良くなってるしさぁ……

「鈴？」

「なっ、なによ！」

「部屋ついたぞ、早く入りな」

「わ、わかってるわよ、バカ……」

あたしはそう言いながら映司のあとについて部屋に入る
まずい
部屋に入ってベッドにかけて、早速まずい

（映司ってなんか……いい匂いするわよね……）

まずい、やばい、落ち着かない

（あ～……うー……）

ばたばたと足を動かしてもがきたいけれど、そんな動きを映司に見られたくはなくて、結局あたしはもぞもぞと小さく体を揺すった

「んじゃ、飲み物用意するから適当に座って待ってな」

「う、うん……」

映司は特に気にしてなかったみたいだ

「ほい、お茶。ちゃんと冷えてるぞ。」

「ありがとう」

受け取った麦茶を飲みながら、あたしはさりげなく制服の上からサイフを確かめる

……うん、大丈夫。ちゃんとある

「映司」

「ん？」

「あんたさぁ、夏休みなのにどこにも行かないわけ？」

「一応実家には戻るつもりだが、他にどっか行くとかは無いかな。涼しいとこなら、どこかしらは行きたいがな」

――よしよし、ここまで予想通り！

「ったく、しょうがないわねぇ。このあたしが融通利かせてあげるわよ」

「融通ねぇ……まぁいいか」

「ん」

「これは……どこのチケットだ？」

あたしが取り出したチケットを、しげしげと眺める映司

……食いつきは上々ね

「なにアンタ知らないの？今月できたばっかのウォーターワールド

よ。言っとくけど前売り券は今月分が完売。
当日券だって開場二時間前に並ばないと買えないのよ？」

「おお、それはまたすごいな」
ふふ
これを手に入れるのにあたしがどれだけ苦労したと――

「で、いつ行くんだ？」

「い、行くの？」

「はぁ？そのために持って来たんだろうが」

「そ、そうね……」

うわああ、やった！
どうやって誘うか一番悩んだのに、あっさりクリアーした！

「で、いくらだ？」

「二千五百円」

「明日の土曜日」

「あいよ。で、日時は？」

「そりゃまた急だね～」

（仕方ないでしょうがっ、友達のキャンセル品を引き取ったんだから！）

「まあ、これといって用事はないし良いけどさ。
どこで待ち合わせる？学園内だと制服しかダメだし、やっぱり外か？」

「う、うん！そうね！せっかくだしゲート前で待ち合わせがいいわね！」

――やった！
すごく、すごくデートっぽい！

（ていうかデートよね！）

あたしは心の中でグッと右手を握りしめる
ここ最近ライバルの増加に出遅れることが多かったけど、今度こそはあたしがリードしたわね！

「じゃあ待ち合わせは何時にする？」

「そうね、じゃあ十時に」

「了解っと」

やった！やったぁ！

あたしは心の中で何度もガッツポーズを繰り返して、おかわりの麦茶を一気に飲み干す

タンッとテーブルにコップを置いて、立ち上がる

――フ、

決まった

「いきなり変な顔してどうしたんだ？」

「し、失礼ね！とにかくっ、明日遅れるんじゃないわよ！」

ばたん！と後ろでドアが閉まる音を聞いて、あたしは廊下に出る

そして出るなり、今度は心の中じゃなく実際にガッツポーズをした

（やったあああっ！やった、やったあ！）

さすがに声は出せないけれど、もうとにかく嬉しさのあまり動かずにはいられない状態だった

（早速部屋に戻って準備をしないとね！）

半ばスキップに近い足取りで、あたしは自分の部屋へと戻る

夏の暑さは気がつけばどうでもよくなっていた

）

三十四話（後書き）

今回からアニメ→小説を元に執筆しているのでだいぶ書き方が変わりましたが気にしないでください

三十五話

セシリアＳｉｄｅ－

「さて、やっと戻ってこれましたわ」

ＩＳ学園の正面ゲート前で、白のロールスロイスから降りたわたくしは早速の熱気にうんざりしながらも気分は高揚していた

（やはり、思い人とは同じ空の下にいたいものですし……）

わたくしセシリア・オルコットは本国イギリスでの仕事を終えて、やっと今日日本へと戻ってこられた

オルコット家での溜まった職務、国家代表候補生としての報告、専用機の再調整、それ以外にもバイオリンのコンサート参加、旧友との親交、それに――両親の墓参り

「……」

考えると、まだ胸の奥が痛む

――どうして、何もいわずに逝ってしまったのだろう

――どうして、わたくし一人が残されたのだろう

――どうして、二人は最期に一緒にいたのだろう

（いつかわかるときが来るのかしら……）

「お嬢様」

――――っ！？

呼ばれて振り向くと、わたくしの幼なじみであり専属メイドでもあるチェルシーがいつもと同じように微笑みを浮かべて控えていた

「どうかなされましたか？」

「い、いえ、なんでもなくてよ」

わたくしは多少乱れはしたものの、努めて平静を装った

相変わらず、チェルシーは人の心の機微に鋭い

昔からそうだ

十八歳とは思えない落ち着いた雰囲気を身に纏っていて、幼なじみと言うよりわたくしにとってはお姉さんのような人

そんなチェルシーは憧れであり、目標でもある

「そうですか。それでは、お荷物の方は私どもがお部屋まで運んでおきますので」

そう言ってチェルシーはうやうやしく頭を垂れ、もう一人のメイドを連れて荷物を運びはじめる

（さてと、わたくしは――――）

「早速、神谷様に会いに行かれますか？」

「ちぇ、チェルシー!?荷物を運びにいったのではなかったの?」

「実は一つ確認しておくことを恥ずかしながら失念しておりまして、戻って参りました」

「そ、そう。それで、確認とは?」

「あの白いレースの下着は神谷様用ですか?」

「――――――――」

え?

「お嬢様、派手すぎる下着は却って逆効果と思われます」

「あ、あの、あれは――――」

「では、これで」

言い訳をする暇も与えず、チェルシーは再度丁寧なお辞儀のあとスカートを翻して行ってしまう

いや、あの、ええと――――、え?

「え?」

母国に帰った際にこっそりネット通販で買って、二重底のスーツケースに隠しておいたのに……なぜ?

ふっ、とあのチェルシーの柔らかな笑みが脳裏に浮かんで、たまら

なく恥ずかしさがこみ上げてくる

あああああああっ……

（あ、穴があったら隠れたいとはこのことですわ）

顔が痛いほど熱くなって、夏の暑さとは関係なく汗が噴き出してくる

手のひらは特にひどくて、今すぐにでも洗いたいほどだった

「よ～セシリア」

――どきぃっ!?

え?えっ?ええ!?

（こ、この声は映司さん?どうしてここに……はっ!?も、もしかして、わたくしの出迎えに!?）

ドキドキと高鳴る胸を一度手できゅっと押さえ、あくまで冷静にどこまでも平静にわたくしはゆっくりと振り返る

「よ～」

「映司さん、一週間ぶりですわね。ごきげんよう」

スカートをつまんで優雅に挨拶をしながら、けれど内心はとても穏やかではいられなかった

――ああっ、本当に映司さんでしたわ!

やはり、わたくしを思ってわざわざ出迎えに……？
きゃあっ、そんな、映司さんったら！

『セシリアが帰ってくると思ったら、いてもたってもいられなくなって』

『そんな、映司さんったら……お上手ですわ』

『ウソじゃない。セシリアと離れて過ごす一週間は、永劫の時にも等しかった』
『映司さん……。あっ――』
『もう離さない。マイ・プリンセス』

ああっ、ああっ！
いけませんわ、いけませんわ！
このような場所で！
誰かが見ているかもしれませんのに！

「セシリア？」

「――はっ！？」

真夏の白昼夢――もとい、妄想だった

「本当に大丈夫か？ぼーっとして、熱射病か？こんなバカみたいに暑つければ仕方ないがな」

「い、いえっ！大丈夫です！その、さっきまで車の中でしたから、すこし立ちくらみをしただけです！」

「そうか。それならよかった」

「ええ、まったくです」

！？

「……ええっと、どちら様で？」

「お初にお目にかかります。セシリア様にお仕えするメイドで、チェルシー・ブランケットと申します。以後、お見知りおきを」

もう荷物は運び終えたのか、いつの間にか戻ってきたチェルシーは映司さんに丁寧なお辞儀と自己紹介をする

（あら……？なぜチェルシーひとりなのかしら？）

考えて、すぐに思い当たる

チェルシーだけが戻ってきたところを見ると、どうも陰から様子を見ていて、このタイミングで出てきたのだろう

……本当に心の機微に鋭い

「あ～。前に一度、セシリアから話は聞いていましたけど、あなたがそうなんだっんですか。どうも、神谷映司です」

「はい。神谷様。――――ときに、ご無礼を承知の上でおたずねしますが、私のことをお嬢様はなんと？」

「ああ。とてもよく気が利く方で、優秀で、優しくて――美人だって言ってました」

「まあ」

にっこりとした柔らかな笑み

それはお世辞のしようがないくらい綺麗で、けれど嫌味ではなく人を包み込むような優しさに満ちている

それはわたくしが一番よくわかっているのだけれど――

（映司さんったら、わたくしには一度も美人だなんて言ってくれませんのに！）

そんなちょっとしたやきもちさえ見透かしたように、またチェルシーが微笑む

（ううー、チェルシーもチェルシーですわ……）

この笑顔には勝てない

昔から、ずっとそう

「私も神谷様のお話はよくお嬢様から耳にしております」

――――!?

「へぇ～、そうなんだ。セシリアは俺のことはなんて？」

あああああっ！

チェルシー！お願いだから話の内容は言わないで！

「くすっ。それは……」

今度は動揺を感じ取ったようで、さっきよりも茶目っ気のある笑みを浮かべるチェルシー

そして、ゆっくりと人差し指を唇に持って行く

「女同士の秘密、です」

それは同性さえドキッとさせる、ものすごく魅力的な笑みだった

・・・・・・

「それにしてもチェルシーさんってセシリアの言ってた通り美人だったんだね～」

「……そうですわね」

場所は変わって学園の食堂に隣接しているカフェ

冷暖房完備、年中無休のここでは駅前のコーヒーショップなんか目じゃないくらいの本格的なドリンク、それに四季折々のスイーツが楽しめるとあって、夏休みであっても学園生の姿が絶えない

「ね、ね、あれ、一年の神谷君じゃない？」

「ホントだ初めて見た！」
「やーん、格好いい～。年下っていうのも、案外いいわね～」
そんなおしゃべりがにわかに聞こえてくる
普段なら、その映司とのツーショットなのだから、何より嬉しいし自慢したくもなるシチュエーションだったけれど……
「……」
むすっとしたふてくされ顔で、セシリアはアイス・カフェラテをつまらなさそうにかき回す
ストローに押された氷がからからんと透き通った音を立てるが、今のセシリアの耳にはどうでもよく響くだけだった
（大体、初対面なのにふたりともあんなに楽しく話して……）
さっきまでの映司とチェルシーの会話を思い出し、またモヤモヤとした苛立ちがわき起こってくる
『チェルシーさんってすごいですね～。同じ十代とは思えないですよ』
『神谷様、私のことはどうぞチェルシーとお呼びになって下さい。口調も、お気を遣わずに使用人と思っていただいて結構ですので』
『いやいや、年上にさん付けは基本ですよ。それに自然と敬語にな

っちゃうんですよね』

『まぁ。神谷様はお上手ですね。女の喜ばせ方を、よくご存知のようです』

『そんな、誉めすぎですよ』

『そうですか？ふふっ』

どこか楽しそうに話す映司
それに、自分の本心を知っているくせに目の前で仲良くするチェルシーにも心がざわざわとした

（あの噂、本当なのかしら……）

先月の終わりに偶然耳にした噂

それも、昨日まではまったく気にもとめていなかったのに、今になってそれが落ち着かなくなる

いわく、『神谷映司は年上が好き』

（根も葉もないつまらない噂話と思っていましたけれど……）

先刻のチェルシーに対する態度を見ると、あながちウソでもないように思えてきてしまう

（年上って、それはどうにもなりませんし……。はぁ……）

同い年で生まれた以上、いきなり自分が年上になることも、相手が

年下になることもない
そんな、努力でどうにかならないものを求められても困る
なんだかよくわからないままにセシリアは気が滅入ってきて、ただひたすらに憂鬱な気分だった

「はぁ……」

「なあ、セシリア。さっきから機嫌が悪いがどうかしたのか？」

「映司さんのせいですわ」
「俺かい……」

いつも以上だるそうな顔を見ても、セシリアの気は一向に晴れない
こうしてカフェに誘ってくれたのも、今はさほど嬉しく感じない

（映司さんが悪いんですわ）
とにかくそうなんだと思い込むことにして、セシリアはストローに口をつける
ミルクが多めのノンシュガー
いつもならおいしいそれも、今はよく味がわからない
けれども口を離せばため息しか出てこないので、セシリアはなんとなくそれを飲み続けた

すると
『♪～♪～♪～』

「ん？俺か。悪いセシリア電話がかかってきたみたいだ。ちょっと席外すな」

と言い、何処かへと行ってしまった

「……もう」

しばらくすると映司が戻ってきたがどこか困った顔をしていた

「セシリア」

「……はい」

「ここに行かないか？」

「――はい？」

三十六話

「ん～っ！！今日は超いい天気！これぞまさしく――――」

デート日和ってやつね！

グッと、鈴は両手の拳を握りしめる

力一杯のガッツポーズだった

場所はまだ自室だったが、服装はすでに準備万全の一張羅

この日のためにわざわざ新しく買った服である

（ふ、ふ、ふ。あのシャルロットもラウラも出し抜いてやったわ！あたしの完全勝利！）

あの二人に勝ったということは鈴の中でかなり大きいことだった

（ふふん、同じ水着でもこの前の臨海学校とは意味が違うのよ、意味が。これはれっきとしたデート！男女の付き合いなんだから！）

男女、というところを強調して考えていると、いきなり鈴の顔がほんのりとピンク色に染まる

（う、うん、今日はとっておきの可愛い下着を選んだし、もちろん替えの下着も用意したし、うん……）

夏は何が起こるかわからないから油断するな、と昔の歌も言っている

（た、例えば、帰り道とかでさぁ……）

……。

『今日は楽しかったわね』

『そうだな。鈴と一緒だったからな』

『そうそう。やっとあんたもあたしのありがたみに気づいたってわけね。うんうん』

『――鈴』

『え？な、なによ？急に手なんか握ったりして……』

『俺、わかったんだ。鈴と出会い、一緒に過ごして……どれだけ大事な存在だったかってことにな』

『え、映司……？』

『鈴、好きだ』

『え、あっ――だ、ダメ、こんなところで……』

『俺のこと、嫌いか？』

『き、嫌いじゃないけど……』

『じゃあ、いいな？』

『ば、ばか……。強引……んっ』

――なんちゃって、なんちゃって！

「ねえ、ティナ！ねえ！」

「……はいはい、そーね」

カップアイスを食べながら、ルームメイトのティナは鈴の方を見ずに答える

まともに相手をするのは馬鹿らしい

昨日のやりとりで、十分鈴が浮かれていることはわかった

……その理由までは知るよしもなかったが

「じゃああたし出かけてくるから！」

「いってらっしゃーい」

「よ、夜遅くなるかもしんないから！」

「ふーん、あっそ」

「じゃあね！」

「じゃーねー」

バタン、と後ろでドアでドアが閉じる

再度、鈴はガッツポーズをして意気揚々と歩き出した

・　・　・　・　・

「ん？」

「あら？」

ウォーターワールドのゲート前にて、見知った顔を見つけた

鈴とセシリアは、お互いにぱちくりと瞬きをした後、妙によそよそしい挨拶を始める

「これは、どうも。鈴さん」

「う、うん？セシリア、こんにちは」

ふたりは『どうしてここに？』という疑問を抱きながら、少し離れた場所でそれぞれ人を待った

お互いに、妙に気合いの入った私服を不思議に思いながら――

（セシリア、友達と来てんのかしら？――まあ、あたしは映司ですけどね！）

くふふふ……とひとりでに漏れ出す笑みをこらえきれず、鈴はニヤニヤとニコニコの入り交じった顔で映司を待った。

……。

……。

……。

（だあっ！遅い！何やってんのよ、あいつは！）「どうしたのかしら……」

鈴が地団駄踏みそうになったタイミングでセシリアもつぶやきを漏らした

左手首の時計を何回も見ているので、どうやらあちらの待ち人もなかなか来ないようだった

鈴は、少しセシリアの様子が気にはならなかったがそれよりもとにかく映司である

すでに約束の十時は過ぎて、もう二十分近い

（あいつは、せっかくのデートになんで遅れるのよ……）

イライラと携帯電話を取り出した瞬間、それが鳴り響いた

表示された番号は、もちろん映司である

「もしもし!?　あんた何してんのよ!　今どこ!?」

「ん?学校だが」

「はぁ!?」

「お前と別れた後、連絡があってな、急遽オーズのメンテを行うことになったんだよ」

「……なに?」

「というわけで悪いが今回は行けそうにない」

「なあ!?」

沸点を一瞬で突破した鈴は、怒りを通り越して真っ白になってしまう

そこに、映司の声が続いた

「一応鈴にも連絡したんだが。でもお前、電話に出ないし、部屋に行ったら寝てるって言われたし、ねぇ?」

「……」

確かに、昨日は今日に備えて八時に寝た

しかも、睡眠を邪魔されないために携帯電話の電源も切っておいた

ティアには緊急時以外は起こさないようにと釘を刺した

（――――って、バカぁぁぁ！こ、こっ、これが、緊急時でしょうが！！）

「というわけだ」

「はい」

思わず間抜けな返事が出る

「セシリアにチケットをやったから、一緒に楽しんできてくれ」

――――はい？

「はい？　セシリ……って、え？ちょっと、何？」

「あン？セシリア、近くにいないか？ゲート前で待ち合わせって言ったんだけど」

「――――」

こ、こ、こ……

「コイツを殺していいかしら……」

「その、ごめんな鈴……メンテが他の日では駄目らしくてな。本当にごめん」

「……あんたにも事情があったんだし、何より電話に出なかったあたしも悪かったわ」

「また今度どっか連れていきなさいよ？」

「ああ、約束するよ。セシリアにも謝っといてくれないか？」

「いいわよ。あたしが話しといてあげる。じゃあね」

「ああ、本当に悪かったな」

最後にまた謝り、電話は切れた

「はぁ～……」

映司みたいな溜め息を出してしまった鈴

（こればかりはしょうがないが……とりあえずセシリアに事情を説明しないとね）

「あ～、セシリア……よく聞きなさい……。映司は来ないわ」

瞬間、セシリアがフリーズする

何を言われたのかわからないといった様子のセシリアに、鈴は繰り返した

「映司は来ない」

「はい？ええと……なぜ？　というか、どうして鈴さんが……？」

「今日、あたしとあんたがデートすんのよ！」

「え……ええ！？わ、わたくしは映司さんに誘われてここに――」

「だから！そのチケットは元々あたしが用意したの！　わかる！

？」

ぱちくり、ぱちくりと、二回まばたきをしてから、セシリアはゆっくりと切り出した

「……鈴さん」

「とりあえず中に入って何か飲みましょう。あたしもまだ少し混乱しているし」

「え、ええわかりましたわ。それに――」

笑顔に血管を浮かべて、セシリアはにこりと微笑んだ

「どういうことなのか、説明していただきたいですし」

ウォーターワールド、ゲート前

そこではふたりの修羅の周りが、夏の熱気ではない何かによってぐにゃりと歪んでいるように見えた

三十七話（前書き）

短いですがどうぞ

三十七話

映司Ｓｉｄｅ－

「はぁ～、二人には悪いことしたな……」

「ごめんね。約束があったんでしょ？」

俺に謝ったのは、オーズの開発をこの世界で名義上行ったことになっている主任のアイビスさんである

一応彼女も神様側の人間なので俺が転生したことなどいろいろと知っている

「まぁ、仕方ないでしょ。それにしてもまた、急に決まりましたね」

「まったく政府の人間がいちいちうるさくてしょうがないよ。とりあえずちゃっちゃっと終わらせるからね」

と言いメンテのピッチを上げるアイビスさん

「あっ！？そうだそうだ、君に渡すものがあるんだった」

「？俺にですか？」

そしてケースを取り出してきた

開けてみると

「これは”メダガブリュー”……」

「そっ。今後も何が起こるかわからないからね。だから少しでも力になれるように、アタシ達が用意したんだ」

「ありがとうございます。これでさらに戦い方の幅が広がります」

「ふふ、どういたしまして。さて、後もう少しで終わらせるからね」

と言いさらにスピードを上げた

・・・・・・・

鈴Ｓｉｄｅ－

「つまり、映司さんは自分の代わりに『ここに行かないか』と言ったのですね」

「そーねー」

「はぁ……。おかしいと思いましたわ。ええ、最初から何か怪しいと思っていました」

「ウソつけ。私服、めちゃ気合い入ってるくせに」

「なっ！？こ、これは、その……礼儀として、そう！礼儀としてですわ！」

「あー、はいはい」

セシリアの話を適当に聞き流しながら、鈴はナプキンで折った紙飛行機を飛ばす
柔らかい紙で折ったそれは案の定、まったく飛ぶことなく墜落した

……そう、まるで今の鈴のように

「ふぅ……」

「はあ……」

ウォーターワールド内の喫茶店にて、ふたりのため息が重なった

「で？」

「で、とは？」

「帰んの？」

「そうですわね。泳ぐ気分でもありませんし……」

「はぁ……。あたしも帰るかなぁ……」

ふたりがそう決めて立ち上がろうとした瞬間、園内放送が響き渡った

『では！本日のメインイベント！水上ペアタッグ障害物レースは午後一時より開始いたします！参加希望の十二時までにフロントへとお届け下さい！』

特に興味もないふたりだったが、そのあとの言葉にぴーんと耳を立てた

『優勝賞品はなんと沖縄五泊六日の旅をペアでご招待！』

（――――これだ！）

（――――これですわ！）

景品の沖縄旅行

今日のことをダシに使えば映司はイヤとは言えないはず

そうと決まれば――――

「セシリア！」

「鈴さん！」

「「目指せ優勝！」」

ガシッと腕を交わした鈴とセシリア

こうして、第一回大会にして歴代最強のコンビが結成されたのだった

三十八話

「さあ！第一回ウォーターワールド水上ペアタッグ障害物レース、開催です！」

司会のお姉さんがそう叫ぶと同時に大きくジャンプをする

その動きで大胆なビキニから豊満な胸が思わずこぼれそうになった

そのせいなのか、はたまた単純にレースの開始を喜んでか、わぁぁぁっ……！　と、会場からは歓声（主に男性の）と拍手が入り乱れる

レース参加者は全員女なのだから、観客のテンションもおおいに上がっているようだ

なお、参加を希望した男はことどごく受付で『お前空気読めよ』という無言の笑みに退けられた女性優遇の社会ではあるが、それはそれやはり水上を走り回るのは女性がいいに決まっている

それは主催者であり当園オーナーでもある向島光一郎の指針――というか、趣味であった

「さあ、皆さん！参加者の女性陣に今一度大きな拍手を！」

再度巻き起こる拍手の嵐に、レース参加者は手を降ったりお辞儀をしたりとそれぞれ応える

そんな中、特にどういう反応をするでもないペアがいた。――鈴

とセシリアである

ふたりとも念入りに準備体操をしながら、それぞれ体をほぐしていた

「ん、しょっと。そういえばセシリア、この前と水着違うわね」

「え、ええ。なんと言いますか、そう、気分の問題でして」

「ウソつけ。どうせ、新しい水着で映司を悩殺！とか考えてたんでしょうが。あーあー、派手なの選んじゃってまぁ」

「う、うるさいですわ！それより鈴さんこそ、どうして先月の臨海学校のときより体が引き締まっているのかしら？」

「あ、あたしはアレよ！規則正しい生活を心がけてんのよ！」

「そうですかそうですか。夜更かしが趣味の鈴さんにしてはずいぶん殊勝なことで」

ペア同士でありながら、妙な牽制をしている

しかし、柔軟には十二分に気合いが入っていて、ふたりがこのレースにいかにかけているかがうかがい知れた

「優勝商品は南国の楽園・沖縄五泊六日の旅！みなさん、がんばってください！」

そう、この賞品こそが目標なのだ

ふたりはそれぞれに勝手な妄想を思い描いて、むふふふと笑みを漏

らした

（いくら唐変木な映司でも、若い男女がふたりで南国の島に行けば……／／／）

（夏は人を変えると言いますし、夏休み最後の思いでということでなら……／／／）

ふと、ふたりの目線が合う

「えへっ」

「あはっ」

（セシリアからは、なんか考えて奪いましょう）

（鈴さんからは、何か代わりの物でゆずっていただきましょう）

ふたりは柔軟を終えた

「では！再度ルールの説明です！この五〇×五〇メートルの巨大プール！その中央の島へと渡り、フラッグを取ったペアが優勝です！なお、コースはご覧の通り円を描くようにして中央へと続いています。その途中途中に設置された障害は、基本的にペアでなければ抜けられないようになっています！ペアの協力が必須な以上、ふたりの相性と友情が試されるということですね！」

鈴とセシリアはアナウンスを聞きながら、再度コースの下見をした

中央の島というのがなかなか厄介で、空に浮いているのである。……いや、もちろん強力なワイヤーで宙づりになっているだけなのだ

が、泳いで渡ること＋ショートカットは出来ないようになっており、さらにプールに落ちたらまたスタート地点に戻るようになっているなるほど、なかなかよくできている。ふたりはそう納得しながら、そしてこうも考えた

（（参加者が一般人なら――ね））

ふたりは、専用のＩＳを持つ国家代表候補生であり、それらを扱うに当たってあらゆる訓練を積んできた

おそらく、単純な格闘能力だけなら、一般男性など相手にならない

「さあ！いよいよレース開始です！位置について、よ～い……」

パァンッ！と乾いた競技用ピストルの音が響き、二十四名十二組の参加者が一斉に駆け出す

「セシリア！」

「わかっていますわ！」

開始直後、足払いを仕掛けきた横のペアをジャンプでかわし、一番目の島に着地する

一応言っておくが、このレース『妨害ＯＫ』なのである。が――しかし代表候補生に取っては、そのルールは二人にとって有利なだけだ

「さあ、いくわよ！」

「ええ！」

向かってきたペアを軽くかわし、ついでに足をひっかけて水面へと落としている
しかし、そこに問題が発生してしまう

いきなりの大立ち回りのせいか、以後の妨害はとにかく鈴とセシリアに集中した
「ああもう、うっとうしい！」

「邪魔ですわ！」

向かってくるたびに水面に落としてはいるものの、きりがないどうやら先行した組と落とされた組がグルになっているようだ
落とされては即復活し、とにかく妨害行為を仕掛けてくる

「くっ……このままじゃ置いてかれる！」

第一グループが二番目の島に渡っていることに焦りを感じている鈴は、ちらりとセシリアに目配せをする

『早速だけど、奥の手よ』
『はぁ……。どうなっても知りませんわよ』

『勝つためよ！』

『そ、そうですわよ！勝つためなら！』

ついでにプライベート・チャンネルで交信をして、鈴とセシリアはしつこい妨害ペアに向き直った

「「うりゃあああああっ！」」

がっつりと組み合った腕でラリアットを仕掛けてくる妨害ペア
なにがそうまでさせるのか、鈴とセシリアは一度ため息を漏らした
あと、風を裂くような素早い動きで一閃した

どぼーん！とプールに落ちる妨害ペア、しかしそれはもはや慣れっこのようだ
「何度でも蘇るわよ！私達は！」

水面へと浮上したふたり組
しかし、その体にはあるべきものがない

「ふっ……。人は水着無くして生きてはいけない……」

「マリー・アントワネットの言葉通り、水着がないのなら全裸でどうぞ」

「「きゃあああああっ！？」」
素早く水着のブラを奪った鈴とセシリアは、パニックに陥る妨害組を一瞥したあと手元のそれを丸めて反対側の客席へと放り投げた

観客は期待通り――というかそれ以上のアクシデントに、会場の男性陣はおおいに沸いた

「さて、邪魔者は去ったし」

「追撃しましょう」

一番目の島ではロープで繋がれた小島を一人が固定して渡り、それから向こう岸で支えてもう一人も渡るというものだったが――

「ま、時間食った分一気に行くわ」

「ええ。これ以上の差は許しませんわ」

鈴とセシリア、ふたり同時に小島へと飛び移る

ただでさえ小さな島――それも女性一人分しか支えられないはずのそれを、ふたりは大道芸もかくやという動きで渡っていく

小島一つ飛ばしで前転側転織り交ぜた鈴が軽やかに飛んでいく

そのあとを揺れを見切ったセシリアが素早くついて行く

さっきまでは水着ポロリに沸いていた会場だったが、今度はふたりの活躍に観戦が巻き起こった

「こ、これはすごい！二人は高校生ということですが、何か特別な練習でもしているのでしょうか！？」

続く第二の島も、障害そっちのけでふたりは突き進む

「ははん！余裕！」

「地雷原に比べれば何とも簡単ですわね」

そんなこんなで続く第三の島、第四の島とクリアーをしていき、ついに最後の第五の島なのだが――問題が起きた

「ここで決着をつけるわよ！」

まともに走ったのでは負けると踏んだのか、トップのペアが反転して鈴とセシリアに向かってきた

「あっはっはっ。一般人があたしたち候補生に勝てるとでも――」

「おおっと、トップの木崎・岸本ペア！ここで得意の格闘戦に持ち込むようです！」

「――はい？得意の……なんですって？」

「ご存じふたりは先のオリンピックでレスリング金メダル、柔道銀メダルの武闘派ペアです！仲がよいというのは聞いていましたが、競技が違えど息はぴったりですね！」

「え……？なに、金メダル？ていうか、体がこのふたりだけ違うんだけど！？」

マッチョ・ウーマンという単語がぴったりと合うそのペアは、気合い十分の怒号とともに鈴とセシリアに向かってきた

（まずい！こっちはさっきから全力疾走で疲れてんのに、ここでこんな筋肉バカとやりあったら――）

（さ、さすがに押し切られますわね……）

疲労からさすがに敗色が濃いと見たふたりは、思わず足を止める

それがまずかった

「もらったあああああっ！」

「くっ……！」

鈴とセシリアは後ろ跳びに距離を取るが、そこは浮島もはや逃げ道はない

「こうなったら……セシリア！」

「な、なんですの！？」

「あたしに策がある！突っ込んで！」

「は！？わたくしが前衛！？」

「そうよ！迷ってる暇はないから！」

「ああもう！」

再度距離をツメにかかってきたメダリスト・ペアに向かってセシリアは単機特攻する

（片方だけでも気を逸らせられれば！……信じましたわよ、鈴さん！）

「セシリア、そこで反転！」

「え？」

大声に呼ばれて振り向くセシリア

そして見たのは、眼前に迫る鈴の足――の裏

「は……？――ぶべっ！！」

思いっきり
思いっきり、顔面を踏まれた

「よしっ！」

セシリアを踏み台にした鈴はその身軽さで一気にゴールへ跳躍
フラッグを手に取る

「勝ったぁ！」

その後ろ、数秒前まで鈴がいた島では、踏まれてバランスを崩したセシリアがさらにメダリスト・ペアのタックルを受けて一緒に数メートル下の水面へと落ちていった

どっぼーん

高く伸びた水柱を、鈴は眩しそうに見つめる

「ありがとう、セシリア。あんたのおかげよ」

きらり、青空にセシリアの笑顔が浮かぶ。……完全に故人の扱いだった

「ふ、ふ、ふ……」

地の底から響くような絶対零度の笑い声
そして、さっきの倍ほどの水柱が立つ

「今日という今日は許しませんわ！わ、わたくしの顔を！足で！――鈴さん！」

ブルー・ティアーズを展開した水着姿のセシリアが、憤怒の表情で鈴へと向かう

「はっ、やろうっての？――甲龍！」

対する鈴もすぐさま甲龍を展開し、即応態勢へと移る

「な、なっ、なぁっ！？ふ、ふたりはまさか――ＩＳ学園の生徒なのでしょうか！この大会でまさか二機のＩＳを見られるとは思いませんでした！え、でも、あれ？ルール的にどうなんでしょう……？」

困惑と興奮の入り交じった声で、司会のお姉さんはまくし立てる

大きな身振り手振りに、またしても豊満なバストが弾んだ

「ぜらぁあっ！」

「はあぁぁっ！」

ガギンッ！

互いのブレードがぶつかり合い、火花を散らす

「ティアーズ！」

「甘いっての！」

・・・・・・・

映司Ｓｉｄｅ－

メンテが予想以上より速く終わり、今は鈴とセシリアのとこへ向かっている

ウォーターワールドに着くと大量のお客がゲート出口から走って出てきた

「あン？一体何事だ？」

近くにいた係員にとりあえず話を聞いてみた

「あの、一体何があったんですか？」

「じ、実は中で二機のＩＳが戦闘を始めて……」

「二機のＩＳ……まさか！？」

「ま、待ってください。危ないですよ～」

係員が止めようとしたが、それを無視して中に向かっていった

ある程度走った後、例のふたり－鈴とセシリア－を見つけた

ふたりは手を伸ばせば届くほどの接近距離で、互いの武装をフルに展開する
どちらも退くことなく、そして――――

「どあほうが。はぁ～変身」

【シャチ！ウナギ！バッタ！】

「これで頭を冷やせ」

シャウバとなり強力な水圧の水流をふたりに放つ

ザバァーン！！
見事にふたりに水流がかかった

「「な、なにすんのよ（するんですか）！！って映司（さん）！？……」」

いきなりの乱入でふたりともこちらに怒鳴ってきたが、俺だとわかるとは驚愕し、そして黙ってしまった

「とりあえずお前ら猛省しろやぁぁぁぁ！！」

「「きゃあああああああああっ！！？？」」

ウナギアームに付随してあるウナギウィップでふたりを拘束し、バッタレッグの跳躍力でふたりを持ちながらある程度の高さまで跳び、ふたりをプールへと投げた

「はぁ～、どうすんだよこれ……」

映司が見たものは、半壊しているプールと、一部割れている天窓があった

三十八話（後書き）

原作を参考にした部分とオリジナルのとこのクオリティーの差にはもうなんも言えないです

三十九話

「とにかく！こういったことは！金輪際！しないでくださいね！」

「「はい……」」

司会のお姉さんに事務室でこってりと絞られて、私服に着替えた鈴とセシリアはしゅんと小さくなる

映司は椅子に座りながらその様子を黙って見ている

「彼のおかげでなんとかこの程度で済んだものの、もし怪我人が出たらどうするつもりだったんですか！！」

映司がふたりの仲裁に入ったおかげでとりあえず物損被害だけで済んだ

「はぁ、まったく……！」

「あ、あのぅ……」

「何か！？」

「い、いえ、あの、優勝はどうなったのかなと思いまして……」

「……景品、もらえると思ってるの？」

ギラリ、殺し屋の目で睨むお姉さん

「「す、すみません……何でもありません……」」

鈴とセシリアがＩＳで大暴れしたために、当然、大会はメチャクチ

ャとなって途中で中止

であるから、優勝者などいるわけがない

最後の望みとばかりに聞いたふたりだっただけに、改めてそう通告されるのはかなりきつかった

ずーんと、暗い闇だけが目の前に広がっている

「とにかく、学園にはこのことは報告させてもらいますから！！」

「「はぁ……」」

「ほら、さっさと帰んなさい」

「「失礼しました……」」

「本当にすいませんでした」

立ち去ろうとした映司はもう一度司会のお姉さんに謝り退室した

・・・・・

映司Ｓｉｄｅ－

「「……」」

さっきからふたりとも黙ったままで非常に気まずい

「その～、ふたりとも本当にごめんな。ふたりの約束を破りさえしなければこんなことにはならなかったのに……」

（今回は俺にかなり非があるからな～）

「「……」」

無言でこちらを見てくるふたり

「ふたりともどっか行きたいとこあるか？何か奢るからそれで少しは元気を出してくれないか？」

「「……」」

鈴とセシリアは数秒考えたあと、ぼそりとつぶやいた

「……@クルーズ」

「……期間限定の一番高いパフェ」

「あいよ。そんくらい構わないが、その代わり元気出してくれよ？」

価格にしてひとつ二五〇〇円

普通なら無理だと言ってしまうところだが、こんくらいはしないとふたりに悪いので了承したのだ

そうと決まれば女子組の切り替えは早い

さっかまでの落ち込みはどこかへ捨てて、喜色満面の笑みで映司の

腕を取る

「さ、行きましょうか」

「あ！セシリア、何腕組んでんのよ。映司！あたしとも組みなさいよ！」

「はぁ～、ていうかさ――――」

「「歩きにくい」」

鈴とセシリアの声がかぶる

「でしょ？」

「ですわね」

「……はぁ～」

ふたりの妙に息のあったコンビネーションにもう一度ため息を漏らした映司は、歩きにくいのを我慢しながら駅前のファミレス・@クルーズへと向かって歩き出した

「ま、今回はこのくらいで勘弁してあげるわ」

「でも、次回はありませんわよ？」

「はいはい……」

夕暮れの中、三人の影が長く長く伸びている

それはまだ暑さの衰えない、八月のある日の出来事だった

四十話（前書き）

コンバットの松岡シュウゾウ

もう一度見たいな～

四十話

「買い物？」

「うん、そう」

寮の食堂、そこで早めの朝食をとりながらラウラとシャルロットは話していた
ふたりの他には朝練をしている部活動の面々がちらほらいる程度で、まったく混んではいない

シャルロットはフォークはの先端にマカロニをするっと通して食べる

「む。なんだそれは？」

「なんだって……マカロニ？」

「それはわかっている。どうしてフォークに通したのかを聞きたいのだ。刺すではなく、なぜ通したのかを」

ラウラの眼差しは真剣そのもので、シャルロットはつい雰囲気に飲まれそうになってマカロニを飲み込むのがワンテンポ遅れた

「なぜって言われても……なんとなく？」

「ふむ、なんとなく……」

「ラウラもやってみたら？結構楽しいよ？」

言ってから、ハッと気がつく

（う、僕って子供っぽいかな……？ラウラのことだし、もしかして――）

『ほう、確かに面白いな』

『そ、そう？よかった』

『こんなもので面白いと言える、お前の頭がな』

……。

（い、いや！そんなことはないよ、うん！ラウラはきっとそんなこと言わないよ！）

「シャルロット」

――びくっ！

「これは、確かに面白いな。ふむ……せっかくだ。全部の先端に通してみよう」

言ってすぐ、他のマカロニもいじりはじめるラウラ

どうも、本当に面白がっているらしい

その反応にシャルロットはホッとした

「む、く、これは思ったよりも難しいな……この」

なかなか最後のマカロニが通らず、悪戦苦闘するラウラ
なんとなくシャルロットは昔飼っていた猫を思い出して、しばし見とれた
（あの子って変なところで不器用だったなぁ。毛糸、ずっと追いかけたりして、最後は玉じゃなくなっちゃって、不思議な顔してたっけ）
「できた」
「おー」
マカロニを先端に通したフォークを軽く持ち上げるラウラと、それに拍手をするシャルロット
食堂にいた他の女子は、何事かと目をしばたたかせていた
「それで、買い物には何時に行くんだ？」
「あ、うん。十時くらいに出ようかなって思うんだけど、どうかな？一時間くらい街を見て、どこか良さそうなお店でランチにしようよ」
「そうか。せっかくだし嫁も誘っていこう。うむ、私はいい亭主になるな」
「あ、あはは……。そうだね……」
・　・　・

・・・

「部屋には不在。電話にも出ない。あいつはどこに行っているんだ。――浮気か？」

「いや、まあ、いないんじゃあしょうがないよ」

「ＩＳのプライベート・チャネルでなら繋がるだろう。よし」

「わあ！よし、じゃないよ！ラウラ、ＩＳの機能は一部だけでも勝手に使うとまずいんだよ？」

「知るものか。嫁の所在の方が大事だ」

「……織斑先生に怒られるよ」

ぴしり、ラウラの動きが止まる

「そ、そうだな。プライベートな時間も、時には大切だろう。よし、シャルロット。ふたりで出かけよう」

「うん、行こ」

そしてふたりで学園を出る準備のため、あったん部屋へと戻る

もちろん、ふたりとも私服――のはずだったのだが

「あの、ラウラ？その軍服はなに？」

「うむ、これは正式には公用の服だが、いかんせん私には私服がない」

「……」

さすがに頭を抱えるシャルロット

そういえば、同じ部屋でも普通の女の子の格好をしているところを見たことがなかった

「ラウラ、制服でいいよ……。その服って勝手に着たら本国の人に怒られるでしょ？」

「そう言われればそうだな。わかった、制服に着替えよう」

それから女子とも思えない早さでラウラが着替えを終え、部屋を出たのは十五分のことだった

・　・　・　・　・

「ふう、疲れたな」

「まさか最初のお店であんなに時間を使うとは思わなかったね」

ちょうど時間は十二時を過ぎたところで、ふたりはラウラの服を一通り買った後、オープンテラスのカフェでランチをとっていた

服を買う際ちょっとした騒ぎになり、ふたりは囲まれてしまったがここではスルーで

「しかしまあ、いい買い物はできたな」

「せっかくだからそのまま着てればよかったのに」

「い、いや、その、なんだ。汚れては困る」

「ふうん？あ、もしかして、お披露目は映司に取っておきたいとか？」

「なっ！？ち、違う！だ、だだ、断じて違うぞ」

顔を赤らめて取り乱すラウラの姿に、シャルロットは的を射たことを確信しながらもあえて知らないフリをする

「そっか。変なこと言ってごめんね」

「ま、ま、まったくだ」

「ラウラ」

「な、なんだ？」

「フォークとスプーンが逆」

「っ～～～～！！」

シャルロットによって気がついたラウラは、それこそ耳まで真っ赤になって口に運んでいたスプーンを離した

「ご、午後はどうする？」

「生活雑貨を見て回ろうよ。僕は腕時計見に行きたいなぁ。日本製の時計ってちょっと憧れだったし」

「腕時計が欲しいのか？」

「うん、せっかくだからね。ラウラはそういうのってないの？日本製の欲しいもの」

少し考えてから、ラウラはきっぱりと言う

「日本刀だな」

「……女の子的なものは？」

「ないな」

即答

わかっていたとはいえ、にべもない返事にシャルロットはがくっと首を落とした

ふと、シャルロットが隣のテーブルの女性に気がつく

「……どうすればいいのよ、まったく……」

年の頃は二十代後半で、かっちりとしたスーツを着ている

何か悩み事があるらしく、注文したであろうペペロンチーノは冷め切ってしまっている

「はぁ……」

深々と漏らすため息には、深淵の色が見て取れた

「ねえ、ラウラ」

「お節介はほどほどにな」

今度は逆にラウラがシャルロットの言葉を先回りする

そんな反応にびっくりするシャルロットだったが、すぐに嬉しそうな顔をして続けた

「僕のこと、ちゃんとわかってくれてるんだね」

「た、たまたまだ／／／……で、どうしたいんだ？」

「うーん、とりあえず話だけでも聞いてみようかな」

そう言って、シャルロットは席を立つなり女性に声をかけた

「あの、どうかされましたか？」

「え？――――！？」

ふたりを見るなり、ガタンッ！とイスを倒す勢いで女性が立ち上がる

そしてそのまま、シャルロットの手を握った

「あ、あなたたち！」

「は、はい？」

「バイトしない！？」

「「え？」」

・　・　・　・　・

「というわけでね、いきなりふたり辞めちゃったのよ。辞めたっていうか、駆け落ちしたんだけどね。はは……」

「はぁ」

「ふむ」

「でもね、今日は超重要な日なのよ！本社から視察の人間も来るし、だからお願い！あなたたちふたりに今日だけアルバイトをしてほしいの！」

女性のお店というのが、これまた特異な喫茶店だった

女は使用人の格好、男は執事の格好で接客するという――いわゆるメイド（&ｍｐ；執事）喫茶である

「それはいいんですが……」

着替え終わったシャルロットはやや控えめに訊く

「なぜ僕は執事の格好なんでしょうか……？」

「だって、ほら！似合うもの！そこいらの男なんかより、ずっとキレイで格好いいもの！」

「そうですか……」

誉められたというのに、あまり嬉しくなさそうにシャルロットはため息を漏らす

（僕もメイド服がよかったなぁ……。そっちを着てるラウラ、すっごく可愛いし……）

少し残念な気持ちになりながら、そっちを着ている執事服を見下ろす

（う～、僕ってやっぱりこういう方向性なのかなぁ……）

やや落ち込み気味のシャルロットに気づいてか、自分もメイド服に着替えた女店長はがしっとその手を掴んだ

「大丈夫、すっごく似合ってるから！」

「そ、そうですか。あはは……」

シャルロットはやや引きつり気味の顔で、それでもどうにか社交辞令の笑みを返す

（それが問題なんだけどなぁ……）

複雑な乙女心を持て余しながら、シャルロットは改めてメイド服姿のラウラを眺めた

細身でありながら強靭さを秘めた体躯に、飾りっ気の多いメイド服

それらを統一するようにしゅっと伸びた銀髪

そしてミステリアスな雰囲気を加速させる眼帯

（う～、羨ましいなぁ。ラウラってなんでこんなに可愛いんだろ…）

改めて、その魅力を再認識してしまう

きっとラウラは男装をしても『カッコイイ女の子』として人の目に映るんだろうなぁと、シャルロットは思う

対して自分は、男装をすれば『可愛い顔立ちの男の子』なのだから

そう考えるとまた自然とため息が漏れた

・・・・・

「デュノア君、四番テーブルに紅茶とコーヒーお願い」

「わかりました」

カウンターから飲み物を受け取って、@マークのトレーへと乗せる
初めてのアルバイトだというのに、その立ち振舞いには物怖じした様子はなく堂々としていて、けれど嫌味ではない
そんなシャルロットの姿に、女性客のほとんどが見入っていた

（こんな姿もし映司に見られたら……でもこんなところまでは来ないよね）

仕事をこなしつつ、そう思ったシャルロット
すると来客を知らせるベルが鳴った

「いらっしゃいませ！@クルーズへようこそ」

シャルロットが向かうと
「あっ」

「あら？」

「はぁ？」

鈴とセシリア、そして最もこの姿を見られたくなかった人物の映司が入り口にいた

四十一話（前書き）

遅れてしまいすいませんでした

文化祭やらレポートやらでなかなか執筆出来ず、こんなにかかってしまいました

久しぶりに執筆したので自信がないですがどうぞ

四十一話

「……セシリアよ、あれは結局シャルロットだよな」

「え、ええ。わたくしたちを見た瞬間にどっか行ってしまったし、たぶんそうではないかと……」

シャルロット？らしき執事は俺らを見たら数秒固まった後どこかへ行ってしまった

代わりに違うメイドさんが来て席まで案内してもらった

「だけど映司。なんでチョコパフェにしたの？」

「さすがにそのバカ高いパフェを三つなんて無理だっつうの。それに基本チョコ関係はなんでも好きだからいいの」

「ふぅ～ん。あっ！！映司こっちのも食べてみる？」

「いいのか鈴？」

「いいの、いいの～♪はい、あーん」

「なぁ！？鈴さん何してるんですか！！」

「別に映司に食べさせようとしてるだけでしょ」

「鈴さんかっｔ「はぁ～。それなら二人で一緒に食べさせてあげればいいでしょ？」そ、それなら構いませんわ／／／」

「はぁ～、なんでもいいからさっさとしてくれよ」

・・・・・・・

シャルロットＳｉｄｅ－

「う～～／／／どうしよう映司達絶対気づいたよね」

映司達とばったり遭遇してしまった後シャルロットはすぐさま休憩室に飛び込み、隠れながら映司達の様子を見ている

「？シャルロットどうしたんだ？」

そこへラウラがやってきた

「あっ、ラウラ。実は……」

困りながらシャルロットはチラッと映司達を見てしまい、ラウラはそれに気づきそっちを見る

「なんだ私の嫁ではないか」

そう言いラウラは映司達のとこへ向かおうとした

「ちょ、ちょっと。ってどうしたのラウラ？」

シャルロットはラウラを
引き止めようとしたら、急にラウラは止まってしまった

疑問に思ったシャルロットが尋ねたら、ラウラは黙って映司達を指差した

見てみると映司にパフェを食べさせようとしているセシリアと鈴がいた

「……ふふ」

その様子を見たシャルロットはうつむいたと思えば笑いだし

「ねぇ、ラウラ。あそこのお客様のところに行かなきゃね♪」

「ふむ、そうだな」

このとき二人から黒い禍々しいオーラが滲み出ていた

・
・　・　・
・

映司Ｓｉｄｅ－

セシリアと鈴がパフェをこっちにやろうとしていると

「お嬢様そういうことなら、こちらでやりますよ」

とシャルロットとラウラが近づいてきた

「ん？なんだラウラも働いていたのかい。てかメイド服よく似合ってるな」

「う、うむ／／／さすが私の嫁だ。さりげなく亭主を誉めるとは、だいぶ嫁も板についてきたな。私は誇らしいぞ」

そしてラウラはセシリアのとこ、シャルロットは鈴のとこに行き

「私は今非常に気分がいい。食べさせてやろう」

「では、お嬢様口をお開けください」

「ちょ、ちょっとあんた達何を――」

「わたくしたちは映司さんに――」

二人を無視してどんどんパフェを食べさせるシャルロットとラウラ

そしてついにセシリアと鈴はパフェを完食してしまった

「「うーーー」」

あまりの出来事に落ち込むセシリア達

するとシャルロット達は俺のとこに来て

「お待たせしました旦那さま。では」

「「はい、あーん」」

スプーンを俺に差し出してくる

「いやいや俺はいい「「あーーん!!!」」……はぁ～」

さっきより強い口調でスプーンを差し出してくる

仕方ないので二人が差し出したパフェをしぶしぶ食べた

・・・・・・

俺が完食するとまたシャルロット達は何処かへ行ってしまった

『♪～♪～』

するといきなり電話がかかってきて見てみると山田先生からだったの

「はい。え？セシリア達ですか？……はい、わかりました。二人に伝えておきます。」

とりあえず電話をきり

「セシリア、鈴、山田先生がお呼びだ。すぐさま来いだって」

「「……」」

「とりあえず先向かってれば？俺も会計がすんだら向かうからさ」

「「……お願い（しますわ）」」

そう言い、とぼとぼと店を出ていったセシリア達

「あれ？映司セシリア達は？」

するとシャルロットとラウラが俺の席に来た

「ああ、少し訳ありでね。というか二人とも仕事しなくてもいいのかよ？」

「うん、今は休憩時間だからね」

「そういえば、映司よ。なんで朝電話したのに出なかったのだ？」

「あー、実はな……」

今日一日の出来事を全て話した

「へぇ～、それは大変だったね」

「まぁ、これからセシリア達はもっと大変な目に合うがな。という

より俺は二人がここで働いていることに驚きなんだが」

「それがね……」

シャルロット達の今日の出来事を聞いた

「ふぅ～ん。じゃあラウラに電話したとき出なかったのはちょうど仕事中だったからか」

「す、すまない……」

落ち込むラウラ

「あー、気にすんなっｔ「全員、動くんじゃねえ！」……はぁ～」

急にドアを破らんばかりの勢いで雪崩れ込んできた男が三人、怒号を発する

一瞬、何が起こったのか理解できなかった店内の全員だったが次の瞬間に発せられた銃声で絹を裂くような悲鳴が上がった

「きゃあああっ！？」

「騒ぐんじゃねえ！静かにしろ！」

男達の格好といえばジャンパーに、ジーパン、そして顔には覆面、手には銃

背中のバックからは何枚か紙幣が飛び出していた

（なんでこう今日は面倒事が続くんだよ……）

四十一話（後書き）

オーズからのフォーゼだったので今週のフォーゼでエレキスイッチが盗まれてしまうんではないかとひやひやしながらそう思いました

四十二話

「あー、犯人一味に告ぐ。君たちはすでに包囲されている。大人しく投降しなさい。繰り返す――」

さすがは駅前の一等地

警察機関の動きはこの上なく迅速で窓から見える店外ではパトカーによる道路封鎖とライオットシールドを構えた対銃撃装備の警官たちが包囲網を作っていた

「……なんか」

「……警察の対応も」

「……古……」

おそらく十代には通じないであろう妙なクロニクルを覚えて、人質という立場にもかかわらず数名の客がそうつぶやいた

「ど、どうしましょう兄貴！このままじゃ、俺たち全員――」

「うろたえるんじゃねえっ！焦ることはねえ。こっちには人質がいるんだ。強引な真似はできねえさ」

リーダー格とおぼしき三人の中でひときわ体格のいい男がそう告げると、逃げ腰だった他の二人も自信を取り戻す

「へ、へへ、そうですよね。俺たちには高い金払って手にいれたコイツがあるし」

ジャキッ！と硬い金属音を響かせてショットガンのポンプアクションを行う
そして次の瞬間、威嚇射撃を天井に向けて行った

「きゃあああっ！！」

蛍光灯が破裂し、パニックになった女性客が耳をつんざくような悲鳴を上げる
それを今度はリーダーの男がハンドガンを撃って黙らせた

「大人しくしてな！俺たちの言うことを聞けば殺しはしねえよ。わかったか？」
女性は顔面蒼白になって何度もうなずくと、声が漏れないようにきつく口をつぐむ
女性は顔面蒼白になって何度もうなずくと声が漏れないようにきつく口をつぐむ
「おい、聞こえるか警官ども！人質を安全に解放したかったら車を用意しろ！もちろん、追跡車発信器なんかつけるんじゃねえぞ！」
威勢良くそう言って、駄賃だとばかりに警官隊に向かって発砲する
それに周囲の野次馬がパニックを起こした

「へへ、やつら大騒ぎしていますよ」

「平和な国ほど犯罪はしやすいって話、本当ッスね！」
「まったくだ」

そんな中、店内で強盗以外にただ一人立っていたのはラウラだった
しかも銀髪に眼帯、目が覚めるような美少女とくれば誰の目であろ

うと止まってしまう

「なんだ、お前。大人しくしてろっていうのが聞こえなかったのか？」

案の定、すぐにリーダーがやってくる
その手に握ったままの銃を、ラウラは一瞬だけ見て視線から外した

「おい、聞こえないのか！？それとも日本語が通じないのか！？」

「まあまあ兄貴、いいじゃないッスか！時間はたっぷりあるんスから、この子に接客してもらいましょうよ！」

「あぁ？何言ってるんだ、お前」

「だって、ホラ！すっげー可愛いッスよ！」

「お、俺も賛成っ。メイド喫茶って入ったことなくて……」

ふたり揃ってテヘヘと嬉し恥ずかしな表情を浮かべる手下にリーダーは眉間にしわを寄せながらソファにどかっと腰を下ろす

「ふん。まあいい。ちょうど喉が渇いていたところだ。おい、メニューを持ってこい」

ラウラはうなずくでもなく男たちを一瞥すると、カウンターの中にすたすたと歩いていく

そして、持ってきたのは氷が満載された水だった

「……なんだ、これは？」

「水だ」

「いや、あの、メニューを欲しいんスけど……」

「黙れ。飲め。――――飲めるものならな」

ラウラは突然トレーをひっくり返す
当然、氷水が宙に舞うがそれらを回転するような動作で掴み――――
弾いた

「いってええっ！？な、なっ、何しやがっ――――」

氷の指弾

それをトリガーから離れていた人差し指に突然の出来事に反応できずにいた瞼に、眉間に、喉に、一瞬で当てる

そして犯人の怒号より早く、男の一人の懐へと膝蹴りを叩き込んだ

「ッざけやがって！このガキ！」

いち早く痛みから復活したリーダーが、早速ハンドガンをぶっ放す

しかしラウラには届かない
店内のあらゆるものを盾にして、ラウラはその細身からは予想もつかないスピードで駆けていく

「あ、兄貴っ!?こ、こいつッ――――」

「うろたえるな!ガキ一人、すぐに片付けて――――」

「――――一人じゃないんだよねぇ。残念ながら」

リーダーの、背後に迫っていたのは見目麗しい執事服の美少年――――もとい、美少女のシャルロットだった

「なっ!?このっ――――」

「あ、執事服でよかったかな。うん、思いっきり足上げても平気だし、なにより映司がいるし……／／／」

顔を赤らめながらシャルロットはリーダーの拳銃を手ごと蹴り上げる

そのままの勢いでショットガンの男の肩に、今度はかかと落としを叩き込んで無力化する

ＩＳの専用機持ちともなれば、どの国も『ありとあらゆる事態』を想定した訓練を課している

それが候補生であっても変わりはない

ＩＳが展開不能な状態にあっても、状況を打破できるように鍛えられているのだ

無論、軍人であるラウラと非軍人のシャルロットでは、それぞれに持っている技能・対応能力・肉体能力に開きはある

しかし、この程度の状況ならば、特に問題はない

「目標2、制圧完了。――――ラウラ、そっちは?」

「問題ない。目標3、制圧完了」

最後の目標1ことリーダーを――――と思ったところで、男はさっき蹴られて指が折れたのとは逆の左手に、ナイフを握り立ち上がっていた

「ふっ、ふざけるなぁっ！お、俺がっ、こんなガキどもにっ……！」

シャルロットに向かっていたが

「なっ！」

急に椅子が滑りながらリーダーの足下に来て、リーダーは突然のことに止まることは出来ずそのまま勢いよく躓いた

転んだと同時にナイフも手元から離れてしまった

「とりあえずこれは没収だなぁ」

それを拾った人物こそ、リーダーを転ばせるために椅子を蹴った張本人である映司であった

「はい、終わり」

そのまま映司は立ち上がろうとしたところを全力で殴り、　男は倒れた

「さすが私の嫁だ。あれほど手際よく沈めるとは、我が部隊に欲しいくらいだ」
「んな大したことしてねぇ～よ」

そう映司はまずラウラが行動開始した後、店内にいる人達を安全なとこに移動させラウラの邪魔をしないようにして

そしてリーダーを倒したのだ

「おつかれ映司」

「ああ、シャルロットもおつかれさん」

すると店内の『民間人』こと客とスタックは、のろのろと頭を上げはじめる

「お、終わった……？」

「助かったの、私たち……」

「い、一体何が……」

危機を脱したことはわかるものの、まだ状況を正しく把握できていない人々は、何度もまばたきを繰り返してラウラとシャルロットと映司の姿を呆然と眺めている

同じくまだはっきりとした意識が戻らない店長は、『銀髪美少女メイドと金髪美少年（女）執事＋αが銀行強盗を撃退しました』って本社に報告したら信じるかしら……？と変にずれたことを考え

ていた

「お、俺たち助かったんだ！」

「やった！あ、ありがとう！メイドさんに執事さんに誰だかわからないけどそこのあんた、ありがとう！」

助かった実感が今になってはっきりと自覚できたのか、突然店内はわっと騒がしくなる
その様子を見て、状況に決定的な変化があったのかと警官隊も詰めかけてくる

「ふむ、日本の警察は優秀だな」

「ラウラ、まずいって代表候補生で専用機持ちなんだから、公になるのは避けないと！」

「それもそうだな。このあたりで失敬するとしよう」
案の定、警官隊の後ろには交通規制もなんのその、立ち入り禁止のロープを乗り越えたマスコミ関係者が大勢見えた

――しかし、事態は再び一変する

「捕まってムショ暮らしになるくらならいっそ全部吹き飛ばしてやらあっ！」

完全に意識を失っていたと思っていたリーダーは、決まりが浅かっ

たのかそう叫んで立ち上がるなり、革ジャンを左右に広げる
思わずそう声を漏らす亮
そこにあったのは、軽く四〇メートルは吹き飛ばせそうな、プラスチック爆弾の腹巻きだった
起爆装置は、もちろん手の中にある

「わー……」

「最後まで古～……」

そんな言葉を漏らしたのは誰だったか、すぐさま店内は先刻以上のパニックに飲み込まれる
しかし――

「めんどくさいやつだな。ラウラ～何か手はあるか？」
「無論だ。ただし今度一緒に買い物に行ってもらうぞ。もちろん二人っきりでだがな」

「ラ～ウ～ラ～！！！」

「貴様ら！なめてんのか！！」

「黙れ」

ふわっと、ラウラがスカートをなびかせるように右足を上げ、その奥にちらりと見えた白い布地に男の視線と意識が奪われた
そしてその一瞬の隙に、ラウラは足を振り下ろす

その踵はテーブルを勢いよく傾け、そこにあった拳銃が宙を舞い、

それをシャルロットがラウラの背中を転がるようにして受け取る
そして――――

ダダダダダンッ！

「「チェック・メイト」」

高速五連射×２の弾丸は、的確に起爆装置と爆薬の信管、そして導線『だけ』を撃ち抜いていた

「まだやる？」

「次はその腕を吹き飛ばす」

ジャキッ！と二丁の拳銃を突きつけられ、さっきまでの威厳も高圧もなく男は震える声で謝った

「す、すみっ、すみませんっ！も、もうしまっ、しませんっ。い、命ばかりはお助けをっ……」

そんな敗北宣言を最後まで聞くことなくラウラとシャルロットのふたりは颯爽と立ち去った
さながらそれは、黒き一陣の風のように

そのあとを映司はこっそりついていった

四十三話（前書き）

時間がないのに零式を衝動買いするなんて自分のバカモノ（ｏдＯ；）

四十三話

「日もだいぶ沈んできたな」

強盗事件から数十分後、ふたりはまだ買い物が残っていたみたいだがさすがに時間が時間だからまた次回となった

その時はなぜか俺も一緒に行かなければならないみたいだが

「あ、そうだ。向こうの公園に行ってみようよ」

「公園？」

「うん。城址公園。元はお城なんだって」

「ほう。それは興味深いな。日本の城は守りにやすく攻めに難いと聞く。城跡とはいえ、一見の価値はありそうだ」

「また今度ゆっくりね。とりあえず公園に着いたからクレープ屋さん探そうよ」

「うん？クレープ屋？なぜだ」

「えっと、休憩時間にお店の人に聞いたんだけど、ここの公園のクレープ屋さんでミックスベリーを食べると幸せになれるっておまじないがあるんだって」

「『オマジナイ』……というのは、日本のオカルトか？」

「えーっと、ジンクスだよ」

「ああ、験担ぎか」

「間違ってはないが、他になかったんかい……」

ともあれ、シャルロットは早速お店を探す

しかし、探すまでもなくすぐに見つかった

おそらくは部活の帰りやお出かけの寄り道なのだろう、こんな時間帯でも女子高生が局所的に多くいる一角にそのお店はあった

「じゃ、早速頼んでみようよ」

ラウラと俺の手を引いて、シャルロットがバン車を改造した移動型店舗であるクレープ屋に入る

「すみわせーん、クレープ三つください。ミックスベリーで」

そう言うと、お店の主であろう男性が、人懐っこい顔で頭を下げる

「あぁー、ごめんなさい。今日、ミックスベリーは終わちゃったんですよ」

「あ、そうなんですか。残念……。ラウラ、映司別のにする？」

「ん？イチゴとブドウ……嫁は何がいいか？」

「……チョコで」

「あと、チョコを」

三つだ、と指を三本立てて付け加え、ついでに料金も全額払ってしまう

「あ、ラウラそのくらい俺が払ったのに」

「そんなことか。気にするな嫁よ」

機嫌良さそうにそう言って、ラウラは出来たてのクレープを受け取る

「シャルロットよ、どっちがいい？」

「うーん。じゃあイチゴ」

3人は少しお店から離れたベンチに並んでかけると、クレープをはむっとかじった

「んむ、んっ。これ、おいしいね！」

「そうだな。クレープの実物を食べるのは初めてだが、うまいと思うぞ」

「……」

あまりのうまさに思わず黙々とクレープを食べる映司であった

「おいしー。せっかくだから、また来ようよ。次はみんなも誘ってさ」

「そうか。では私達は夫婦ふたりっきりで来るとしよう」

「そ、そういうのを抜け駆けって言うの！もうっ」

「……週一で来てみようかな」

密かにそう考えてしまった映司であった

・　・　・　・　・

「シャルロット」

「ん？なに、ラウ――」

ぺろっ。――と、ラウラがシャルロットの唇を舐めた

「なっ、なぁっ、なななっ／／／／」

「ソースがついていた」

「だ、だだっ、だだだからって、え、えぇぇ！？」

「垂れ落ちそうだったから」

「そ、そそそ、それなら言って――」

「言うより早いだろ」

本当に他意はないようで、ラウラはシャルロットが何を騒いでいる

のかわからず小首をかしげる

「おっと」

ぺわり、と今度は自分の手の甲に垂れたソースを舐める

それはちょうど毛繕いをしている猫そっくりだった

「っ？？？？？！！」

シャルロットはといえば、ラウラの突飛な行動にまだ胸の鼓動が収まらない

同姓が好きだとかそういう問題ではなく、こうまで美しい同世代の少女に密着されれば、誰だって心臓の一つや二つ跳ね上がる

「そう怒るな。ほら、私のクレープを一口やる」

「い、いただきます」

「ああ、そういえばあのクレープ屋だがな、ミックスベリーはそもそもないぞ」

「え？」

「メニューになかっただろう。それに、厨房にもそれらしい色のソースは見当たらなかった」

「そ、そうなの？よく見てるね」

「当然だ。あれがもしテロリストの偽装だったらどうする。あの距

離でグレネードが起爆してみろ。ＩＳを急速展開しても命に関わる」

「……そういう観点で見てたんだね」

もしかして噂を気にして！？

ラウラもやっぱり女の子なんだね！……というわけではなかったようで、シャルロットはがくっと肩を落とした

「だが、ミックスベリーは食べられただろう？」

「？」

「このクレープは何味だ？」

「何って、ブドウ……だよね？」

「ようはシャルロットが食べたストロベリーとラウラが食べたブドウ、まぁこの場合ブルーベリーだが、この二つを食べたらミックスベリーを食べたことにもなるだろ」

今まで黙って食べていた映司がわかっていないシャルロットの代わりに答えた

「ああっ！」

「ご名答。流石わが嫁だ」

楽しそうにラウラはまた一口クレープをかじる

「――って、ラウラ！ブルーベリーはブドウじゃないよ！」

「ブドウみたいなものだろう？それに、あそこでブルーベリーと言えばシャルロットがすぐに気づいてつまらんしな」

「そっかぁ……。『いつも売り切れのミックスベリー』って、そういうおまじないんだったんだ」

（そ、そっか。つまり、そういうことかぁ……。そ、それは確かに、彼氏とミックスベリーを食べたら、幸せだよね……あっ！？）

「ねぇ、映司」

「ん？」

「僕達のクレープ食べてみない？」

「……はいっ？」

「うむ、それはいいな。まず私から食べさせてやろう」

「ラウラ！今回は僕から食べさせてあげるんだよ！！」

「はぁ～」

二人の言い争いに溜め息しか出ない映司であった

四十四話（前書き）

にゃんこいが連載再開だと！！！！！！！！

四十四話

「……あっつ」
あまりの夏の暑さについ目覚めてしまった映司
映司は今自分の家に帰宅している
ふと携帯で時間を確認すると十時頃だった
とりあえずクーラーをつけて、二度寝をしようとするところに
ピンポーン
チャイム音がした
ちなみに今日は両親共々親友の葬式らしくいない
よって今家にいるのは映司だけとなっている
「はいはいっと」
そしてドアを開けるとシャルがいた
「ん、シャルか？どうした？」
「あ、あっ、あのっ！ほ、本日はお日柄も良くっ――じゃなくて！」

「ん？」

「え、えっと、ええっと……」

「き……」

「？」

「来ちゃった♪」

えへ、と笑みを添えてそう言った

「いきなりだな……。まぁいいか、上がれよ。何もないけどな」

「う、うん？上がっていいの！？」

「いや、ここで帰れなんて言えるわけないだろ。あっ、この後にでも予定があるのか？」

「う、ううんっ！ない！全然ッ！まったく、微塵もないよ！」

突然の予定なし猛アピールに押され、映司は若干たじろく

そんな映司の反応に気づいて、シャルはハッとすると顔を赤くしてうつむいた

「な、ない……です」

「気にすんなって。とりあえず入れよ」

「う、うん」

とりあえずシャルをクーラーがついている自分の部屋に連れていった

「まったく、今日も暑いな。とりあえず適当に座って待ってて、飲み物出してくる」

「う、うんありがとう」

そう言って映司は一階に降りていった

シャルロットＳｉｄｅ－

言われるままに座布団代わりのクッションに座るシャルロットは、それとなく部屋の中を見渡す

映司の部屋は小さめのテーブル、本棚、テレビ、ベッドコンポにＣＤラック、ゲーム機などがあり、それらがきちんとした配置に置いてある

掃除もまめにしたりしているので綺麗な部屋となっている

（すごいなぁ、映司は家事が得意って、本当なんだ）

フランスで通っていた小学校の時の男子を思い出しても、そんなタイプはいなかったように思う

そんな変わっているところも、正直好きなシャルロットだった

（映司っていい旦那さんになりそうだよね。……だ、旦那さんかぁ／／／）

なんとなく思った言葉を、ふと反芻して自分が結婚する未来を思い描いてしまう
わずかに赤くなった頬を押さえながら、つい表情が緩んでしまった

「はい、麦茶」

「そんな冷えてなかったから一応氷入れといたよ」

「う、うんっ。ありがとうっ」

突然現実に呼び出されたシャルロットは、映司が目の前にかけたことに驚きながらニヤけた顔を隠すように早速お茶を飲む

（え、映司とふたりきり、映司とふたりきり……）

ドキドキと心臓の鼓動は加速度的にその早さを増していく

（な、何か、何か話さないと……。えっと、ええっと……）

ピンポーン

「ん？誰だ？悪いちょっと出てくる」

「う、うん」

映司が廊下に消えてから、シャルロットは深く息を吐いた

そしてひとまず落ち着くと、一つ疑問がわいてきた

（そういえば、映司の趣味ってなんなのかな？後で訊いてみよっと）

・・・・・・

映司Ｓｉｄｅ－

「はいはい、どなたですかって……おぉ、セシリアじゃん」

目の前にはセシリアがいた

「ど、どうも。ご機嫌いかがかしら、映司さん。ちょうど近くを通りかかったので、少し様子を見に来ましたの」

「そかそか。じゃあ上がっていく？」

「ええ、はい！ぜひ！お邪魔しますわ」

「いらっしゃ～い」

セシリアを部屋まで案内して

「シャル、セシリアも来たぞ」

「「え？」」

ばったり、シャルロットと鉢合わせをするセシリア

両者とも、お互いに状況がよく飲み込めずにいた

とりあえずセシリアを座らせ、コップと麦茶の入った容器を持ってきてセシリアに渡した

「ほい。セシリアも麦茶も大丈夫だろ？」

「え、ええ。大丈夫ですわ」

「それはよかったよ」

（しかしさっきからセシリアは俺の部屋をキョロキョロ見回してるが、そんなに俺の部屋は珍しいのか？？）

疑問に思いつつも、三人で軽く雑談していると

ピンポーン

「またかよ……。悪い少し待ってて」

二人を部屋に残して、玄関に向かいドアを開けると

「……」

「「映司（嫁よ）遊びに来たわよ（ぞ）！！」」

鈴とラウラ

「よっ、映司」

「お、お邪魔する」

一夏と篠ノ之がいた

「どうしたのですか映司さん？」

「誰が来たの？」

そこへさらにシャルとセシリアまで来てしまった

「「「「あ！！！！！」」」」

「はぁ～」

四十四話（後書き）

皆さんタカゴリバとシャゴリタ見るとしたらどっちがいいですか？

四十五話

「家に来るなら連絡くらいしろよ。こっちもいろいろ準備したのに」

「悪い、悪い。前に映司と俺の家がけっこう近いって言ってたじゃんか。ちょうど暇だったし箒を誘って来たんだが、つい連絡するのを忘れてたよ」

「す、すまなかった。その一夏がすでに連絡してあるものだと思っていたから……」

冷蔵庫を覗いてみたが、さすがにこの人数分の食材はなかったので出前でざるそばを注文した

そしてリビングで昼食のざるそばをすすりながら一夏と篠ノ之は答える

「別にいいでしょ。それとも何？いきなりこられると困るわけ？エロいものでも隠すわけ？」

「はぁ～、んなもんねぇーよ」

（（（（（……ほっ））））））

鈴の返答に安堵する四人

「ちなみに私は突然やってきて驚かせてやろうと思ったのだ。どうだ、嬉しいだろう」

そばつゆに次の麺をいれながら、しれっとラウラがそう告げる

（（（この自信が時に羨ましい……））））

セシリア、鈴、シャルの三人は、全く同時にそう思ったのだった

「んでこの後どうすんだ?俺ん家の中がいいんだよな?」

こくん、と一糸乱れぬ動きで全員が頷く

（外になんか出たら台無しじゃない、バカ）

（なにか、今まで知ることの無かったことの一つは得たいものですわ）

（映司の趣味もまだ訊けていないし）

（亭主として嫁の家の中は一通り把握しておかなければならないからな）

そんなことを各々に想いながら、鈴、セシリア、シャルとラウラはざるそばを食べ終える

「とりあえず一回俺の部屋に行くか」

（（よしっ!!））

未だ映司の部屋を見ていない鈴とラウラにとってその一言はとても嬉しいものだった

・・・・・・

「ほぅ、ここが嫁の部屋か」

「意外に綺麗にしてるわね」

ジロジロと部屋を見渡すラウラと鈴

「まーな。さてと」

何かないかと押入れを開けると

「あれ？その飾られているバスケットボールは？」

一夏がいろんなとこにメッセージが書かれているバスケットボールを指差し聞いてきた

「ああ、これか。俺がＩＳ学園に行くと知ったチームメイトのみんながくれたんだよ」

「へぇ～、映司ってバスケやってたんだ」

「まあな。はいこれ、そんときの写真」

一夏達にアルバムを渡した

「おぉ～、映司かっこいいな」

「そうだな。普段の様子からでは想像出来ないな」
（（（（（……ほ、欲しい）））））
「う～ん、将棋じゃあ二人しか出来ないし、テレビゲームは確か鈴が苦手って言ってたから駄目だし、何かないか……あっ！これなら大丈夫かな？」
そういって映司が取り出したのはモノポリーだった
「これってモノポリーだよね？」
シャルが質問してきた
「そう。簡単にルールを説明するとサイコロでコマを進めながら店の名前が書かれたマスを買っていき、もし相手が自分の持っているマスに止まったら通行料を取っていき最終的に資産を最も多く持っていた人が勝利っていう感じだな」
「だいたいそんな感じだね。でもこれ人数が合わないよ？」
「そうだな……二人一組のペアを三つ作って、余りの人は一人でやるということでいいか」
「ああ、それでいいぞ」
「わたしもそれで構わんぞ」「「「「賛成！！！！」」」」
（（（（絶対に映司（さん）とペアに……））））

「とりあえずクジでペアを決めるか」・
・　・　・
・　・
「またあんたなの！！！」
「それはこっちのセリフですわ！！！」
セシリア&鈴ペア
「頑張ろうねラウラ」
「あぁ、こうなったら嫁に勝つぞ」
シャル&ラウラペア
「よろしくな箒」
「あ、ああ／／／」
一夏&箒ペア
「さて、やりますか」
映司という組み合わせになった

各ペアにランダムで二枚の店の権利書を配り、ゲームが始まった

「それじゃ、スタートね」
鈴がサイコロを振り、ゲームが開始される

「えーと、三と四だから七と」

コマを進め止まったマスを見るとチャンスとなっていた

「鈴さんナイスですわ。ここはわたくしが引きますわ」

「ちょっとあんた何勝手に――――」

鈴が止めようとしたが、セシリアはチャンスカードの山から一枚引いてしまった
カードの内容を見てみると
『各プレイヤーに五十万円ずつ支払う』

「あ、あんた何やってんのよ！！」

「し、仕方ないじゃないですか！！」

言い争っている二人を無視して今度はシャルがサイコロをふった

「五と一だから、六だね」
止まったマスはたこ焼き屋となっていた

「あ、その店のカードは俺が持っているぞ」

一夏がそう言った

「通行料いくら?」

「ええっと六万円だな」

「わかったよ。はいこれ」

一夏達に六万円を支払い、一夏の番となった

「二と一だから、三か」

止まったマスはスキーとなっていた

「誰もスキーのカードは……持ってないな。じゃあ、とりあえずこの店を買うよ」

購入価格の六十万円を払いそのマスは一夏達のものとなり、最後に映司の番となった

「二と三だから五で、ええっと南鉄道か。誰も持ってないし買うとするか」

映司も二百万円を払い、南鉄道のカードを買いまたセシリア達の番となった

・・・・・

・　・

数十周したところでとりあえず勝負がついた

まず一位は

「序盤で富士山、東京タワーが手に入ったのがデカかったな」

だんとつで映司であった　最も通行料が高いグループの二つを手にいれたのが大きな勝因の一つとなった

少し差があるが二位は

シャルロット&ラウラペアとなった

「おしかったね」

「ああ。ここまで差が開くとはな」

三位は

「シャルロット達にずいぶんやられたな」

「あれさえなければ、神谷と一位争い出来ていたのだがな」

一夏&箒ペアとなった

もちろん最下位は

「鈴さんがことごとく他の方が所有している店の目に止まるから負けたんですわ！！！」

「あんたが序盤でチャンスカードなのにピンチにしたからでしょ！！」

セシリア＆amp;鈴ペアとなった

楽しい時間はあっという間に過ぎていくもので、時刻が既に五時を過ぎていた

「みんな何時までいるの？夜までいるなら、夕食の買い出しに行かなければならないんだが」

「夜は私が料理を作ろう。急におしかけてしまったからな」

「そうね！あたしの腕前を披露してあげちゃおうかしらね」

「じゃ、じゃあ僕も作り側で参加しようかな」

「無論、私も加わろう。軍ではローテーションで食事係があったからな、期待しろ」

「そういえば、前にわたくしのお弁当を食べてからずいぶん経ちますわね。そろそろ恋しくなってきたのではなくて？」

「ははは～、そだね。とりあえず六時くらいに出るか。近くにスーパーがあるから、そこに行くとしよう」

そんなこんなで話がまとまり、少し雑談に花を咲かせていると、時

間はすぐに過ぎ去っていた

四十五話（後書き）

やっと原作四巻が終わった

この後は……どしよ

四十六話（前書き）

スラムダンクも一昨日で終わったし、火曜の楽しみが……

四十六話

「でやあああああっ！！」

ガギィンッ！と鋭く重い金属音を響かせ、一夏とタトバコンボの映司は刃を交えて対峙する

九月三日
二学期初の実践訓練は、男同士で始まった

「くっ……！」

「序盤から飛ばしすぎなんだよ」

最初こそ一夏も善戦していてたものの次第に押され始めてきた

その理由は単純にして明快第二形態になった白式の、さらに加速した燃費の悪さである

「もう終わりか？」

「まだまだぁっ！」

そう言って刀を振るう一夏だったが、その《雪片弐型》もすでに『零落白夜』の輝きはなく、通常の物理刀になっている

『トリプル！　スキャニングチャージ！』

メダジャリバーに三枚のセルメダルを投入し、スキャンしてから映

司も振り、雪片弐型と鍔迫り合いとなった

だがスキャニングチャージされている状態のメダジャリバーと物理刀となってしまっている雪片弐型ではメダジャリバーの方が上

雪片弐型を弾き一夏に切りかかる

だが一夏は飛んでそれを避けてひとまず距離を取ろうとしたが

「逃がすかよ」

タカとトラのコアメダルからそれぞれ違うコアメダルに変え

【サイ！ウナギ！バッタ！】

サウバとなり、ウナギウィップで一夏を捕らえ、こっちに引き寄せてからバッタのジャンプ力で一夏のとこまで跳び、サイヘッドのグラビドホーンで頭突きした

「ぐぅっ！」

重い一撃を受けてしまい、地上に叩きつけられてしまった一夏が立ち上がろうとしたら映司がコミカルなリズムを刻みながら目の前まで近づいていた

「まだだ！」

一夏は雪片弐型を振るうも懐に入られ胴体にまた頭突きを、そして突っ張り、数度の蹴りからの回し蹴り、裏拳の攻撃のラッシュをく

らう

それが数回繰り返されたところで、試合終了を告げるアラームが鳴り響いた

――――初の男同士の対決は、言うまでもなく映司の勝利であった

・
・　・
・　・　・

「ゴチになりま～す」

「ぐう・・・・・・」

前半戦、後半戦ともに映司の勝利で幕を閉じた実戦訓練

その後片付けを終えて、いつもの面々は学食にやってきていた

「はぁ……。それにしてもなんでパワーアップしたのに負けるんだ……」

「だから、燃費悪すぎなのよ。アンタの機体はただでさえシールドエネルギーを削る仕様の武器なのに、それが二つに増えたんだからなおさらでしょ」

「うーん……」

それだけならまだしも、白式の背部ウイングスラスターが大型化に

伴い、エネルギーを大量に使用してしまった
瞬時加速のチャージ時間は約三分の二、最大速度は一・五倍になったとはいえ、ああまで大メシぐらいになるとは
「だあぁっ！やらなくてはいけないことが山積みじゃないか！」
「ま、まあ、アレだな！そんな問題も私と組めば解決だな！」
どどん、と腕組みで啖呵を切ったのは箒だった
箒の専用機『紅椿』のワンオフ・アビリティー『絢爛舞踏（けんらんぶとう）』は一夏の専用機『零落白夜』とはまったく逆――つまり、最小のエネルギーを増大させる性質を持つ
それだけではなく、本来難しいはずのＩＳ同士のエネルギー譲渡を接触だけで簡単に行えるという側面もあるらしい
「それにしても映司。あんたって本当強いよね」
「確かにそうですわね。この中だったら一番ではありませんか？」
「ん～……興味ないからどうでもいいわ」
「でもさ思ったんだけど、映司ってこの中で誰のＩＳと一番相性が良いんだろ？」
シャルがふとそんなことを聞いてきた
「相性が良い相手ね～。俺が誰にでも合わせるように出来るからな。これと言って思いつかないな」

「何を難しそうな顔をしているか。お前は私の嫁だろう。故に私と組め。」

「ざーんねん。映司はあたしと組むの。甲龍は近接も中距離もこなすから、オーズと相性いいのよ」

「な、何を勝手な……！？ゴホン！それならこのわたくし、セシリア・オルコットも遠距離型として立候補しますわ」

「それなら僕も立候補するよ。近・中・遠どこでもできるからいろいろとサポートできるし、映司の戦い方にも合ってると思うよ」

「んー……。別に最近ペア参加のトーナメントとかあるわけじゃないし」

「で？結局あんたは誰と組みたいのよ？」

「相性云々の話じゃなかったのかよ……。そうだな、同性ということもあるから一夏はどうでしょうか？」

バシッ

四人から無言でグーパンされた

「なぜ？」

「「「「ふん」」」」

・・・・・・・

映司Ｓｉｄｅ－

「……遅刻の言い訳は以上か？」

目の前で一夏が織斑先生に叱られていれ

（何やってんだか……）

一夏が白式の調整を行うから先に行っててくれと言われて先に来たものの、結局一夏が来たのは授業開始から五分後であった

「いや、あの……あのですね？だから、見知らぬ女生徒が――」

「ではその女子の名前を言ってみろ」

「だ、だから！初対面ですってば！」

「ほう。お前は初対面の女子との会話を優先して、授業に遅れたのか」

「ち、違っ――」

「デュノア、ラピッド・スイッチの実演をしろ。的はそこの馬鹿者で構わん」

「……」

一夏は織斑先生に呼ばれたシャルに視線を送る

にこっ、と極上の笑みが帰ってきた

「それじゃあ織斑先生、実演をはじめます」

「おう」

ふわりと空中へと進み出るシャル

その手に光の粒子が集まり、銃器を構成していく

「あ、あの、シャル……ロット、さん？」

「なにかな、織斑くん？」

額に血管マークが見えるシャル。一夏は何故シャルが怒っているのか理解できなかった

「はじめるよ、リヴァイヴ」

「ま、待っ――――」

バラララララッ！！

一夏の制止の声は残念ながらシャルには届かなかった

そんな一夏を見て合掌した映司であった

四十六話（後書き）

一夏はシャルの八つ当たりの被害者となってしまいますた

四十七話

映司Ｓｉｄｅ－

翌日。ＳＨＲと一限目の半分を使っての全校集会が行われた
内容は、今月中程にある学園祭についてである

（はぁ～、やかましいな……）

「それでは、生徒会長から説明をさせていただきます」

静かに告げたのは生徒会役員の一人の声で、ざわつきがさーっと引き潮のように消えていく

「やあみんな。おはよう」
「！？」

前にいた一夏が一瞬ピクッ！！となったと思えば生徒会会長を唖然とした表情で見ている

（知り合いなのか？）

「ふふっ」

いきなり笑みを浮かべる生徒会長

それと同時に一夏は俯いてしまった

とりあえず生徒会長の言葉に耳を傾ける

「さてさて、今年は色々と立て込んでいてちゃんとした挨拶がまだだったね。私の名前は更識楯無（さらしきたてなし）。君たち生徒の長よ。以後、よろしく」

にっこりと微笑みを浮かべて言う生徒会長は、異性同性を問わず魅了するらしく、列のあちこちから熱っぽいため息が漏れた

「では、今月の一大イベント学園祭だけど、今回に限り特別ルールを導入するわ。その内容というのは」

閉じた扇子を慣れた手つきで取り出し、横へとスライドさせる。それに応じるように空間投影ディスプレイが浮かび上がった

「名付けて、『各部対抗織斑一夏・神谷映司争奪戦』！」

ぱんっ！と小気味のいい音を立てて、扇子が開く。それに合わせて、ディスプレイには一夏と俺の写真がデカデカと映し出された

「え……」

「えええええええ？？？？？？？っ！？」

「……」

割れんばかりの叫び声に、ホールが冗談ではなく揺れた

一斉に俺と一夏へ視線が集まってくる

「静かに。学園祭では毎年各部活動ごとの催し物を出し、それに対して投票を行って、上位組は部費に特別助成金が出る仕組みでした。しかし、今回はそれではつまらないと思い――――」

びしっ、と扇子で俺と一夏を指す生徒会長

「織斑一夏及び神谷映司を一位の部活動に強制入部させましょう！」

再度、雄叫びが上がる

「うおおおおおっ！」

「素晴らしい、素晴らしいわ会長！」

「こうなったら、やってやる……やぁぁぁってやるわ！」

「今日からすぐに準備はじめるわよ！秋期大会？ほっとけ、あんなん！」

さらに騒がしくなる女子達

「というかか、俺の了承とか無いぞ……」

「……」

俺と一夏が生徒会長に目をやると

「あはっ♪」

ウインクを返された

「……ＯＫ、ＯＫ。手加減無しでいかせてもらうよ」

ドライバーにサイ、ゴリラ、ゾウのコアメダルを入れ

「変しｎ「落ち着け映司ーー！！」チッ」

映司達の気持ちもいざ知らず女子達は未だ騒いでいる

「よしよしよしっ、盛り上がってきたぁぁ！」

「今日の放課後から集会するわよ！意見の出し合いで多数決取るから！」

「最高で一位、最低でも一位よ！」

一度火が付いた女子の群は止まらない

かくして初耳＆未承諾のまま、一夏と俺の争奪戦が始まったのだった

・　・　・　・　・

同日、教室にて放課後の特別ＨＲ。今はクラスごとの出し物を決めるため、わいのわいのと盛り上がっていた

「えーと……」

クラス代表として、意見をまとめる一夏

（内容が『織斑一夏と神谷映司のホストクラブ』『織斑一夏と神谷映司のツイスター』『織斑一夏と神谷映司のポッキー遊び』『織斑一夏と神谷映司の王様ゲーム』……ないな）

「却下」

えええええええー！！と大音量サラウンドでブーイングが響く。まあ、当然の結果だ

「あ、アホか！誰が嬉しいんだ、こんなもん！」

「私は嬉しいわね。断言する！」

「そうだそうだ！女子を喜ばせる義務を全うせよ！」

「織斑一夏と神谷映司は共有財産である」

「他のクラスから色々言われてるんだってば。うちの部の先輩もうるさいし」

「助けると思って！」

「メシア気取りで！」

（学園祭の日は本気で休もうか……だがしかし……いい案が出ねぇ～）

そんなことを思ってしまう映司だった

一夏は織斑先生に助けを求めようとしたが

「時間がかかりそうだから、私は職員室に戻る。あとで結果報告に来い」

バッサリ希望を断たれた

「山田先生、ダメですよね？こういうおかしな企画は」

「えっ！？わ、私に降るんですか！？」

頑張れ～、僕らの副担任

「え、えーと……うーん、わ、私はポッキーのなんかいいと思いますよ……？」

やや頬を赤らめながら言う副担任・山田真耶先生

詰んだな（、－ω－、）

「え、映司。何か意見あるか？」

「これといって特には」

（あっ、一夏がとうとう落ち込んだ）

「メイド喫茶はどうだ？」

そう言ってきたのはラウラだった

あまりの出来事にクラスの全員がぽかんとしている

「客受けはいいだろう。それに飲食店は経費の回収が行える確か、招待券制で外部からも入れるのだろう？それなら、休憩場としての需要も少なからずあるはずだ」

「え、えーと……みんなはどう思う？」

「いいんじゃないかな？映司と一夏には執事か厨房を担当してもらえばオーケーだよね」

そう言ったのはシャルだった

「織斑君と神谷君、執事！いい！」

「それでそれで！」

「メイド服はどうする！？私、演劇部衣装係だから縫えるけど！」

一気に盛り上がりを見せるクラス女子一同

さすがにこれを鎮めるというか、水を差すのはためらいがあるらしくこれといった反対意見を一夏は言わなかった

「メイド服ならツテがある。執事服も含めて貸してもらえるか聞いてみよう」

え？　と全員がまた目を丸くする中、ハッと気がついて咳払いをす

るラウラ

「――――ごほん。シャルロットが、な」

注目されたのが照れくさかったのか、わずかに顔を赤らめていることから

そして、いきなり振られたシャルは困った顔をするばかりだった

「え、えっと、ラウラ？それって、先月の……？」

「うむ」

（（あー、あの時のか））

心の中でそう呟いた映司、セシリアだった

「き、訊いてみるだけ訊いてみるけど、無理でも怒らないでね」

不安ぐにそう呟くシャルに、クラスの女子は声を合わせて『怒りませんとも！』と断言をする

かくして、一年一組の出し物はメイド喫茶改め『ご奉仕喫茶』に決まった

四十八話（前書き）

まさかあれは……ニンジャマンなのか

四十八話

映司Ｓｉｄｅ－

「はぁ～、話があるって言うから来てみてれば何なんだよこの状況は」

生徒会長が話があるみたいだから道場に来てくれと一夏から言われたので来たのだが

まず目に飛び込んできたのは、胴着で向かい合っている一夏と生徒会長だった

「わー。いっちーだ～」

とりあえず布仏がいたのでそちらにむかった

隣には、眼鏡に三つ編み、いかにも『お堅いが仕事はできる』風の人がいた

見る限り先輩だな

「あ、どうも」

とりあえずその先輩に軽く会釈した

「君が神谷君だよね。いつも妹から話しは聞いてるよ」

「えへへ～♪」

「……はぁ！？」

二人が姉妹だって……

「ふふ。予想通り驚いているね。私は布仏虚」

「は、はぁ。よろしくお願いします。ところで二人は会長さんとどういう関係なんですか？というよりなんで一夏と生徒会長は向かい合ってるんですか？」

「簡単に説明すると織斑君がお嬢様の挑発にのってしまって、こんな風になってしまったの」

「それと私達はむかーしから、更識家のお手伝いさんなんだよー。うちは、代々」

「へぇ～」

「さて、神谷くんが来たことだし勝負の方法を説明するけど、私を床に倒せたらキミの勝ち」

「え？」

「逆にキミが続行不能になったら私の勝ちね。それでいいかな？」

「え、いや、ちょっと、それは……」

あまりの内容に戸惑う一夏に、生徒会長がさらに言葉を追加する

「どうせ私が勝つから大丈夫」

「……」

なんともまあわかりやすいほど安い挑発をしてくる会長さん

「行きますよ」

「いつでも」

基本に忠実なすり足移動。そして、会長さんの腕を取る――が

「!?」

一瞬にして返され、そのまま一夏の体は畳にしたたかに投げ落とされた

「う……」

「まずは一回」

今のままでは、勝てないと感じたのか真剣な顔つきになった一夏

「……」

「ん？来ないの？それじゃあ私から――行くよ」

どんっ、といきなり一夏の間合いへと急接近する会長さん

「あれって……」

「あれは古武術の奥義が一つ『無拍子』だね」

（ケンイチでそんなようなものがあったような、ないような……
……どうだっけな？）

「しまっ――――」

ぽん、ぽん、ぽん、と肘、肩、腹に軽く掌打を打たれる。そして、
一夏の間接が反射的に強ばった一瞬に、両肺へと双掌打が叩き込まれた

「がっ、はっ……！」

「足下ご注意」

ズドンッ！！と、無防備になった一夏を背中から思いっきり畳に倒される

「これで二回。まだやる？」

襟元一つ乱さず、会長さんは優しい笑みを一夏に向ける

「どう会長は？」

ふと虚さんが俺に尋ねてきた

「さすがですよね～。会長をやっていることもあってか、お強いことで」

「ふふ。そうで「でも、一夏もあれで終わらないですよ」え？」

「まぁ、見てればわかりますよ。というか本音いつまでひっついてんだよ」

一夏達の勝負が始まってからずっと腕にしがみついている

「えへへ～、いっちーが名前で呼んでくれた～♪」

何がそんなに嬉しいことやら

「まだまだ、やれますよ……！」

一夏が深く吸い込んだ息を吐くと同時に全身で跳ね上がった

「ん。がんばる男の子って素敵よ」

「それはどうも……」さっきまで震えた足をなんとか抑えた一夏は深く、二度呼吸する

「む。本気だね」

「……」

一夏は無言の返答に、会長さんもまた無言で応え、互いに必殺を狙った細く鋭い緊張感が張りつめていく

「！」

最初のように仕掛けたのは一夏だった
しかも、今までとは違う早さだ

（話しには聞いていたがこれが『零拍子』か……）
さすがの会長さんも一瞬驚き、半歩下がって間合いを取ろうとするが一夏の方が早く
一夏は生徒会長の腕を取って、力任せに投げ飛ばそうとするが――

――

ズドンッ！

「がはっ！」

今度は前のめりに、一夏は胸から畳へと叩き込まれた
しかし、それを気合いで振り切り、一夏は生徒会長の足首を掴んだ

「あら」

「今度こそもらったぁっ！」

足首を力任せに真上へと投げ、空中でひっくり返った生徒会長の胴を取る

「甘ーい」

「なぁっ！？」

だが、会長さんは右腕を畳に突き出し、それを軸にくるりと回って一夏の捕縛を振り切る。同時に、カポエラキックが炸裂

「マーシャルアーツに古武術にカポエラか……会長さんは随分と多趣味なんですね」

「そんくらいできないとここの生徒会長は勤まりませんから」

「でやあああああっ！」

男の意地か、吹っ飛ばされた一夏は強引に腕と脚で着地し、すぐさま飛び出す

加速して、そのまま殴りかかるような勢いで先輩に掴みかかった

――――すると

「あっ……」

「……はぁ～」

「きゃん」

一夏は勢い余って、胴着が思いっきり開かれ、ブラジャーに包まれた会長さんの豊満なバストがまろび出る
「一夏くんのえっち」
「なぁっ！？」
言い訳できず動揺する一夏はこれ以上ないほどに隙だらけ。生徒会長は特に悲鳴を上げるでもなく素早く一夏の腕を払い落とした
そして、次の瞬間、払い落とされた一夏に空中コンボがお見舞された
「おねーさんの下着姿は高いわよ？」
くすっ、と楽しそうな笑い声
「さてと、神谷君？」
「はい？」
その瞬間会長さんの拳が目の前に迫ってきていた
バシッ！！
即座にハエ叩きの要領で眼前の拳を叩きなんとか防いだ
「へえ」

何やら嬉しそうな顔で俺を見る会長さん

「あっぶな。いきなり何するんですか」

「さっきも言ったでしょ?私の下着姿は高いって。見たよね?」

「見たくて見たわけではないですよ」

いつものだるそうな顔でそう平然と答える

「それはそれで落ち込むものがあるんだけどね」

「会長そのくらいで許してあげたらどうですか?」

虚さんが仲裁に入ってくれた

「うーん。それじゃあ、一夏くんを保健室まで運んでくれる?そしたら許してあげる」

「はぁ〜、了解了解。では失礼します」

「いっちー、またね〜」

気絶した一夏を担ぎ上げ保健室へと運ぶため道場を後にした

・・・・

・　・

映司の後ろ姿を眺める楯無

「どうしたのですか？」

「実はさっきの拳、割と本気だったんだよね～」

「そ、そんな馬鹿な」

まさかの発言に驚く虚

「本当だって。なのにこれといった驚きもせずに普通に対処できるなんて」

「神谷映司くんか。ふふっ……」

くすっと笑みを浮かべながら映司を見つめる楯無であった

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4613v/

IS-オーズの力を使いし者-

2011年11月28日03時47分発行